

佐賀県文化財調査報告書第168集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（4）

# 中原遺跡 I



2007年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第168集  
西九州自動車道建設に係る文化財調査報告（4）

中原遺跡 I

二〇〇七年三月

佐賀県教育委員会





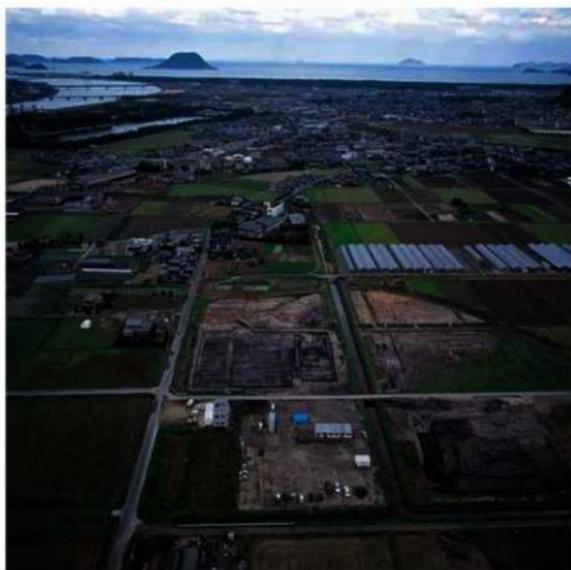
松浦川流域空中写真



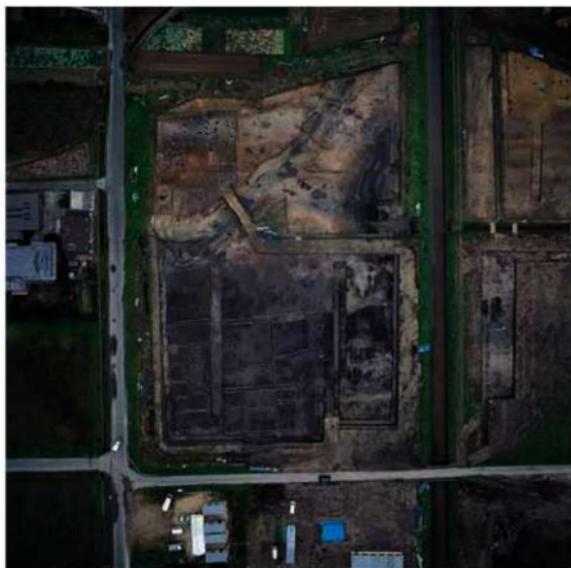
宇木川・半田川流域空中写真 1



宇木川・半田川流域空中写真 2



遺跡遠景



2区全景空中写真



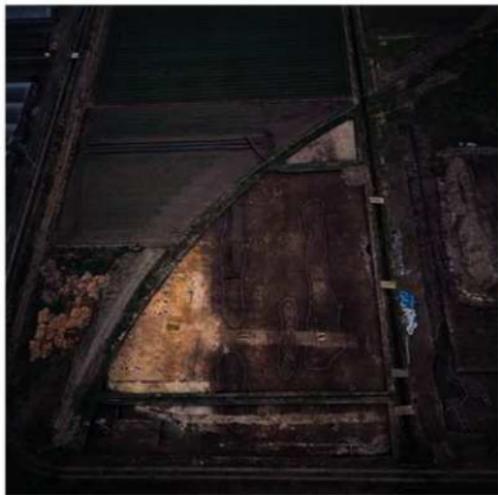
2区SX246土層



2区上層水田



2区SD256流路と鏡山



4区全景空中写真



2区SB202掘立柱建物



4区近景



2区SX246出土土器群



2区SD256出土土器群



子持勾玉



舟形木製品



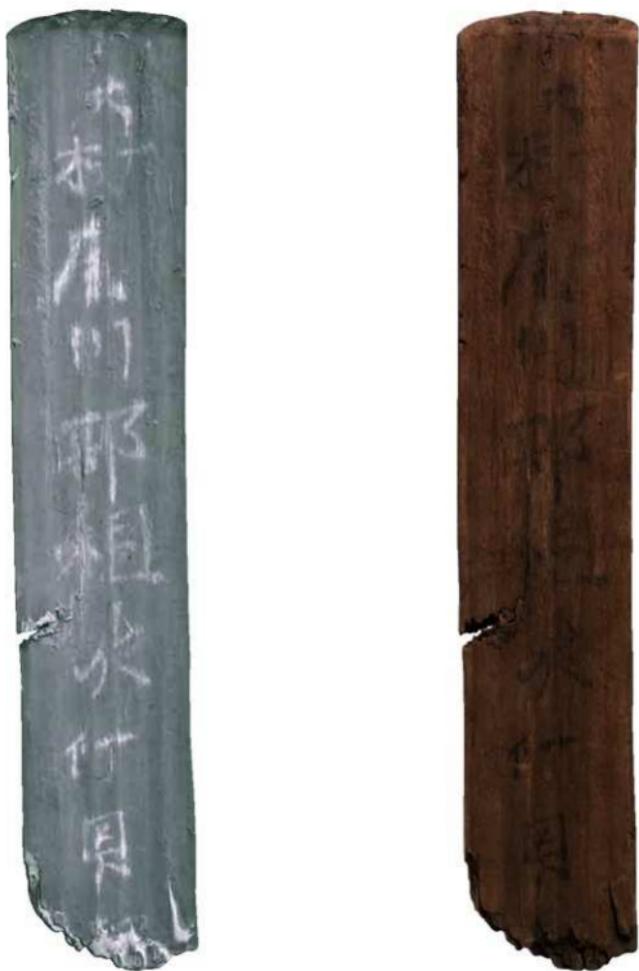
2区SD256出土木製品



転用碗集合写真



中空円面碗



1号木簡



墨書土器

佐賀県文化財調査報告書第168集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（4）

# 中原遺跡 I

2007年3月

佐賀県教育委員会

## 序

この報告書は佐賀県教育委員会が国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の委託をえて唐津市教育委員会の協力のもと平成11～13年度に実施した西九州自動車道唐津道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告です。『堂の前・井ゲタ遺跡』・『梅白遺跡』・『大江前遺跡』につづく3冊目にあたります。

中原遺跡は弥生～平安時代前期までの複合遺跡で、各時代において重要な遺構・遺物が発見されました。弥生・古墳時代の集落と墳墓などから青銅鏡や銅矛・銅釦などが、古代の官衙関連遺物としては木簡・墨書土器や奈良三彩・緑釉陶器などが出土いたしました。なかでも防人が墨書された8号木簡は全国的な注目を浴びました。

今回の報告は中原遺跡の1区～4区、8区、9-1区であり、主に古代の遺構・遺物が発見されました。中でも大村戸主ではじまる1号木簡は地名、人名が書かれた重要な文字資料です。

本書が今後の学術・文化向上に少しでも役立てば幸いに存じます。発刊にあたり多難な調査作業に従事していただいた地元の皆様、整理作業に従事していただいた調査事務所の方々並びに埋蔵文化財の保護に御理解頂きました佐賀国道事務所に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成19年3月31日

佐賀県教育委員会  
教育長 吉野 健二

## 例 言

1. 本書は西九州自動車道唐津-浜玉道路建設に伴い平成11~13年度に実施した唐津市原所在の中原遺跡の発掘調査報告書であり、西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書の第4冊である。
2. 発掘調査は国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の委託を受け、佐賀県教育委員会が主体となり唐津市教育委員会の協力を得て実施した。
3. 本書の執筆分担は目次に記す。
4. 報告書作成にあたっての整理作業は遺物復元、遺物実測は佐賀市高木瀬事務所で行い、主に製図、遺物写真撮影、編集などを唐津中原事務所で行った。  
また、写真現像焼付は唐津中原事務所で行った。  
作業分担は次のとおりである。  
遺物復元整理・・・新井久美子・土井マサ子（高木瀬事務所）、浦田照千代・桑代ゆかり・徳田まり子  
松本いつ子・脇山邦子・渡部直美（中原事務所）  
遺物実測・製図・・・蒲原淑子・末吉由紀子（高木瀬事務所）  
菊池孝子・中島美佳・美浦あずさ（中原事務所）  
遺物写真撮影・・・小松 譲  
写真現像焼付・・・市丸宮子（中原事務所）  
写真整理・編集補助・・・池内理恵
5. 遺物実測は作業員の補助のもとに調査員が、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。
6. 木簡解説に際して下記の方々から指導・助言を得た。  
館野和己（現奈良女子大学）・渡辺見宏・馬場基・吉川聡（奈良文化財研究所）・狩野久（京都橘女子大学）  
平川南（国立歴史民俗博物館）・田中史生（関東学院大学）・高島英之（群馬県教育委員会）  
(順不同・敬称略)
7. 本書の編集は川副麻理子・美浦雄二の協力のもと小松譲が行った。

## 凡 例

1. 遺跡の略号は下記のとおりである。  
中原遺跡（NAK）
2. 遺構種別記号は次のとおりである。  
SB：掘立柱建物跡、SK：土坑、SE：井戸跡、SD：溝跡・溝状遺構、SF：畦畔、SA：杭列、SX：不明遺構
3. 各遺構番号は（遺構種別記号-番号）で連番とした。本書でも発掘調査時の遺構番号を原則的にそのまま用いた。但し掘立柱建物跡の柱穴は調査後に変更したものもある。また一部の遺構で追加して遺構番号をつけたものもある。
4. 遺物番号は遺構ごとに連番として本文中では挿図番号-遺物番号で表記した。写真図版遺物も同じである。
5. 本書に用いた方位はすべて国土座標第Ⅱ系の座標北である。
6. 遺物および実測図の検索・照合のため、実測遺物全てに登録番号を付け表に付記した。
7. 遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図は佐賀県文化財調査研究資料室に保管する。

# 目 次

I. 調査の経過（小松）	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	3
3. 調査の方法と経過	5
(1) 調査の方法	5
(2) 調査の経過	6
II. 遺跡の位置と環境（小松）	10
1. 地理的環境	10
2. 歴史的環境	12
III. 調査の概要（小松）	17
1. 遺跡の概要	17
IV. 1区・8区・9-1区の調査（遺構：小松、遺物：美浦）	24
1. 1区の調査	24
2. 8区の調査	24
3. 9-1区の調査	24
V. 2区の調査	27
1. 概要（小松）	27
2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物（小松）	27
(1) SX246土器集中部	27
(2) 下層水田跡	50
(3) 自然流路跡	55
3. 古代の遺構と遺物（遺構：小松、遺物：美浦）	56
(1) 掘立柱建物跡、柵列	56
(2) 井戸跡	60
(3) 土坑跡	61
(4) SD256溝跡（木簡・木製品：小松、その他の遺物：美浦）	61
(5) その他の溝跡	103
(6) 上層水田跡	105
(7) 包含層出土遺物（美浦）	105
VI. 3区の調査（遺構：小松、遺物：美浦）	132
1. 概要	132
2. 遺構	132

(1) 掘立柱建物跡	132
(2) 土坑	135
(3) 溝跡	135
3. 遺物	135
Ⅶ. 4区の調査（遺構：小松、遺物：美浦）	136
1. 概要	136
2. 遺構と遺物	136
(1) 掘立柱建物跡	136
(2) 柵列	139
(3) 土坑	139
(4) 溝跡	141
Ⅷ. 総括	143
1. まとめ（美浦・小松）	143
2. 肥前国松浦郡の交通路と官衙 - 中原遺跡の解釈をめぐって - （小松）	145
3. 移動式竈について（美浦）	157
4. 唐津市大江前遺跡出土の弥生早～前期土器に付着した炭化物の炭素14年代測定	162

（国立歴史民俗博物館研究部 藤尾慎一郎・小林謙一）

## 挿図目次

図-1	路線図 (1/30000).....	2	図-39	2区下層(古墳)水田畦畔, 杭 (1/400).....	53
図-2	グリッド配置図 (1/2000).....	8	図-40	2区下層(古墳)水田畦畔芯材, 杭 (1/80).....	53
図-3	遺跡位置図.....	10	図-41	2区下層水田出土土器 (1/3)・ 木製品 (1/4).....	54
図-4	旧海岸線・砂丘列地形分類図.....	11	図-42	2区自然流路跡 (1/400).....	55
図-5	周辺遺跡分布図1 (1/100000).....	13	図-43	2区掘立柱建物跡 (1/80).....	57
図-6	周辺遺跡分布図2 (1/70000).....	15	図-44	2区掘立柱建物跡 (1/80)・ 出土土器 (1/3).....	58
図-7	調査区位置図 (1/6000).....	18	図-45	2区SE244 (1/60)・SK221 (1/30)・ SK204 (1/40).....	59
図-8	中原遺跡全調査区遺構配置図 (1/4000) .....	19・20	図-46	2区SE244出土土器 (1/3)・木製品 (1/4)・ 井戸枠 (1/12).....	60
図-9	中原遺跡全景.....	21	図-47	2区SD256土層 (1/80).....	62
図-10	遺跡概略.....	22	図-48	2区SD256出土土器1 (1/3).....	64
図-11	1区出土土器 (1/3).....	24	図-49	2区SD256出土土器2 (1/3).....	65
図-12	8区, 9-1区遺構配置図 (1/600).....	25	図-50	2区SD256出土土器3 (1/3).....	69
図-13	9-1区出土子持勾玉 (1/2).....	26	図-51	2区SD256出土土器4 (1/3).....	70
図-14	2区西壁土層(ヨコ1/200, タテ1/40) .....	28	図-52	2区SD256出土土器5 (1/3).....	71
図-15	2区遺構配置図 (1/400).....	29・30	図-53	2区SD256出土土器6 (1/3).....	72
図-16	2区基本土層模式図.....	31	図-54	2区SD256出土土器7 (1/3).....	73
図-17	2区SX246遺物出土状況1 (1/40).....	32	図-55	2区SD256出土土器8 (1/3).....	74
図-18	2区SX246遺物出土状況2.....	33	図-56	2区SD256出土土器9 (1/3).....	75
図-19	2区SX246出土土器1 (1/3).....	34	図-57	2区SD256出土土器10 (1/3).....	76
図-20	2区SX246出土土器2 (1/3).....	35	図-58	2区SD256出土土器11 (1/3).....	77
図-21	2区SX246出土土器3 (1/3).....	36	図-59	2区SD256出土土器12 (1/3).....	78
図-22	2区SX246出土土器4 (1/3).....	37	図-60	2区SD256出土土器13 (1/3).....	79
図-23	2区SX246出土土器5 (1/3).....	38	図-61	2区SD256出土土器14 (1/3).....	80
図-24	2区SX246出土土器6 (1/3).....	39	図-62	2区SD256出土土器15 (1/3).....	81
図-25	2区SX246出土土器7 (1/3).....	40	図-63	2区SD256出土土器16 (1/3).....	82
図-26	2区SX246出土土器8 (1/3).....	41	図-64	2区SD256出土土器17 (1/3).....	83
図-27	2区SX246出土土器9 (1/3).....	42	図-65	2区SD256出土土器18 (1/3).....	85
図-28	2区SX246出土土器10 (1/3).....	43	図-66	2区SD256出土土器19 (1/3).....	86
図-29	2区SX246出土土器11 (1/3).....	44	図-67	2区SD256出土土器20 (1/3).....	87
図-30	2区SX246出土土器12 (1/3).....	45	図-68	2区SD256出土土器21 (1/3).....	88
図-31	2区SX246出土土器13 (1/3).....	46	図-69	2区SD256出土土器22 (1/3).....	89
図-32	2区SX246出土土器14 (1/3).....	47	図-70	2区SD256出土土器23 (1/3).....	90
図-33	2区SX246出土土器15 (1/3).....	48	図-71	2区SD256出土土器24 (1/3).....	91
図-34	2区SX246出土土器16 (1/3).....	49	図-72	ヘラ記号.....	92
図-35	2区SX246出土土器17 (1/3).....	50			
図-36	2区SX246出土土器18 (1/3).....	51			
図-37	器台形土器・高杯脚部分類図.....	52			
図-38	2区SX246出土木製品 (1/3).....	52			

図-73	2区SD256出土木製品1 (1/8, 1/4) ……94	図-92	4区遺構配置図(1/500)……………137
図-74	2区SD256出土木製品2 (1/4) ……95	図-93	4区SB402・404・405 掘立柱建物跡(1/80)……………138
図-75	2区SD256出土木製品3 (1/4) ……96	図-94	4区SA418・SA420(1/60)……………139
図-76	2区SD256出土木製品4 (1/4, 1/8) ……97	図-95	4区SK401・403・406・409・412 土坑(1/20, 1/30)……………140
図-77	2区SD256出土木製品5 (1/4) ……98	図-96	4区SK401・406・412出土土器(1/3) ……………142
図-78	2区SD256出土木製品6 (1/4) ……99	図-97	駅路想定図……………146
図-79	2区SD256出土木製品7 (1/4, 1/3) 100	図-98	唐津地域の主要古代遺跡と交通路 (1/10,000)……………148
図-80	2区SD256出土木製品8 (1/4, 1/3) 101	図-99	中原遺跡遺構配置図……………151
図-81	2区SD256出土1号木簡(1/1)……………103	図-100	中原遺跡出土遺物……………152
図-82	2区SD256出土9号木簡(1/1)……………104	図-101	千々賀古園遺跡建物群・出土遺物……………154
図-83	2区溝跡出土土器(1/3)……………105	図-102	佐賀県内出土移動式竈変遷図(1/15) 158
図-84	2区上層水田跡(1/300)……………106	図-103	暦年校正の確率密度分布1 (IntCa104による)……………170
図-85	2区上層水田跡出土土器(1/3)……………107	図-104	暦年校正の確率密度分布2 (IntCa104による)……………171
図-86	2区包含層出土土器(1/3)……………108		
図-87	2区出土土器(1/3, 2/3)……………109		
図-88	3区遺構配置図(1/200)……………133		
図-89	3区掘立柱建物跡(1/60)……………134		
図-90	3区SK313・SK314土坑(1/30)……………135		
図-91	3区出土遺物(1/3)……………135		

## 表目次

表-1	調査担当者一覧表……………5	表-19	2区SD256出土遺物一覧表(6)……………123
表-2	中原遺跡各調査区調査期間・担当者一覧 ……………5	表-20	2区SD256出土遺物一覧表(7)……………124
表-3	掘立柱建物跡一覧表……………23	表-21	2区SD256出土遺物一覧表(8)……………125
表-4	土坑・井戸跡一覧表……………23	表-22	2区SD256出土遺物一覧表(9)……………126
表-5	3区・9-1区出土土製品観察表……………26	表-23	2区SD256出土遺物一覧表(10)……………127
表-6	2区SX246出土土器観察表(1)……………110	表-24	2区SD256出土遺物一覧表(11)……………128
表-7	2区SX246出土土器観察表(2)……………111	表-25	2区SD256出土遺物一覧表(12)……………129
表-8	2区SX246出土土器観察表(3)……………112	表-26	2区その他の遺構出土土器一覧表……………130
表-9	2区SX246出土土器観察表(4)……………113	表-27	2区包含層出土土器一覧表(1)……………130
表-10	2区SX246出土土器観察表(5)……………114	表-28	2区包含層出土土器一覧表(2)……………131
表-11	2区SX246出土土器観察表(6)……………115	表-29	2区出土土器一覧表……………131
表-12	2区出土木製品一覧表(1)……………116	表-30	1区・4区出土土器観察表……………142
表-13	2区出土木製品一覧表(2)……………117	表-31	資料にみる松浦郡の古代行政組織……………145
表-14	2区SD256出土遺物一覧表(1)……………118	表-32	佐賀県内移動式竈一覧1……………159
表-15	2区SD256出土遺物一覧表(2)……………119	表-33	佐賀県内移動式竈一覧2……………160
表-16	2区SD256出土遺物一覧表(3)……………120	表-34	試料の重量と炭素含有率……………167
表-17	2区SD256出土遺物一覧表(4)……………121	表-35	大江前遺跡出土土器に付着した炭化物の 年代……………168
表-18	2区SD256出土遺物一覧表(5)……………122		

## 巻頭図版目次

1, 松浦川流域空中写真……………	巻頭図版 1	2 区SB202掘立柱建物……………	巻頭図版 6
2, 宇木川・半田川流域空中写真 1 ……	巻頭図版 2	4 区近景……………	巻頭図版 6
宇木川・半田川流域空中写真 2 ……	巻頭図版 2	7, 2 区SX246出土土器群……………	巻頭図版 7
3, 遺跡遠景……………	巻頭図版 3	8, 2 区SD256出土土器群……………	巻頭図版 8
2 区全景空中写真……………	巻頭図版 3	9, 2 区SD256出土木製品、子持勾玉、舟形木製品 ……………	巻頭図版 9
4, 2 区SX246土層……………	巻頭図版 4	10, 転用硯集合写真、中空凹面硯 ……	巻頭図版10
2 区上層水田……………	巻頭図版 4	11, 1号木簡……………	巻頭図版11
5, 2 区SD256流路と鏡山……………	巻頭図版 5	12, 墨書土器……………	巻頭図版12
6, 4 区全景空中写真……………	巻頭図版 6		

## 図版目次

PL. 1	1. 1 区全景（南から）……………175	PL. 6	1. 2 区SB213（北から）……………180
	2. 2 区南半下層自然流路1 （真上から）……………175		2. 2 区SB226（西から）……………180
PL. 2	1. 2 区南半下層自然流路2 （南西から）……………176		3. 2 区SB241・SA240 （真上から）……………180
	2. 2 区南半下層自然流路3（西から） ……………176	PL. 7	1. 2 区SE244検出状況（北から）…181
	3. 2 区南半下層自然流路検出状況 （西から）……………176		2. 2 区SE244完掘（北から）……………181
PL. 3	1. 2 区SX246（真上から）……………177	PL. 8	1. 2 区SE244井戸枠半裁状況 （北から）……………182
	2. 2 区SX246完掘状況（西から）…177		2. 2 区SE244井戸枠1（北から）…182
	3. 2 区SX246検出状況（西から）…177		3. 2 区SE244井戸枠2（東から）…182
	4. 2 区SX246土層（西から）……………177	PL. 9	1. 2 区SK207（西から）……………183
PL. 4	1. 2 区下層水田畦畔芯材遠景 （南から）……………178		2. 2 区SK208（東から）……………183
	2. 2 区下層水田畦畔芯材近景 （南から）……………178		3. 2 区SK214（南から）……………183
	3. 2 区下層水田畦畔芯材中出土 木製品 1 ……178	PL. 10	1. 2 区SK221（北東から）……………184
	4. 2 区下層水田畦畔芯材中出土 木製品 2 ……178		2. 2 区SK242（西から）……………184
PL. 5	1. 2 区北半掘立柱建物群 （真上から）……………179		3. 2 区南半上層水田 1 （真上から）……………184
	2. 2 区SB202（東から）……………179		4. 2 区南半上層水田 2 （南から）……………184
		PL. 11	1. 2 区SD256土層（西から）……………185
			2. 2 区 1号木簡出土状況……………185
		PL. 12	1. 2 区木製品出土状況 1 ……186
			2. 2 区木製品出土状況 2 ……186
			3. 2 区木製品出土状況 3 ……186

	4. 2区木製品出土状況4	186		3. 9-1区調査風景(南西から)	194
	5. 2区木製品出土状況5	186		4. 子持勾玉出土状況	194
	6. 2区木製品出土状況6	186	PL. 21	2区SX246出土土器1	195
PL. 13	1. 3区全景空中写真(真上から)	187	PL. 22	2区SX246出土土器2	196
	2. 3区全景(西から)	187	PL. 23	2区SX246出土土器・木製品	197
PL. 14	1. 3区SB315・SB319(北から)	188	PL. 24	2区下層水田・SE244出土木製品	198
	2. 3区SB316(南から)	188	PL. 25	2区SD256出土木製品1	199
	3. 3区SB319(北から)	188	PL. 26	2区SD256出土木製品2	200
PL. 15	1. 3区SB317(南から)	189	PL. 27	2区SD256出土木製品3	201
	2. 3区SB320(北西から)	189	PL. 28	2区SD256出土木製品4	202
	3. 3区SK313(北から)	189	PL. 29	2区SD256出土木製品5	203
	4. 3区SK314(北から)	189	PL. 30	2区SD256出土木製品・9-1区 出土子持勾玉	204
PL. 16	1. 4区北半近景(西から)	190	PL. 31	9号木簡	205
	2. 4区南半近景・SD407・SD408・ SD410・SD415(西から)	190	PL. 32	墨書土器1	206
PL. 17	1. 4区SB402(東から)	191	PL. 33	墨書土器2	207
	2. 4区SB404(東から)	191	PL. 34	墨書土器3	208
PL. 18	1. 4区SB405(西から)	192	PL. 35	墨書土器4	209
	2. 4区SA418・SB402(南から)	192	PL. 36	2区SD256出土土器1	210
PL. 19	1. 4区SK401(南から)	193	PL. 37	2区SD256出土土器2	211
	2. 4区SK412(南から)	193	PL. 38	2区SD256出土土器3	212
	3. 4区SK406(南から)	193	PL. 39	2区SD256出土土器4	213
	4. 4区SD411(北から)	193	PL. 40	2区SD256出土土器5	214
PL. 20	1. 8区近景(北から)	194	PL. 41	4区包含層・SK401出土土器	215
	2. 9-1区近景(南から)	194			

# I 調査の経過

## 1. 調査に至る経過

西九州自動車道は福岡県福岡市から前原市、佐賀県唐津市、伊万里市、長崎県松浦市、佐世保市を經由して佐賀県武雄市に至り九州横断自動車長崎大分線と合流する総延長約150kmの路線であり、国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の事業である。本埋蔵文化財発掘調査事業はこのうちの唐津道路区間の中の浜玉インターチェンジと唐津インターチェンジ区間6.6kmを対象としている。

佐賀県教育委員会文化課は佐賀国道事務所から道路建設事業の照会を受け、平成6年度から路線予定地の踏査および確認調査を実施した。文化財調査体制は開発事業が広域かつ大規模であることから調査主体は佐賀県教育委員会文化課とし、調査対象地の当該教育委員会からの職員派遣をうけた。これまでの本調査は唐津市堂の前遺跡・井ゲタ遺跡・末広遺跡・梅白遺跡・中原遺跡、唐津市浜玉町赤野遺跡・岩根遺跡・袈裟丸城跡・目貫古墳群・大江前遺跡がある。このうち2000年3月に堂の前遺跡・井ゲタ遺跡、2003年3月に梅白遺跡、2006年3月に唐津市浜玉町赤野遺跡・岩根遺跡・袈裟丸城跡・大江前遺跡・目貫古墳群の発掘調査報告書を刊行した。

中原遺跡の調査は本調査事業以前に2回の発掘調査が実施されている。この2回の発掘調査地点は本事業調査区11区～13区で確認できた。第一次調査は1965年11月11日～11月21日の第一次日仏合同調査として行われた。弥生前期～中期後半の甕棺墓6基を調査している。特に7号甕棺の副葬品として鉄戈1、小玉1、管玉9が棺外から鉄子1が出土し注目される。第二次調査は1986年4月～7月にかけて分譲住宅地造成に伴い唐津市教育委員会が実施した。調査の結果、弥生時代中期の甕棺墓3基と古墳時代初頭の周溝墓4基と古墳時代中期の古墳周溝を確認した。1号周溝墓の主体部は2基の土壌墓で副葬品はなかった。他の3基の周溝墓は周溝のみの検出であった。古墳時代中期の5号墳（ST11141）周溝北西隅からは鉄鏝6、鉄鎌2、摘鎌1、刀子1、鉄ヤリガンナ1などの鉄製品や滑石製の孔円盤1、滑石製の白玉356、硝子小玉11、琥珀小玉6などの玉類が一括して出土したがこれは祭祀遺構と考えられる。本事業発掘調査は中原遺跡としては第3次調査になるが本事業の調査区の中に第一次、第二次調査の調査区が含まれる。

本調査に至る確認調査は平成9年1月～3月にかけて実施した。確認調査担当は佐賀県文化課立石泰久（企画調整主査）・家田淳一（主査）・中尾賢治（調査補助員）である。確認調査対象地は路線内の宇木川以西から県道浜玉・相知線付近までである。佐賀国道事務所路線測点番号ではNo480～No540までである。3m×40mを基本とする試掘坑を57本設定し重機による掘削を行った。この確認調査により梅白遺跡および中原遺跡の広がりを確認した。特に36トレンチから弥生時代終末の土器群が多量に出土したがこれは2区のS X246にあたる。前述の第一次・第二次調査により中原遺跡は埋蔵文化財包蔵地として周知化されていたが、中原遺跡周辺は路線のインターチェンジ部分に相当しその開発面積も90,000㎡を超える広大なものであった。平成9年度の確認調査により中原遺跡の範囲が拡大することが判り、小字原、西九田も含めて遺跡の範囲を拡大した。但し、第一次・第二次調査地点は住宅地であり住宅移転も進んでおらず確認調査をすることはできなかったが遺跡があることは判っていたので調査対象地とした。また、この段階では古代の遺構・遺物が出土することはほとんど想定していなかった。このような経過を得て中原遺跡の調査対象面積を約90,000㎡とし平成11年から本調査に着手した。

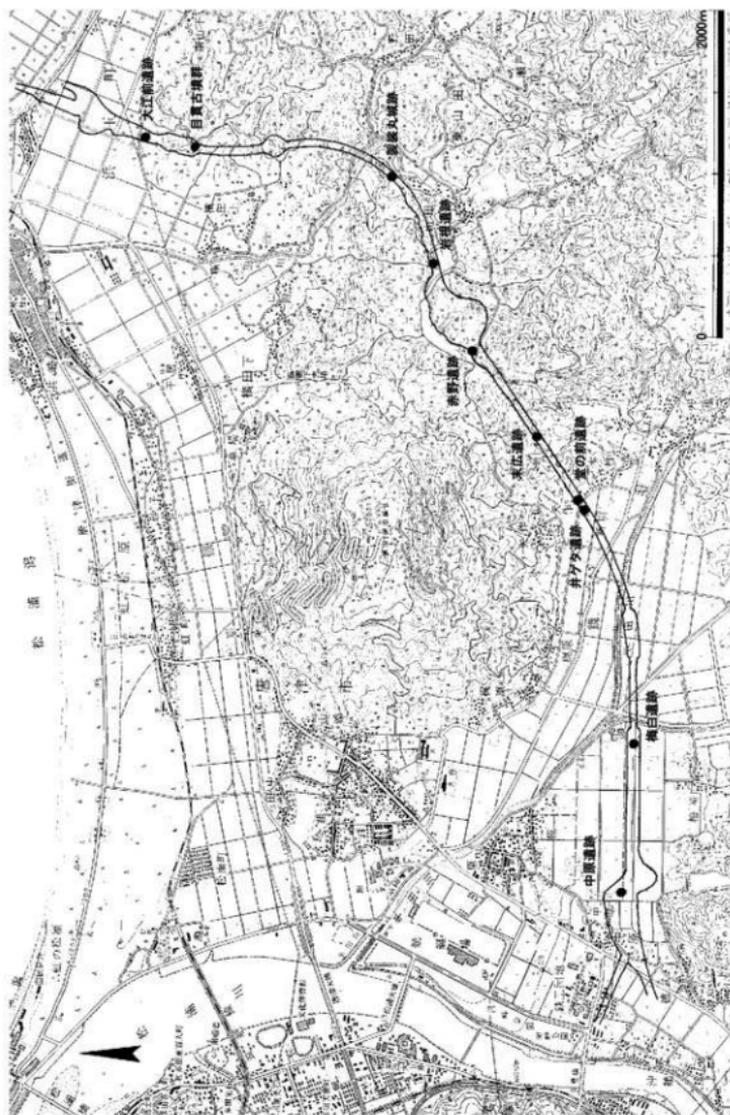


図1 路線図 (1/30000)

## 2, 調査組織

調査主体 佐賀県教育委員会

調査協力 唐津市教育委員会

発掘調査（平成11年4月～14年3月）

総括	佐賀県教育委員会 教育長	川久保善明（平成11年度）
	佐賀県教育委員会 教育長	松尾 正廣（平成12～13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課長	佛坂 勝男（平成11～12年度）
	佐賀県教育委員会 文化課長	佛坂 勝男（平成13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課参事	堤 博文（平成13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課参事	大橋 康二（平成12年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課副課長	大橋 康二（平成11年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課副課長	天本 洋一（平成13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課副課長	園田 義孝（平成11年度）
	佐賀県教育委員会 文化財副課長	東島 桂子（平成12年度）
	佐賀県教育委員会 文化財副課長	山口 康郎（平成13年度）
調査総括	佐賀県教育委員会 文化財課企画調整主査	立石 泰久（平成11～13年度）
調査員	佐賀県教育委員会 文化財課指導主事	小松 譲（平成11～13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課指導主事	井上 倫生（平成11～13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課嘱託	辻村美代子（平成11～13年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課嘱託	太田 正和（平成12年度）
	佐賀県教育委員会 文化財課嘱託	松浦 智（平成13年度）
	唐津市教育委員会 事務史員	美浦 雄二（平成11・12年度）
	唐津市教育委員会 事務史員	内田 孔明（平成13年度）
庶務会計	佐賀県教育委員会 文化課専門員	津野 建夫（平成11・12年度）
	佐賀県教育委員会 文化課専門員	天本 茂春（平成13年度）
	佐賀県教育委員会 文化課主査	相川ミエ子（平成11～13年度）
	佐賀県教育委員会 文化課主査	島田 一幸（平成13年度）
	佐賀県教育委員会 文化課主事	毎熊 近（平成11・12年度）
	佐賀県教育委員会 文化課主事	陶山 優（平成11～13年度）
調査補助員	青木秀昭、浦田大輔、若杉あずさ	
発掘作業員	青木京子、青木淳一、青木靖博、阿賀野千鶴、安藤剛、池田一則、石倉美智子、石崎和彦、市丸和子、市丸クミエ、市丸宮子、井出節子、伊藤末司、伊藤正子、井上義秋、岩田桂子、岩田泰浩、岩村正、内山為次郎、内山智子、浦津正美、大木壽明、大霜八重子、太田一枝、大谷文男、緒方義春、小栗三行、小副川初美、小野尾千代香、片峰秋子、片峰節子、	

兼武利夫、加茂豊子、加茂春江、加茂光春、栗原カヨコ、桑代ゆかり、古賀和江、小島浩介、佐伯明、佐伯ヨシ子、坂本エキヨ、坂本直久、重カズヨ、柴田隆徳、末石果壽美、末吉早、末吉泰子、田中フサ子、田中万里、田中美月、堤怜子、鶴田九一、手島茂一、戸野川一二、中島康子、長嶋サツエ、中村敦子、中村幸子、中村静江、鍋島フミ子、野崎徳藏、長谷川三男、馬場薫、馬場重治、藤瀬哲代、藤田五美、藤田ハルコ、古館満代、古川義彦、増井博、松下一枝、松本いつ子、豆田紀久子、三塩タチ子、宮崎等、向井つや子、森智恵子、八田君子、弥永薫、山崎ミヨ子、吉田勝洋、吉田亮二、吉村百合子、米倉幸一朗、脇山忠義、脇山ツタコ、脇山典子、脇山春雄、脇山マスエ、脇山美佐子、渡辺津留子、渡辺フサエ（五十音順）

報告書作成（平成18年度）

総括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野 健二
	佐賀県教育委員会	文化課長	松永 光生
	佐賀県教育委員会	文化課参事	東中川忠美
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課主幹	西田 和己
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松 譲
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	兒玉 洋志
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	丹羽 崇史
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	小森 義直
	唐津市教育委員会	事務吏員	美浦 雄二
	佐賀県教育委員会	文化課主幹	佐伯 勇次
	佐賀県教育委員会	文化課主査	平尾 和子
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課主査	黒木 文好
	佐賀県教育委員会	文化課副主査	山口 徹也
	佐賀県教育委員会	文化課主事	吉田 顕徳

整理作業員 池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久、中島美佳、馬場 薫、前田美帆、松本いつ子、美浦あずさ、三浦美智子、脇山邦子、渡部直美（唐津中原文化財事務所）  
新井久美、蒲原淑子、末吉由紀子、土井マサ子（高木瀬事務所）  
市川純子、江副朋子、奥智恵子、木塚優子、陣内香代子、村里育子、森崎 和子（佐賀県文化財調査研究資料室）（五十音順）

表1 調査担当者一覧表

年度	佐賀県(職員)	(嘱託)	唐津市職員	調査補助員	資料室(嘱託)
平成11	1999 立石・小松・井上	辻村	美浦		斉藤
平成12	2000 立石・小松・井上	辻村・太田	美浦		斉藤
平成13	2001 立石・小松・井上	辻村・松浦	内田	松瀬	吉田
平成14	2002 立石・小松・川副	松浦・松瀬	内田		百崎
平成15	2003 立石・小松・川副	松瀬・谷	内田		大嶋
平成16	2004 立石・小松・川副	大嶋・谷	内田		松瀬
平成17	2005 西田・小松・川副	大嶋・谷・田中(9月まで)	美浦(10月から)		兒玉
平成18	2006 西田・小松・川副	丹羽・兒玉	美浦		小森

表2 中原遺跡各調査区調査期間・担当者一覧

	調査期間	主な担当者
1区	H11. 7. 5~H11. 9月	美浦・辻村
2区	H11. 7. 22~H12. 2. 28	小松・美浦・辻村
3区	H11. 10. 26~H11. 12月	辻村
4区	H11. 11. 11~H11. 12月	美浦・辻村
5-1区	H12. 1. 11~H12. 8月	美浦・辻村・太田・小松
5-2区	H12. 7. 10~H13. 1月	美浦・辻村・太田・小松
5-3区	H13. 1月~H13. 6. 7	井上・松浦・小松
5-4区	H13. 8. 22~H13. 10. 30	井上・松浦・小松
6-1区	H12. 5. 24~H12. 7. 5	美浦
6-2区	H12. 5. 24~H12. 7. 5	美浦
6-3区	H12. 9. 20~H13. 6. 7	美浦
7区	H12. 8. 25~H13. 2. 26	井上・辻村・小松
8区	H13. 2. 22~H13. 7月	井上
9-1区	H13. 3. 27~H13. 6月	内田・松瀬

### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

中原遺跡の略号はNAKとし調査区の呼称は算用数字を用い1区であれば「NAK-1」とし、図面や写真、遺物の注記など記録簿の表示に用いた。調査区内を道路などにより1区から14区の調査区に分け、さらに調査年度や調査工程上、細分し5-1区、5-2区などのように表示した。

調査区画は国土座標にあわせX=46260、Y=-92700の交点を原点とする10m×10mの方眼区画を設定した。南北方向をアルファベットとし北から南にA~G、東西方向を算用数字にし東から西に1~59とし、グリッド(区画)名をアルファベット-算用数字で表記した。各グリッドの北東杭をグリッド杭とし、杭にグリッド名を表示した。

遺構番号は3桁の一連の番号とし、百の位は調査区を示すことにした。この遺構番号の頭に遺構の種類を示すアルファベット2文字の分類記号を付けて表示した。柱穴は調査区ごとの4桁の一連番号とし千の位は調査区を示すことにした。

遺構の写真は白黒、カラーリバーサルとも4×5、ブローニー、35mmを使用し、カラーネガは35mmのみに使用した。また、必要に応じ気球による写真撮影を委託した。

調査にあたっては基本土層を設定し、表土は重機により掘削し、包含層は人力掘削を原則とした。ただし、出土遺物が少ない包含層は重機掘削を行った。

## (2) 調査の経過

中原遺跡の調査は平成11年7月5日に重機による表土掘削を開始した。本報告書に掲載する調査区は1区～4区、8区、9-1区であり、その調査期間は平成11年7月から平成13年6月である。この調査期間中に5～7区の調査も行った。5区～7区の調査については『中原遺跡Ⅱ』に掲載するが、ここでは平成11年7月から平成13年6月までの調査経過を記す。また、この期間浜玉町の大江前遺跡、岩根遺跡、目貫古墳群などの調査も併行して進めた。

中原遺跡の調査は調査対象地の最東端である1区の調査から着手した。1区は低地部であり遺構、遺物もきわめて希薄であった。1区の調査を継続しながら7月22日からは2区の表土掘削を開始した。7月下旬には台風が接近し低地である1区のはほぼ全域が冠水した。2区の重機による表土掘削を続けていく過程で、8月上旬に2区の北東部にて自然流路を確認し、埋土中から6世紀中頃の須恵器杯や8世紀代の土器が出土した。8月下旬には2区の南側に堆積するコモ層を重機で掘削し遺構検出をこころみたところ水田畦畔を検出した。この頃、2区北側の砂丘微高地上に掘立柱建物などからなる集落があることが確認できた。自然流路からは多量の土器や木製品が出土し、流路の肩部からは把手付中空円面硯や1号木筒が出土した。また、墨書土器も出土し始めた。

10月中旬、2区の空中写真撮影を終えたのち水田の広がりを確認するため再び重機による表土掘削を始めたが、水田畦畔は調査区の南東部になると確認できなくなった。

10月下旬には3区の重機による表土掘削を開始した。11月上旬、2区の東側のパイプ埋設工事中に遺構を発見し、佐賀国道事務所の堀監督官と協議を行い4区の調査に着手した。従って11月には2区、3区、4区の調査を併行して進めていった。11月下旬にはラジコンヘリによる2区、3区、4区の空中写真撮影を行った。

12月上旬、2区の奈良時代水田の調査が終了し、重機により掘削し下層の調査に着手した。また、1号木筒を奈良文化財研究所に持ち込み文字の解読を行った。12月中旬、2区の奈良時代水田の下層にてSX246土器集中部を確認した。この土器集中部は確認調査で検出したものである。弥生時代終末の土器が多量に出土し、周辺に同時期の遺構もなくこの段階ではその性格は全く判らなかつた。

平成12年1月上旬、5区の重機による表土掘削を開始した。調査は5区の東側から西側に向かって進めた。5区ではSD501を確認した。

2月上旬、2区、4区の空中写真を撮影した。また、5区の自然流路であるSD502から木筒や転用硯などが出土し始めた。2月下旬、SD502の土器集中出土地点から奈良三彩や緑釉陶器が出土し、本遺跡が官衛的な性格をもつことが次第に明らかになってきた。

3月上旬、6区、7区、14区の確認調査を実施した。その結果、本調査対象地区に取り入れた。

2区 SX246の調査が終了した。また、この頃から発掘調査事務所を移転する作業に取りかかり、3月28日に新発掘事務所に移転した。

5月上旬、平成12年度の調査を開始した。2区の拡張を行い、5区の調査も行った。5月の中旬には調査が終了した3区を埋め戻した。5月下旬には6区の重機による表土掘削を開始した。5区の調査は5月から6月にかけてSD501、SD502の掘り下げ、および調査区南側のSX509、SX510不明遺構の調査を行った。これは編んだ植物繊維を蓆状に敷いたものや芯材と杭列である。さらに掘立柱建物も検出できた。木筒や墨書土器が出土した。また、この頃から中原文化財事務所にて木製品の保存処理を開始した。

7月中旬、5区の東側を重機により拡張し、5-2区の調査にはいった。自然流路のなかに太い杭が多量に打ち込まれたSX517を検出した。

9月下旬、8号木簡が出土した。10月中旬から7区の調査に着手した。7区SD701から平瓦や施釉陶器片が出土した。また、この頃から県立博物館での展示計画準備をはじめ、それにあわせた木製品の保存処理も同時進行した。

12月上旬、7区のSD701、702を完掘した。

12月中旬5-3区の重機による表土掘削を開始した。5-2区では古墳時代の水田面らしき痕跡を確認した。畦畔を確認しようと試みたが明確には確認できなかった。

平成13年1月から2月にかけて7区では南側の低地部に入り、井戸や木組遺構を検出した。この7区低地部の調査は3月に終了した。

2月末で佐賀市高木瀬事務所は閉所することにし2月から3月にかけて事務所の引っ越し作業を行った。

3月末、9-1区の重機による表土掘削を開始した。

4月上旬、8区の重機による表土掘削を開始した。この頃、吉野ヶ里歴史公園の堅穴住居づくりの作業に協力した。4月末、9-1区から子持ち勾玉が出土した。

5月中旬、5-3区から鈔帯金具が出土した。5月下旬、11区の人力掘削に着手した。また、10区の重機による表土掘削を開始した。

8区は遺構、遺物とも希薄であり自然流路を検出・調査し、6月下旬に調査を終了した。また、9-1区も遺構、遺物が希薄なためトレンチをいれ調査を終了した。

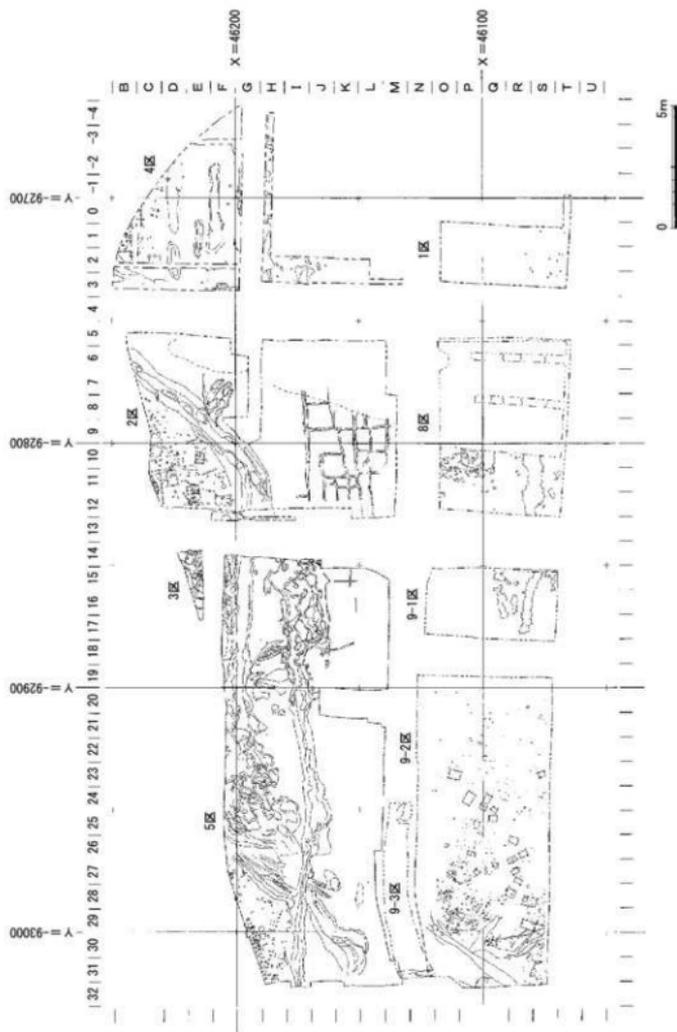


図2 グリッド配置図 (1/2000)

## 調査日誌

平成11年（1999年）

- 7月 5日 1区重機による表土掘削開始
- 7月13日 1区人力掘削開始
- 7月22日 2区重機掘削開始
- 7月23日 台風接近、大雨で現場休み
- 8月30日 2区南側にて水田畦畔を検出
- 9月29日 1号木簡出土
- 10月19日 2区空中写真撮影
- 10月26日 3区重機による表土掘削開始
- 11月 2日 杵島郡中学校社会科教員研修視察
- 11月 9日 バイブ埋設工事にて遺構確認（4区）
- 11月11日 4区重機による表土掘削開始
- 11月29日 2区、3区、4区空中写真撮影
- 12月 6日 1号木簡調査・奈良文化財研究所
- 12月 7日 2区奈良水田下層の重機掘削開始

平成12年

- 1月11日 5区重機による表土掘削開始
- 1月17日 5区人力掘削開始
- 2月 3日 2区、4区空中写真撮影
- 2月16日 群馬県教委・高島英之氏調査指導・出土文字資料
- 2月17日 木下良氏来訪
- 2月28日 2区SX246調査終了
- 3月 2日 熊本大学甲元眞之氏調査指導
- 3月 6日 6区、7区、14区確認調査
- 3月14日 九州大学服部英雄氏調査指導
- 3月22日 仙台市平岡亮輔氏調査指導
- 3月27日 岩手県平泉町本澤慎輔氏・秋田市小松正夫氏調査指導
- 5月10日 2区の拡張開始  
（重機による表土掘削）

平成13年

- 2月21日 1号木簡新聞報道
- 2月22日 8区重機による表土掘削開始
- 3月27日 9-1区重機による表土掘削開始
- 4月25日 9-1区より子持ち勾玉出土
- 5月11日 2区調査区拡張
- 6月 8区、9-1区調査終了



2区発掘調査風景



2区測量風景

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

中原遺跡は佐賀県唐津市大字原字西九田、西ノ畑、溜ノ内、笹原、大字中原字中原に所在する。本書に掲載する1区～4区は大字原字溜ノ内、西ノ畑にあたる。

唐津市は現在の市役所で北緯33度27分、東経129度58分にあたる。平成17年1月に唐津市、浜玉町、巖木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町が合併し、さらには平成18年1月に七山村も合併した。平成17年度の統計（合併後）によれば、総面積487.45km<sup>2</sup>で人口134,674人、世帯数は47,506戸である。唐津市は九州の北端で佐賀県の北西部にあたり、今回の合併により東は福岡県二丈町や佐賀市と南は多久市、西は伊万里市に接する。

北は唐津湾および玄界灘に接し朝鮮半島へと連なる。呼子町から壱岐島まで約30kmであり、鏡山山頂からも壱岐島影を望むことができる。このように半島に最も近いという地理的環境のため古代より我が国のなかでもいち早く半島や大陸の文化を受容した地域である。

唐津市およびその周辺の地形は①東松浦溶岩台地②松浦杵島丘陵地③脊振山地西部域④低地部（唐津平野）⑤島嶼域の5つに区分できる。①東松浦溶岩台地は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤のうえに第三紀末期～第四紀初頭にかけて噴出した松浦玄武岩が覆う溶岩台地である。通称上場台地と呼ばれ標高150m～200mである。②松浦杵島丘陵地は南北に流下する佐志川およびその延長線を境に東側の丘陵性山地であり、松浦川左岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり標高約200m内外である。③脊振山地西部域は松浦川および唐津平野の東南部にあたり脊振山系の西部地域にあたる。地質は風化の進んだ花崗岩類からなり唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類にあたり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部（唐津平野）は東松浦溶岩台地や松浦杵島丘陵地や脊振山地に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する低地を総称して呼ぶ。松浦川とその支流、玉島川、佐志川流域にあたる。5つの地形区分のうち①東松浦溶岩台地では主に旧石器～縄文時代の遺跡が④低地部では主に弥生時代以降の遺跡が⑤島嶼域ではおもに弥生～古墳時代の遺跡が立地する。

唐津平野を形成した河川として最大規模の松浦川やその支流の徳穂恵川、半田川、宇木川がある。松浦川とその支流は脊振山系と松浦杵島丘陵地の間を縫うように流れる。玉島川は唐津平野の東端を流れる松浦川に次ぐ規模の河川である。脊振山系に水源をもち唐津湾に注ぐ。この他、唐津市街地を流れる町田川や唐津平野の北西端を流れる佐志川がある。これらの大河川や中小河川流域により遺跡の立地などから唐津平野はさらに地域区分ができる。

唐津平野の地形発達には海岸線の変化と密接に関わるが、井関（1982）や下山（1994）の先行研究がある。井関の研究は唐津平野の地形発達史の嚆矢である。縄文海進の海域の拡大による奥唐津湾の範囲を想定し、唐津平野の地形発達史の原型を示した。下山氏は海成層に含まれる海棲生物化石のうち貝殻に注目しボーリング資料により北部九州の海岸線を復元した。図4の縄文海進時海岸線は下山氏の研究により砂丘は井関氏の研究をもとに加筆したものである。



図3 遺跡位置図

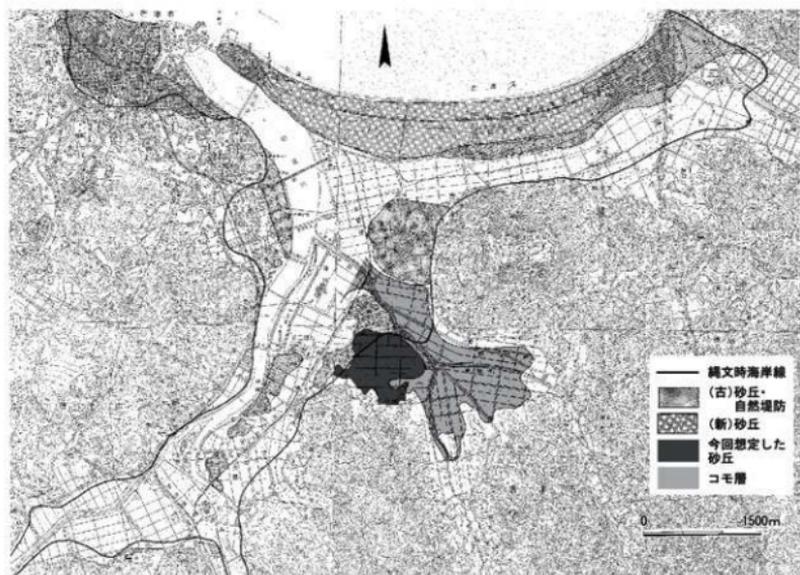


図4 旧海岸線・砂丘列地形分類図

海面上昇の終焉が河川の堆積（沖積上部砂層）を拡大させる条件になり、奥唐津湾はその埋め立てにより現在の平野の概形が形成された。その後、松浦川右岸地域と左岸地域に砂丘列（古砂丘列）が形成されることによって初期稲作に適した後背湿地を生み出した。松浦川右岸の砂丘列は鏡山西麓の鏡集落から原集落、中原集落、徳武集落まで連続している。中原遺跡や後述する梅白遺跡は砂丘微高地上に立地するが、この砂丘の砂は極めて細く礫などを含まない風成砂である。井関氏は原集落と中原集落を古砂丘列としたが、西九州自動車道に係る文化財確認調査により梅白遺跡から中原遺跡間も砂丘があることが判り、夕日山北麓に広い砂丘が形成されていることが判明した。

鏡山西麓の宇木川・半田川流域は砂丘列によって後背湿地になるが、この低地部に植物遺体層・通称コモ層が広く堆積する。木下巧（1981）は昭和40年代末～50年代にかけての農業基盤整備事業に係る文化財確認調査によりコモ層の分布範囲を明らかにした。後背湿地の丘陵裾部に立地する宇木汲田貝塚遺跡や柏崎貝塚遺跡の貝殻にヤマトシジミが多く見られる。その形成時期は縄文時代晩期～弥生時代前期であり、後背湿地は汽水性の潟であるとの考え方が支配的であった。コモ層の分布がその潟の範囲を示すものと考えられてきた。ところが、平成9年から始まった梅白遺跡の調査によってコモ層の下から古墳時代の水田とさらにその下層から縄文時代晩期～弥生時代中期の水田が発見され、後背湿地の低地部においてもすでに水田開発が行われていたことが判ってきた。また、井関が想定した中原集落の砂丘はさらに夕日山北麓まで広がることも確認できた。

松浦川左岸にも砂丘列が形成される。唐津市街地の南部がのる砂丘であり、その背後に流れる町田川流域が後背湿地になる。菜畑遺跡の水田はこの後背湿地に、桜馬場遺跡は砂丘上に立地する。

唐津平野の旧地形のうち注目されるもののひとつに玉島川の流路がある。現在の玉島川は北流して唐津湾に注ぐ。これは近世の河川改修によるものであり、旧玉島川は虹の松原砂丘と鏡山の間を西流していたと考えられる。弥生～古墳時代に形成されたと考えられる虹の松原砂丘の発達は玉島川河口を天然の良港に仕上げたと思われる。近世の河川改修は松浦川、町田川においても実施されており旧流路、旧地形の復元は遺跡の理解に不可欠である。

#### 参考文献

木下巧1981『古代末盧文化資料集成』肥前文化史研究会

井関弘太郎1982『末盧の地形と地質』『末盧国』

下山正一 1994『北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向』『第四紀研究』33-5

## 2. 歴史的環境

唐津地方は前項で記したとおりの地理的条件のため原始・古代から半島・大陸文化受容の地であった。東松浦溶岩台地・通称上場台地や低地部（唐津平野）さらに東松浦半島海岸に浮かぶ島嶼などにそれぞれの遺跡群が立地することも記した。以下、これらを概観する。

旧石器時代・縄文時代の遺跡の多くは東松浦溶岩台地・通称上場台地上に立地する。旧石器時代の著名な遺跡としてナイフ形石器文化の唐津市肥前町磯道遺跡や生石遺跡、細石器文化の唐津市原遺跡などがある。縄文時代では押型文土器・石鏃を出土した牟田辻遺跡や住居跡、組織織文土器を出土した女山遺跡、晩期の貯蔵穴状土坑を検出した唐の川高峰遺跡や梨川内村前遺跡があり、晩期前半から上場台地では遺跡数が増大することが指摘されている。低地部においても葉細遺跡、西唐津海底遺跡では前期の土器が出土しており、徳蔵谷遺跡では中期の土器が出土している。

東松浦半島周辺の海岸部や島嶼にも旧石器時代から人類の活動の痕跡が認められる。馬渡島、加唐島、小川島、神集島からはナイフ形石器などが採集されている。最終氷期の最盛期の海面は現在より約130m低位であったと考えられており、地形的には朝鮮半島と陸続きであり、現在の島という地形ではないことも考慮しなければならぬ。

東松浦半島海岸部や島々には弥生・古墳時代の遺跡もみられる。これらは漁撈を生業とした海人集団の活動の痕跡であろう。とくに拠点的な地域として加部島、呼子周辺と神集島、湊、相賀周辺がある。唐津市呼子町大友遺跡<sup>(8)</sup>では弥生時代前期～後期前半の約150基の墳墓が確認されている。甕棺墓、配石墓、土壘墓、箱式石棺墓、石囲墓、敷石墓、支石墓など遺構の種類が多く埋葬方法なども五島列島など西北九州の埋葬との共通性がみられる。また、南海産の貝輪を副葬していることも特筆され、海人の共同墓地と考えられる。呼子港の対岸に浮かぶ加部島には古墳時代後期の瓢塚前方後円墳もある。さらに加部島には式内社である田島神社が鎮座しており、古墳時代～古代において海上交通の要所であったことが伺える。呼子町から約5km南東に位置する唐津市湊周辺にも弥生～古墳時代の遺跡がみられる。湊中野遺跡<sup>(9)</sup>では弥生中期中期～後期の焼土坑が確認されている。唐津市や糸島半島が望める眺望のいい立地であり、焼土坑は「のろし」的性格が考えられている。雲透遺跡<sup>(10)</sup>では弥生時代中期の貝塚が調査され、鹿角製のヤスや釣針のほか腕輪などが出土した。これらの大友遺跡、湊中野遺跡、雲透遺跡では糸島・福岡平野系の土器が出土していることも特筆される。湊の対岸に浮かぶ神集島には短甲や鉄刀を出土した学校東古墳群や塚塚古墳群がある。また相賀には陶質土器を出土した相賀古墳もあり、湊・神集島周辺も海上交通の要所であった。

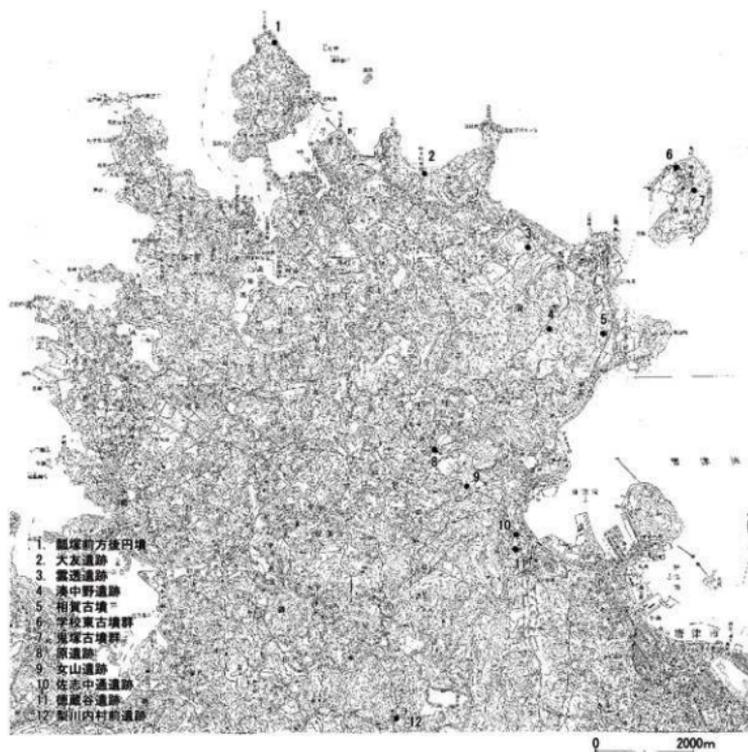


図5 周辺遺跡分布図1 (1/100000)

縄文時代晩期後半になると低地部に形成された砂丘列背後の低湿地が初期稲作の適地となり町田川流域では菜畑遺跡<sup>11)</sup>が宇木川流域では宇木汲田遺跡<sup>12)</sup>が出現する。菜畑遺跡では我が国最古の水田跡が検出された。晩期以降、唐津平野において多くの著名な遺跡が出現するが、それは河川流域ごとの遺跡分布をもつ。

唐津平野の中で調査事例も多く研究史的にも重要な遺跡が多いのは宇木川・半田川流域である。宇木汲田貝塚遺跡では1965年の日仏合同調査により縄文時代晩期の夜臼式期から炭化米や土器底部に初圧痕が発見され稲作の存在を提示した。貝塚から200～300m南方の宇木汲田遺跡では昭和初期に銅剣、銅矛が発見されており、1957年の東亜考古学会、1965、1966年の日仏合同調査により甕棺墓群から多紐細文鏡、細形銅剣、銅矛、銅戈、銅銅、玉類など多数の副葬品が出土した。

柏崎貝塚は昭和初期の耕地整理によって発見されその後、数回の学術調査が実施され弥生前期後半の短期間に形成されたものであることが判った。柏崎遺跡<sup>13)</sup>では明治末に触角式銅剣、銅矛が発見され、柏崎田島遺跡の甕棺墓群では異体字銘帯鏡が柏崎大深田遺跡からは広形銅矛の鋳型が出土している。

また、唐津平野には西北九州に特徴的に分布する支石墓がみられる。葉山尻支石墓<sup>114)</sup>では1952、1953年の調査で支石墓と甕棺墓を検出しており、この他瀬戸口支石墓、森田支石墓や玉島川流域では五反田支石墓などが調査された。梅白遺跡<sup>115)</sup>は本事業により1997年～1999年に調査が実施され、弥生、古墳時代の集落と水田を確認した。このように、鏡山南麓の宇木川・半田川流域は砂丘による後背湿地という初期稲作に適した地理的条件をもとに農耕集落が出現、発展する。その発展の様子は墳墓出土の鏡や青銅器、玉類、銅鋼などの副葬品からも伺える。

本報告の中原遺跡は松浦川右岸で後背湿地を形成した砂丘微高地上に立地する。弥生時代中期の甕棺墓や終末期～古墳時代初頭の墳墓から青銅鏡、鉄剣、玉類が出土している。また、中期の鍔型片4点も出土しており宇木汲田遺跡と並び弥生時代中期の拠点集落である。

弥生時代中期後半以降、松浦川本流域の遺跡群が発展していく。久里大牟田遺跡<sup>116)</sup>では鉛製の矛や銅矛、銅戈などが甕棺、土壙墓から出土している。松浦川の左岸に注ぐ徳須川の下流に立地する千々賀遺跡群は中期から後期にかけて発展していく。千々賀庚申山遺跡からは細形双耳銅矛や銅戈が千々賀字ノ木遺跡からはイモ貝綴切銅鋼が千々賀遺跡からは赤色漆で同心円文や鋸歯文を描いた容器蓋3点とともに中期～後期の多量の土器や建築部材が出土している。

桜馬場遺跡は広義の松浦川左岸で町田川流域にあたる。後期の甕棺墓から方格規矩鏡、有鈎銅鋼、巴形銅器のほか広形矛先や内行花文鏡片も採集されている。

古墳時代前期の首長墓には松浦川流域の双水柴山2号墳、中原遺跡ST12032、久里双水前方後円墳がある。古墳時代初頭の双水柴山2号墳は全長34.7mで丘陵の尾根上に造られる。主体部は木棺である。久里双水前方後円墳は全長108.5mで竪穴式石室から盤龍鏡、碧玉製管玉、棺外から刀子が出土した。

前期後半から中期、後期にかけて首長墓は玉島川流域に移る。谷口古墳は組合せ式の長持形石棺や仿製三角縁神獸鏡、碧玉製石鋼など畿内の要素をもつ。その後、初期横穴式石室をもつ横田下古墳や金銅製冠や銅腕などの渡来系文物を副葬した島田塚前方後円墳が造られる。

中小古墳では宇木川・半田川流域に垂飾付耳飾り、三累環頭を出土した半田宮の上古墳や竪穴系横穴式石室のほか土壙墓、箱式石棺などが確認された追頭古墳群、同じく竪穴系横穴式石室をもつ長崎山古墳群、石障系石室をもつ樋の口古墳などがある。中原遺跡では複数の陶質土器や鉄鐸、初期の馬具、梅白遺跡の古墳水田水路中から軟質土器など渡来系文物の出土が目立つのも特筆される。

古代の唐津地域は肥前国松浦郡にあたる。松浦郡は現唐津市、西松浦郡、長崎県平戸や五島列島、佐世保市などを範囲とする極めて広い面積をもつ郡である。松浦郡の古代行政組織は肥前国風土記によれば郷11所、里26所、駅5所、烽8所である。この中の具体的な地名や駅名は肥前国風土記、延喜式、和名抄などの史料によってわかる。郷名は肥前国風土記に値嘉郷、和名抄に庇羅、大沼、値嘉、生佐、久利の郷名が記される。里名は肥前国風土記に賀周里のみ見えるだけである。駅名は肥前国風土記に逢鹿駅、登望駅、延喜式に磐水、大村、賀周、逢鹿、登望の5駅名が記されている。烽は肥前国風土記に摺振烽、値嘉郷3所となっている。その他の地名の由来で鏡渡や大家島がみえる。

唐津地域の古代の主要な遺跡ではまず千々賀古園遺跡がある。松浦川の支流である徳須川下流の左岸に位置する。唐津市教育委員会の2回の調査により掘立柱建物8棟を検出した。そのうちの3棟は大型でL字形の配置をもつ。特筆される出土遺物に銅製の天秤受け皿や蛇紋岩製の榘（分銅）や平瓦片がある。また、墨書土器が95点出土している。「嶋守」「川上」「田造」などがあり、最も多いのが「六」である。また「川部」は中原遺跡出土1号木簡にもみられる人名である。8世紀前半を盛期とし後半までの遺物がみられ、官衙的配置をした大型建物の存在などから松浦郡衙とも推定されてきた。

座主遺跡は徳須恵川中流域の左岸に立地する。谷状低湿地の遺物包含層から石帯・巡方や墨書土器15点が出土した。墨書土器には「坂本」「廣」「大」「六」などがある。八世紀代を中心とし、盆地状の地形であることなどからも里あるいは郷のひとつとも考えられよう。

双水迫遺跡は松浦川右岸の久里に所在する。詳細不明ながら八世紀代の集落が確認されている。伊岐佐伊良尾遺跡は「生佐郷」内に所在し掘立柱建物など八世紀代の集落が確認されている。鶏ノ尾遺跡は鏡山南麓に立地する。平安時代の鍛冶炉と奈良～平安時代の炭窯や緑釉陶器、越州窯系青磁、播磨系須恵器などが出土している。

岩根遺跡は鏡山南東麓の丘陵上に立地する。9世紀代の製鉄関連遺構を確認した。製鉄炉本体は確認できなかったが、遺物の検討から箱形炉であることが判った。製鉄を主体とし精錬鍛冶から鍛錬鍛冶までの作業が行われていた。

延喜式に記載された大村駅は唐津市浜玉町東北部にある大村神社周辺が比定地である。大村神社の境内から布目瓦が出土し、社殿背後に基壇状の盛り土もみられ、奈良時代の寺院跡と考えられる。三代格や東大寺要録にみられる弥勒知識寺と推定されている。

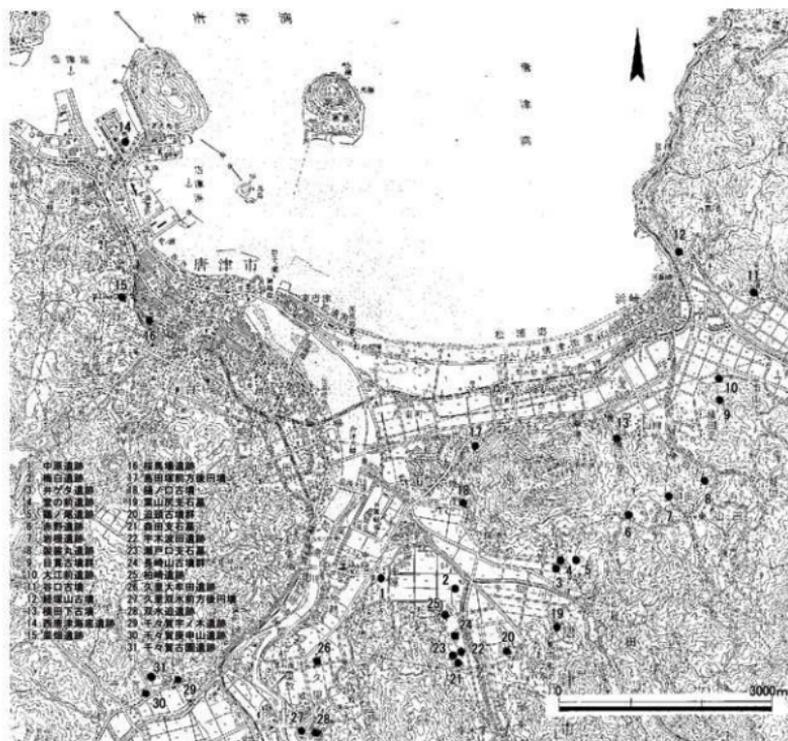


図6 周辺遺跡分布図2 (1/70000)

肥前国風土記にみえる賀周里や賀周駅は地名などからも唐津市見借がその推定地と考えられてきた。見借は佐志川の上流にあたるが、その河口に立地するのが佐志中通遺跡や徳蔵谷遺跡である。両遺跡からは遺構こそ確認されていないが8世紀代の土器が出土している。佐志中通遺跡からは鍔帯金具も出土している。賀周里や賀周駅を比定する上で参考になる遺跡であろう。

この他、逢鹿駅や登望駅に比定できる遺跡や調査事例はみあたらないが、地名や弥生、古墳時代以降の遺跡群の分布などを考えても、逢鹿駅は唐津市相賀周辺に登望駅は唐津市呼子周辺に比定できるであろう。

## 文献

1. 堀川義英 1981『田尾遺跡群礎遺跡』肥前町教育委員会
2. 堀川義英 1978『生石・森の下遺跡』佐賀県教育委員会
3. 松岡史・富樫憲次 1960『佐賀県東松浦郡鎮西町字原出土の細石器』九州考古学10  
杉原莊介・戸沢充則 1971『佐賀県原遺跡における細石器文化の様相』考古学集刊4-4
4. 日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会編 1960「島原半島（原山、山ノ寺、礫石原）および唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10
5. 田島龍太 1996「唐ノ川高峰遺跡」③唐津市教育委員会
6. 内田孔明 1996「梨川内村前遺跡」②唐津市教育委員会
7. 田島龍太 1995「徳蔵谷遺跡」②唐津市教育委員会  
田島龍太 1996「徳蔵谷遺跡」③唐津市教育委員会
8. 東中川忠美 1981「大友遺跡」呼子町教育委員会
9. 中島直幸 1985「湊中野遺跡」唐津市教育委員会
10. 仁田坂聡 1998「雲透遺跡Ⅱ」唐津市教育委員会
11. 中島直幸・田島龍太 1982「菜畑遺跡」唐津市教育委員会
12. 岡崎敬ほか 1982「宇木汲田遺跡」『末盧國』六興出版
13. 中島直幸 1982「柏崎遺跡群」『末盧國』六興出版
14. 渡辺正気 1982「葉山尻支石墓」『末盧國』六興出版
15. 小松譲 2003『梅白遺跡』佐賀県教育委員会
16. 中島直幸 1980「久里大牟田遺跡」唐津市教育委員会
17. 仁田坂聡 2001「千々賀遺跡」唐津市文化財調査報告書第102集
18. 中島直幸 1987「双水柴山遺跡」唐津市教育委員会
19. 伴耕一朗 1991「千々賀古園遺跡」唐津市教育委員会  
仁田坂聡 1997「千々賀古園遺跡」②唐津市教育委員会
20. 森田孝志 1981「座主遺跡」『押川遺跡』佐賀県教育委員会
21. 蒲原宏行 1986「伊岐佐遺跡群」相知町教育委員会
22. 草場誠司 2003「鷄ノ尾遺跡」②唐津市文化財調査報告書第109集
23. 小松譲 2006「岩根遺跡」『大江前遺跡』佐賀県教育委員会
24. 仁田坂聡 2002「佐志中通遺跡」②唐津市教育委員会

### Ⅲ 調査の概要

#### 1. 遺跡の概要

中原遺跡は弥生・古墳時代の集落と墳墓および古代の官衙的な遺跡である。主に調査区の南半部に弥生・古墳時代の集落と墳墓が北半部で古代の官衙的な遺構や遺物が出土した。

遺跡の立地は第二章で述べたとおり標高約4mの砂丘微高地上に立地する。調査面積が約90,000㎡と広大であったため、弥生・古墳時代の墳墓が立地する砂丘微高地はほぼ全掘したことになる。遺跡の現況はやや起伏がみられ、水田と宅地、畑地、墓地であった。現況の宅地は1980年代に開発された。開き取りによるとそれ以前は古墳の墳丘らしき盛土があったと言う。

図7に調査区位置図を掲載する。遺跡の南方は標高272mの夕日山からのびる丘陵の裾部にあたる。この裾部から砂丘微高地が北方にのびる。夕日山の北麓裾部にある池ノ浦溜池は深い谷地形を利用してゐる。旧地形は夕日山に源をもつ水路がこの谷地形を経由して旧松浦川に注いでいたと思われる。本調査区の南端に幅20～30mの落ち部がみられるが、夕日山から注ぎでた自然流路であったかもしれない。このよう概ね南北に形成された砂丘微高地はところどころ東西方向に走る谷状の地形によって分断される。本調査区内においても13区南端と2区、5区、7区にわたる谷地形がみられる。この谷地形は弥生時代には存在し、古墳、奈良・平安時代にかけて序々に埋没していく。本遺跡の評価をする上で以上のような旧地形の復元は欠かせない。

図8は本遺跡全調査区の遺構配置図である。図9は調査区毎に撮影した空中写真を合成したものである。図9の空中写真では黄褐色と黒褐色の部分が見て取れる。黄褐色の部分が砂丘微高地であり、黒褐色部分が低地部になる。砂丘微高地は11～13区にかけて広がる。砂丘微高地の南北両側は幅約20～30mの谷状地形になり、東側は緩やかに、西側はやや急に傾斜して低地部になる。従って、本調査区は砂丘微高地をほぼ全掘したことになる。この砂丘微高地上に分布するのが弥生・古墳時代の集落と墳墓である。弥生時代の墳墓は甕棺墓約270基、土壇墓・木棺墓約20基、終末期の墳丘墓3基を検出した。甕棺、土壇、木棺墓は前期後半に出現し、中期前半から中期中頃にかけてピークをむかえ、中期後半から後期前半にかけて衰退していく。副葬品を所有する墓群が数群みられ特定有力集団墓を形成する。甕棺埋葬法や副葬品種別において唐津地域の弥生墳墓の地域性がみられる。甕棺埋葬法では埋置角度が他地域に比べて急傾斜であり、直立棺や倒置棺も多く見られる。口縁部の打ち欠きも多く、さらには打ち欠いた口縁部を墓壇に埋置するものもある。副葬品では円環式銅剣15、硬玉製勾玉22、碧玉製管玉約600など装身具の卓越があげられる。

調査区南側の谷状地形から南西部の低地部にかけて非常に多くの土器（コンテナ1000箱以上）が出土した。土器群の時期は中期中頃～後半を主体とし後期前半までである。これらの土器群に混じって鋳型が4点出土した。4点とも両面鋳型であり、このうち2点が接合した。石材は石英一長石斑岩で銅剣・銅矛の鋳型と思われる。鋳型片4点は調査区南西隅の比較的狭い範囲から多量の土器とともに出土している。調査区南側の谷状地形を挟んだ南側は調査区外になり、夕日山北麓裾部から北方にのびる砂丘微高地になる。ここに、青銅器生産をおこなった弥生集落中心部があると推定される。

また、調査区南側の幅約20～30mの谷状地形には多量の杭を打ち込み、自然木を芯材として置いた堤防状の施設が造られる。堤防状の遺構には芯を中空に削りぬいた木製の水管や長さ約4mの木柱が埋置される。その周辺には木組遺構もあることから堤防状施設は灌漑用か木の実などの水さらしの水量調節

のための機能が考えられる。さらに、砂丘微高地西側縁辺の低地部からは多量のヤスや石錘などの漁撈具が出土しており、中原遺跡は旧松浦川岸に立地したことを伺わせる。

弥生時代終末期には特定個人墓である墳丘墓3基が出現する。平面形態は方形と長方形であり、いずれも西側に陸橋部をもち周溝が巡る。主体部は削り貫き式の木棺で、棺内から硬玉製異形勾玉や碧玉製管玉、棺外から破砕された内行花文鏡や鉄剣が出土している。さらに周溝内埋葬施設もあり棺外から破砕された方格規矩鏡や鉄鏃、鉄剣が出土した。また、土壇墓・木棺墓群が4群あり破砕された獣帯鏡や折れ曲がった鉄剣、硬玉製勾玉、碧玉製管玉などが出土した。

古墳時代初頭には墳長約25mの前方後円墳が造られる。主体部は削平されていたが、周溝内から石棺を確認した。さらに周溝を共有して周溝墓4基と平面方形、円形の周溝墓4基も造られる。

古墳時代中期の円墳3基と後期の前方後円墳1基も確認した。前方後円墳は墳長31.5mで内部主体は削平されていた。時期は6世紀中頃と思われる。

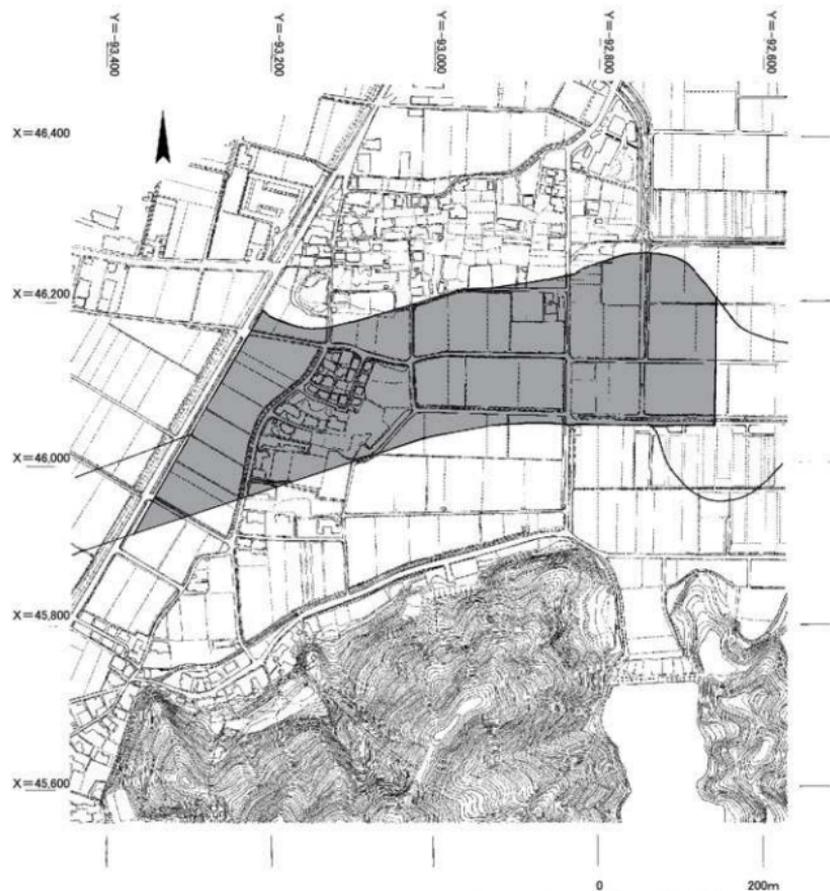


図7 調査区位置図 (1/6000)

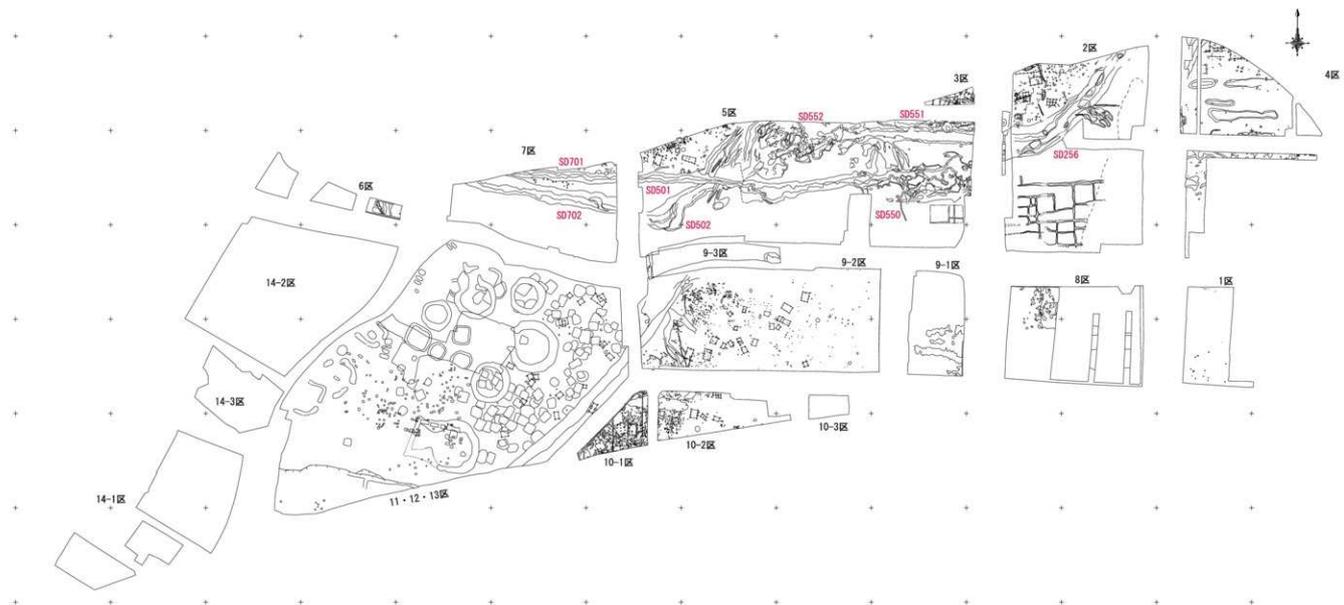
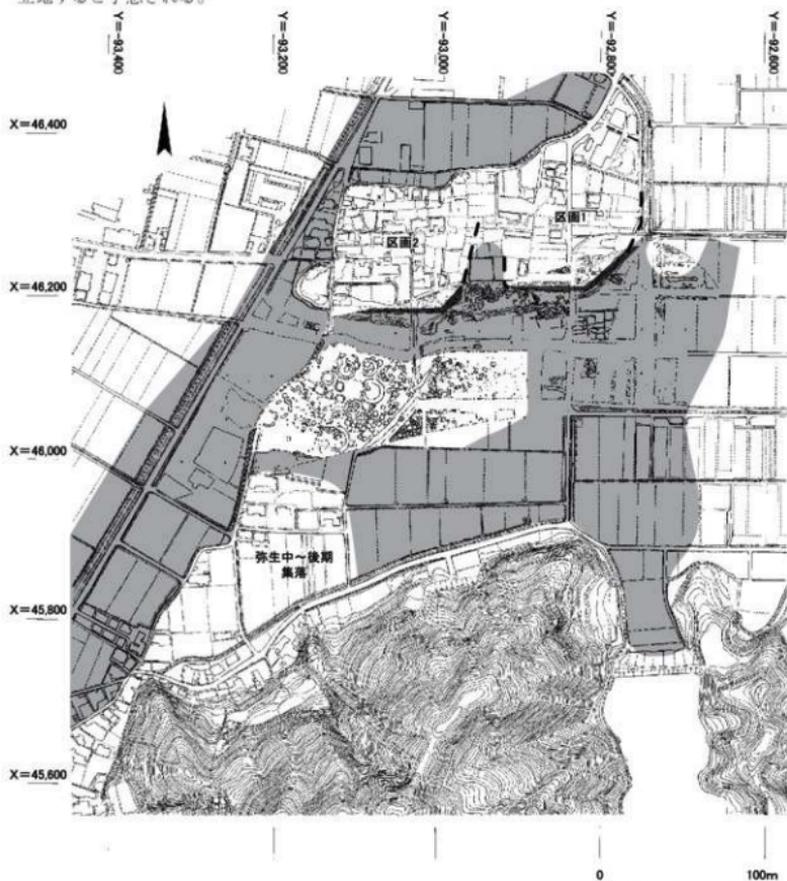


图8 中原遺跡全調査区遺構配置図 (1/4000)



砂丘微高地は調査区の北側にも見られる。2区、3区、5区などの調査区北半部にみられ、この砂丘微高地上から古代の掘立柱建物群や井戸跡などを検出した。この砂丘微高地と前述した弥生・古墳時代の墳墓と集落が立地する砂丘微高地の間は谷状の地形になり、その中に自然流路が東西方向に横切る。検出した流路の総延長は約360mであり、自然流路から木簡、墨書土器、緑釉陶器、奈良三彩などの他、曲物、挽物皿などの木製品などが多量に出土した。古代の官衙的遺構・遺物は全調査区の北半部の谷状地形にある流路や溝跡さらに砂丘微高地上に検出した。

図10は本調査区的全遺構配置図を地形測量図に組み込み、遺跡の概略を示したものである。アミ部分は低地になる。11～13区の砂丘微高地に弥生・古墳時代の墳墓と集落が立地し、南側の谷状地形をはさんで未調査ではあるものの弥生時代の集落の中心部があることが予測される。古代の官衙関連施設や集落は弥生・古墳時代の遺跡が立地する砂丘のさらに北側の砂丘微高地に立地する。この砂丘微高地の東西幅は不明であるが、おおよそ370m、南北は約150mである。この範囲に古代の官衙関連施設や集落が立地すると予想される。



木簡や墨書土器が出土した総延長約360mの自然流路は谷状地形を東西方向に横切る。自然流路の幅約15m、深さ約1.5mで、2区の最下層から6世紀後半の須恵器が出土しており、9世紀前半から後半にかけて埋没したと思われる。特に5区にて木簡や墨書土器の出土が目立つ。出土土器の多くは8世紀後半から9世紀前半である。緑釉陶器や奈良三彩が出土した土器集中地点も本流路である。この流路と併行して直線的な溝が二条掘削される。5区北側のSD551の西端は別の自然流路と連結する。掘削時期は7世紀後半か？埋土中から8世紀前半の須恵器が出土している。また、5区から7区にかけて掘削される直線溝であるSD501、SD701は総延長約100mである。出土遺物の時期は8世紀前半～9世紀前半であるが8世紀後半以降の土器が目立つ。この二条の直線溝の北側に広がる砂丘微高地上に掘立柱建物群が分布し、SD551とSD501、SD701で区画されているため便宜的にそれぞれ区画1、区画2と仮称する。区画1では2区で4棟、3区で5棟の計9棟を確認した。区画2では3棟を検出した。また、溝などの区画はみられないが、4区にも建物群がみられる。周囲は低地部になる独立した砂丘微高地上に3棟の掘立柱建物を調査した。この4区の掘立柱建物は柱穴や建物の規模も他の建物群より大きく主軸を真北にそろえ整然と並ぶ。すべての建物群の中では最も新時期に位置づけられる。さらに10区にも建物群がみられる。この建物群の区域内からは籾の羽口4点と鉄滓約30点が廃棄された土坑や隣接地である9-2区からも羽口や鉄滓が比較的古く出土しており鍛冶関連遺構の存在も考えられる。10区の建物群の側を直線的に掘削された溝もある。これは11区から9-2区にかけて総延長約140mにもわたる直線的溝である。これは砂丘微高地を縦断し、その南北両側の谷状地形を連結するように掘削されている。

以上の遺構は大方、8世紀～9世紀前半に位置づけられる。古代の遺構・遺物について現在整理中で個々の遺構の時期の特定は作業中である。古代の中原遺跡の全容はその作業後に明らかになるであろう。中原遺跡全調査区1区から14区のうち、本書は1区、2区、3区、4区、8区、9-1区について掲載する。

表3 掘立柱建物跡一覧表

調査区	遺構番号	長軸方位	規模 (桁行×梁行)	桁行柱間 (m)	梁間柱間 (m)	床面積 (㎡)
2区	SB202	N80° E	3×2	20~23	1.9	24.6
	SB213	N81° E	3×2	13~1.5	1.4~1.8	16.8
	SB226	N10° E	3×2	1.5~1.7	1.4~1.7	15.1
	SB241	N65° E	3×?	1.4~1.7	?	?
3区	SB315	N33° E	3?×1	1.9~2.1	1.9	?
	SB316	N68° E	2?×1	1.4~1.5	1.05	?
	SB317	N21° E	2?×1	0.9~1.0	1.4	?
	SB319	N6° E	?×2?	1.6	1.5	?
	SB320	N6° E	3?×1	1.3	1.7	?
4区	SB402	N3° E	2?×1?	2.4~2.5	2.1	?
	SB404	N90° E	?×2?	?	2.1	?
	SB405	N89° E	4?×2?	1.7~2.2	2.1~2.2	?

表4 土坑・井戸跡一覧表

調査区	遺構番号	平面形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
2区	SK204	円形	1.96	1.96	0.55
2区	SK221	不整円形	0.86	0.76	0.48
2区	SE244	楕円形	3.78	2.95	1.3
3区	SK313	不整楕円形	?	1	0.45
3区	SK314	不整方形	1.77	?	1
4区	SK401	不整円形	0.85	0.77	0.3
4区	SK403	隅丸長方形	1.4	1.2	0.07
4区	SK406	不整円形	1.4	1.4	0.44
4区	SK409	楕円形	0.98	0.83	0.17
4区	SK412	不整円形	1.13	0.9	0.21

## IV 1区・8区・9-1区の調査

### 1, 1区の調査

4区の南側に位置する。本遺跡の全調査区の中では最東南部に位置する。1区全面が低地部になり、旧地形ではさらに東方に向かって緩やかに低くなる。基本土層は1層：褐灰色中砂、表土。2層：黄褐色砂、近・現代の耕作土。3a層：灰黄褐色中砂、径1~2mmの砂粒を多量に混入、漸次粘質化する。3b層：灰黄褐色中砂、4層の黒褐色粘土ブロックを部分的に混入。包含層の人力掘削を実施したところ黒色土器碗が出土、堆積時期は古代~中世と思われる。他に弥生土器細片が数袋出土。4層：黒褐色粘質シルト層、非常に粒子の細かい粘質化した土層、古墳時代土師器細片が少量出土。5層：暗褐色有機物層、植物遺体層（コモ層）。6層：灰色細砂、地山となる砂丘、青灰色化する。

黒褐色の粘質土で遺構検出を試みたが、調査区の南側で小穴を約10基検出したのみで、遺物は土器細片であった。

#### 出土遺物

1は内黒の黒色土器碗。3b層出土。体部下半から底部にかけて残存し、高台は高く直線的に開く。磨耗のためミガキは不鮮明である。

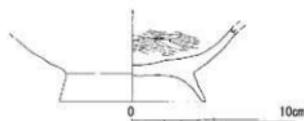


図11 1区出土土器 (1/3)

### 2, 8区の調査

2区の南側で、1区と9-1区に挟まれる。1区と同様、8区全面が低地部になる。調査区の西側から遺構検出を行ったが調査区の北西部で蛇行する自然流路と小穴約20基を検出した。遺構検出時には遺物は全く出土しなかった。従って、調査区の東側はトレンチを入れて終了した。

### 3, 9-1区の調査

5区の南側、8区の西側に位置する。建設工事との調整でこの調査区を先行して調査することになった。旧地形では西方から東方にむかって緩やかに低くなる地形である。従って、1区、8区より若干高いもの、弥生~古代にかけては低地部であったと考えられる。基本土層は1区と同じで、4層の直上で遺構検出をおこなったが調査区の南側で自然流路を確認しただけであった。その後、調査区に南北トレンチを設定し、4層である黒褐色粘質土を掘り下げていたところ完形の子持勾玉が出土した。周辺には遺構や遺物はみられなかった。同層からは須恵器細片、土師器細片が少量出土するのみであった。土質は粘質土であり、北側の5区の調査成果も併せて考えると、古墳時代中期の水田であった可能性は高い。但し、水田関連遺構は確認できなかった。

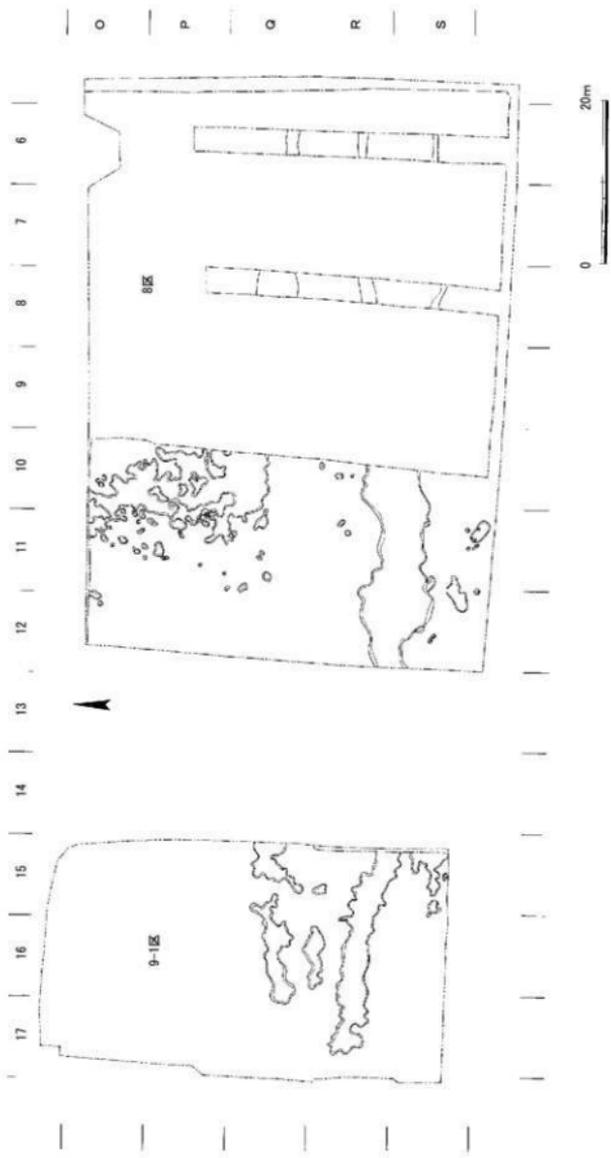


图12 8区、9-1区遺構配置図 (1/600)

### 出土遺物

1は完形の子持勾玉である。滑石製で最大長8.7cm、最大幅3.9cm、最大遺存厚3.7cmである。脇部片側の子勾玉2は調査時に欠損した。背面の子勾玉の欠損は風化が進み、使用時の欠損の可能性もある。

頭尾は平坦に仕上げる。子勾玉は背面に3、腹面に1、脇面に2個持つ。母体勾玉の断面形は厚みがある楕円形である。表面は全面丁寧に磨かれる。腹部と頭部に部分的に敲打痕が残る。両側穿孔。

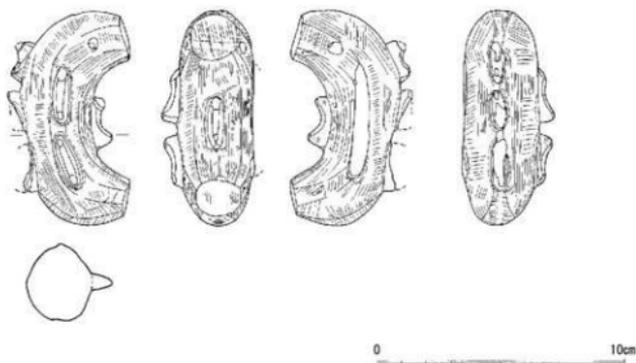


図13 9-1区出土子持勾玉 (1/2)

表5 3区・9-1区出土石製品観察表 \*復元値は ( )

挿図 番号	登録 番号	調査区	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)			備考
							全長 (残存長)	最大幅	最大厚	
図91	06000128	3区	F-17, No1	磨製石器	磨製 石鏃	ほぼ 完形	(7.8)	1.5	0.7	
図13	06002923	9-1区	Q-16, 黒色粘土直上	石製品	子持 勾玉	ほぼ 完形	8.7	3.9	3.0	

## V 2区の調査

### 1. 概要

調査区の北西部は砂丘微高地の集落部になり、南側では植物遺体層の直下から水田の畦畔を検出した。その水田の下層からも畦畔の芯材を確認し、さらにその下層から弥生時代終末の土器群を確認した。

#### 基本層序

中原遺跡2区の調査は梅白遺跡の調査直後に入ったという経過もあり、層序認識など基本的な調査方法は梅白遺跡のそれにならった。土層図は調査区西壁と南壁を記録した。図14に調査区西壁土層図を掲載する。調査時には1/20で作成したが、それをタテ1/40、ヨコ1/200に加工して掲載している。

図16が基本土層図である。壁面土層をもとにして基本土層を決定した。1層は表土層である。現代の水田耕作土である。厚さ約30～60cmで、調査区南側になると約10cmと薄くなる。調査区北側の砂丘微高地上では分層できる。2層は明褐色粘質シルト層で中・近世の遺物包含層である。現代水田の耕作により攪乱されており、調査区の中で部分的に10cm～20cmの厚さで遺存する。3層は黒褐色有機物層で古代～中世の堆積層である。調査区南側の水田を覆う有機物層（コモ層）は厚さ約30cmほど堆積するが、砂丘微高地上では黒色シルト層となる。4層は砂丘微高地上にみられる砂丘地山面を覆う土層である。さらに黒褐色シルト、暗褐色シルト、褐色砂質土などに分層できる。古代の遺構埋土と古代の遺物包含層である。5層は黄褐色粘質土で5層の上面にて上層水田を検出した。古代の水田跡であり、5層はその耕作土でもある。6層は黒褐色粘質土であり6層の上面にて下層水田を検出した。古墳時代の水田面と思われる。7層は調査区南側の低地部に部分的に堆積するが、それを埋土として弥生時代終末の土器集中部を検出した。さらにその下層は砂丘面いわゆる地山面である。

### 2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

#### (1) SX246土器集中部

標高約3mの砂丘を東西方向に蛇行して流れるSD252自然流路の一箇所に弥生時代終末の土器集中箇所がみられた。この土器集中部は平成8年度の確認調査トレンチで検出していたものである。図17に出土状況を示す。SD252自然流路が東西方向から北東へ屈曲する箇所に多量の土器が集中して出土した。その範囲は約6m×3mで深さは90cmである。自然木も混じって流路と同方向で出土しているが上層からの出土が目立つ。埋土は径1cm以下の炭化物を多量に含み、比熱した自然石も混じる。土器は主に1～6層中から出土しているが、土器片の大きさは3層→5層→6層の順に小さくなる。1～6層の厚さは約40cmである。7層中央部から大型の土器片が出土するが8層からは土器片の出土はほとんどみられない。遺物の出土状況や埋土の堆積状況から北東側から人為的に投げ込まれたと考えられる。出土土器は器種に偏りがみられ粗製の器台型土器（支脚）が最も多く約半数を占める。次に甕が多く、高杯、鉢、壺などもみられる。とくに比熱した器台型土器（支脚）の多さは特徴的である。甕は煮沸具であり、器台型土器（支脚）はその補助具であることなどから煮沸機能をもつ器種が多いため特徴である。これらの土器群は人為的に投げ込まれている。埋土には炭化物も多量に含むが祭祀的な遺物はみられない。これらから考えると、この土器集中部は集落で使用した土器の投棄場所と考えたい。

#### 土器

多量の土器が出土している。図示した土器以外にも破片がコンテナ数箱分ある。土器群の特徴として器種に偏りがあることがあげられる。確実に器種が特定できる口縁部などで数えると甕が42点、壺が

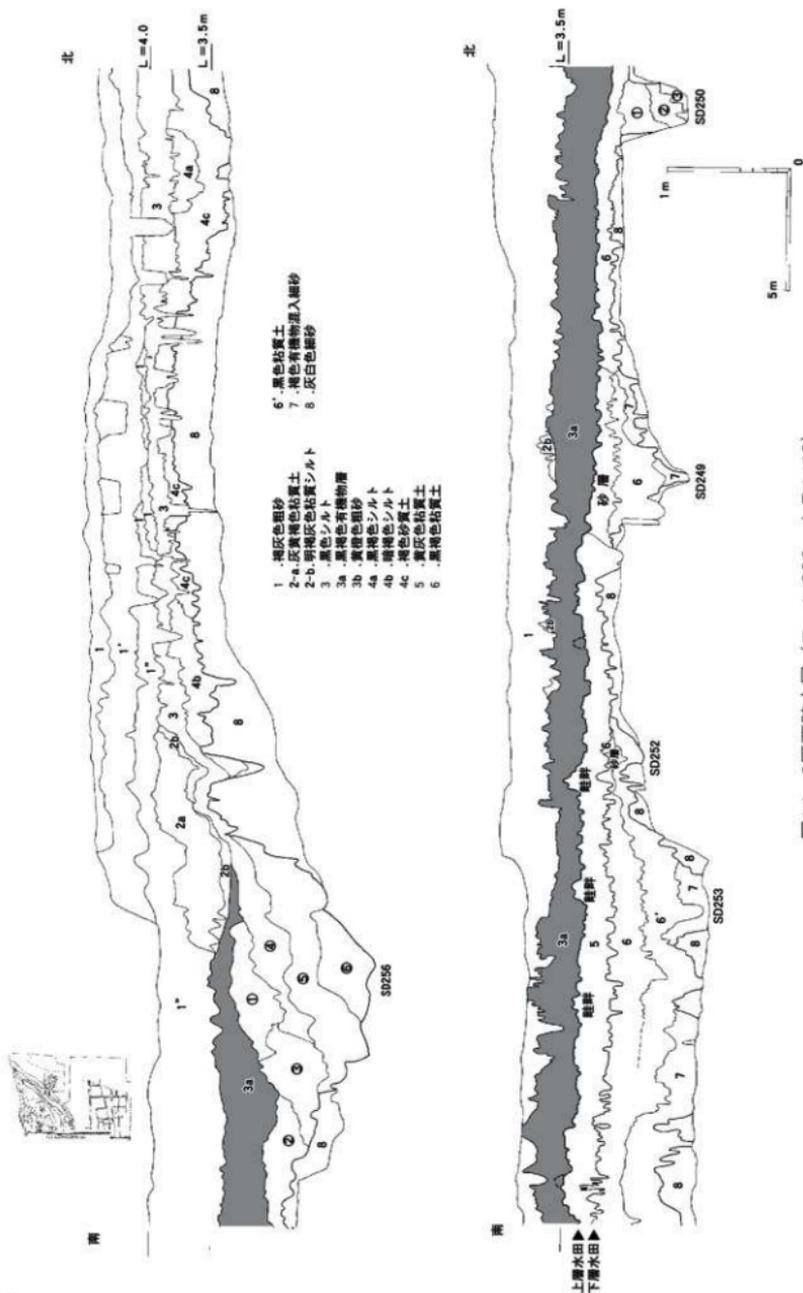


図14 2区西壁土層 (ヨコ1/200、タテ1/40)

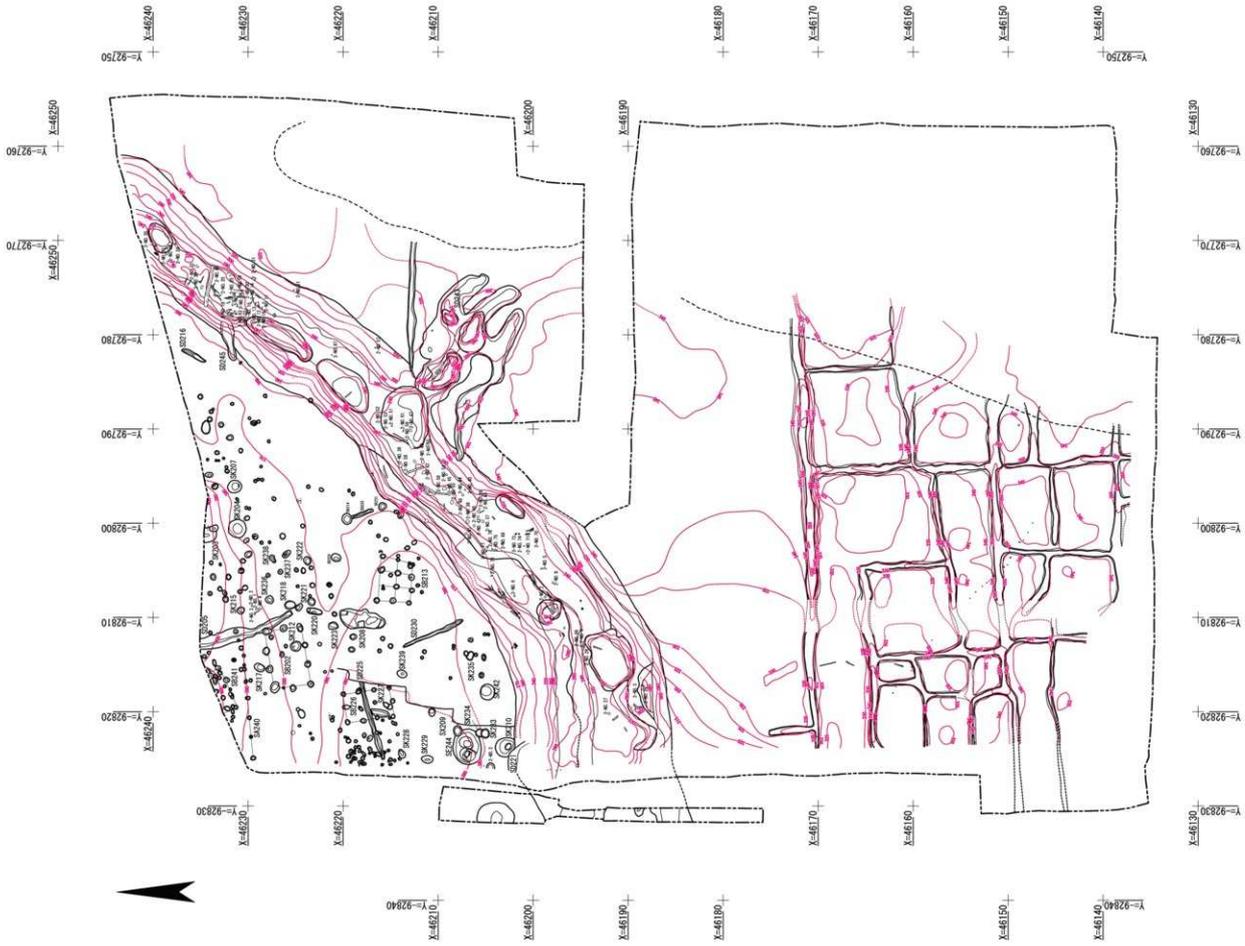


图15 2区遺構配置図 (1/400)

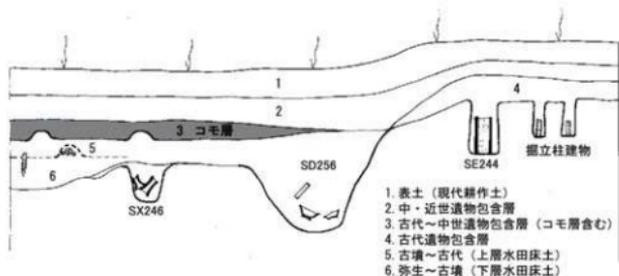


図16 2区基本土層模式図

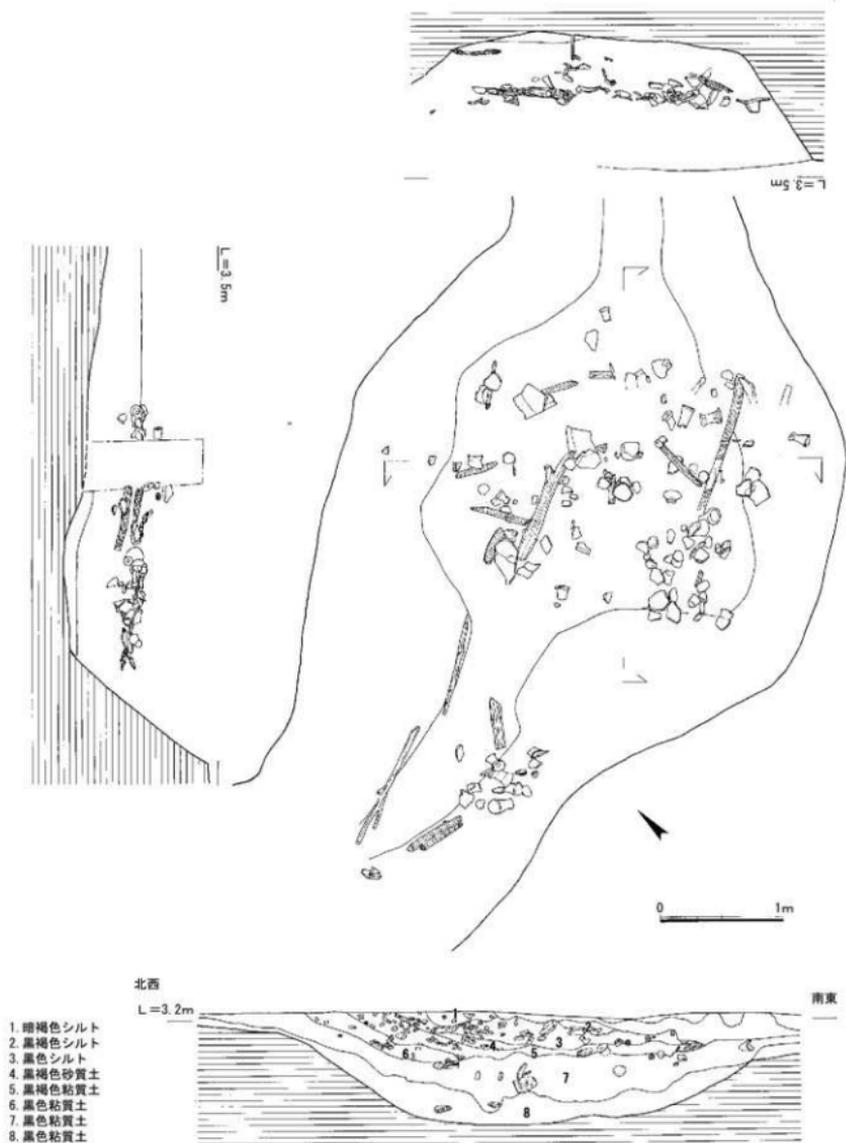
8点、高杯が16点、浅鉢が5点、支脚が3点、器台形土器が82点、器台が1点となる。器台形土器の占める割合が高いことが特徴である。器台形土器は粗製であり、被熱の痕跡があるなど明らかに器台とは異なり、機能としては支脚が考えられるだろう。従って器台形土器を支脚とし、器種の比率をみると甕が27%、壺が5%、高杯が10%、浅鉢が3%、支脚が54%、器台が1%と支脚が約半分を占める。甕には煤が付着したものも多いため煮沸具としての機能が考えられ、その補助具として支脚がある。煮沸に関する土器が多いことがこの土器群の特徴であろう。

土器群の編年上位置づけは甕、複合口縁壺などからできる。まず、複合口縁壺は蒲原編年の惣座0式～惣座1式に相当する。甕は胴部最大径が上位か中位よりであること、底部形態は角がとれやや丸味をもつなどの特徴がある。さらに、台付甕が1点ではあるが出土している。これらのことから本土器群は蒲原編年の惣座式の古い段階に位置づけられよう。以下、挿図にそって記す。

1～42は甕である。1～38は頸基部に突帯を回さない長胴甕である。口径は20～30cmで約25cmが最も多い。蒲原編年(1992)のB I 類である。型式変化は底部が平底→丸底であり、胴部最大径が上位→中位→下位気味であり、頸基部のくびれが弱い→強いである。調整は外面はタテハケのみ、内面はタテハケ、ヨコハケ、ナメハケがあり、ハケのちナデ消などもみられる。

1は甕のなかで唯一の完形である。底部は角がとれてやや丸味をもつ。口縁部はくの字で胴部最大径はやや上位にある。頸部内面には稜線は入らない。外面は底部から頸基部までタテハケで内面もハケを施す。2～38は口縁部破片であり、大半は反転復元である。2の口唇部はやや丸味をもち頸部内面は緩やかな稜線を有す。3の口唇部は面取りされ頸部内面は稜線を有す。口縁部外反気味。4,5の口唇部は面取りされ頸部内面は稜線を有す。6は肩部内面に粘土帯接合痕が残る。7は内面に炭化物付着。8は胴部が張り、頸部内面には稜線は入らない。9の頸部内面の稜線は肩部内面と口縁部内面のハケの境となり蛇行する。10の口唇部はやや丸味をもつ。11は肩部内面ハケ。12はナデのみのため稜線は入らず。

13, 15, 17～19, 21, 22, 26は肩部内面と口縁部内面のハケの境のため頸部内面の稜線は直線的である。14は外面煤付着。やや器壁が厚く肩部内面は未調整。16は肩部内面に粘土帯接合痕が残る。口唇部はやや丸味をもつ。23は頸部内面には稜線は入らない。24, 25は内外面ナデか? 色調は黄橙色である。27, 28は頸部内面に稜線をもたない。器壁が厚く肩部内面は粘土帯接合跡をナデ消す。口唇部は丸く仕上げる。29は胴部片。上下の判断を迷う。下ぶくれの形態で外面に帯状に煤が付着。内面ハケ。本土器群の甕の中で異質であるが混入品ではない。30～34, 38は頸部内面に稜線をもたない。口唇部面取り。35は口縁部が直立気味。直口壺の可能性あり。36は胴部が張る。外面煤付着。37は口縁部が外反気味。胴部も強く張り、広口壺の可能性あり。



1. 暗褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. 黒色シルト
4. 黒褐色砂質土
5. 黒褐色粘質土
6. 黒色粘質土
7. 黒色粘質土
8. 黒色粘質土

図17 2区SX246遺物出土状況1 (1/40)

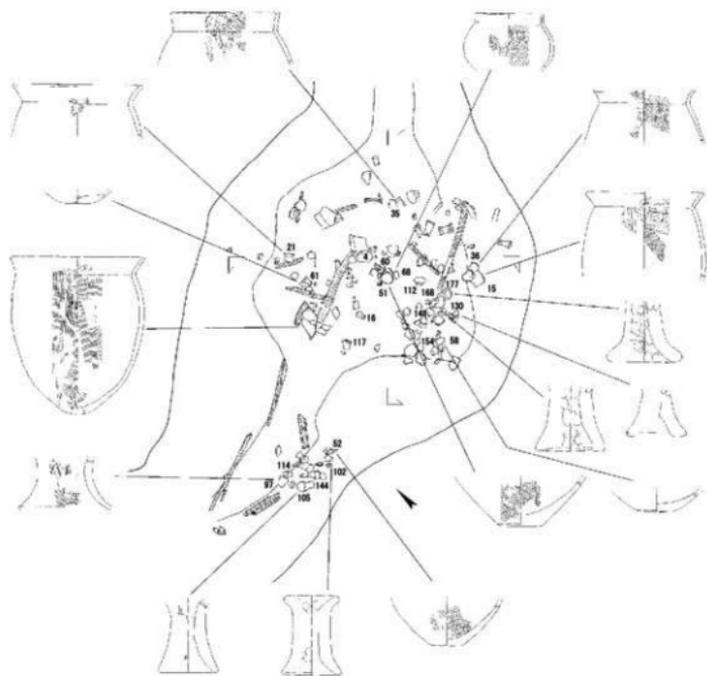


図18 2区SX246遺物出土状況2

39～42は頸基部に突帯を回す長胴甕である。39は断面三角形の突帯で口唇部に鋸歯文を施す。40、42は断面台形、41は断面三角形である。

43～65は底部である。甕、壺、浅鉢の底部であろうが区別が困難である。甕や壺の底部の型式変化は平底→丸底である。また、1点ではあるが台付甕の底部がみられる。

43～48は平底ではあるが角がとれる。底径は4.0～7.0cmである。43は胴部下半部カキケズリ。44は底面ハケ。45は胴部下半部カキケズリ状。46はより丸底化が進む。47は外面黒色。タール状の付着物あり。48は底面近くまでハケ。49、50、51は平底で底径も13.0cm、10.6cm、9.8cmと大きい。甕棺あるいは壺棺の底部片か。51はやや丸底化が進む。52、53は丸底化がすすむ。ともに壺の底部か？ 54～57は器壁が厚い。特に56、57は粘土帯を二重にした底面になる。56は外面タタキ。大型壺の底部か？ 58～64はより丸底化がすすむ。壺か？ 59は内外面赤色味を帯びる。62は粘土帯を二重にした底面になる。65は台付甕の底部。台部はハの字形に開く。

66～68は直口壺口縁部。66は内外面ハケ。67は器壁が薄く口縁部が外反し広口壺とも分類できる。68は下ぶくれ気味の胴部に直立する口縁部がつく。69～71は広口壺口縁部。69は直線的に外方に開く。70、71は口縁部が外反する。

72、73は複合口縁壺の口縁部片。袋状口縁の系譜をひく。72は直線的に内傾した後上外方に屈折する。

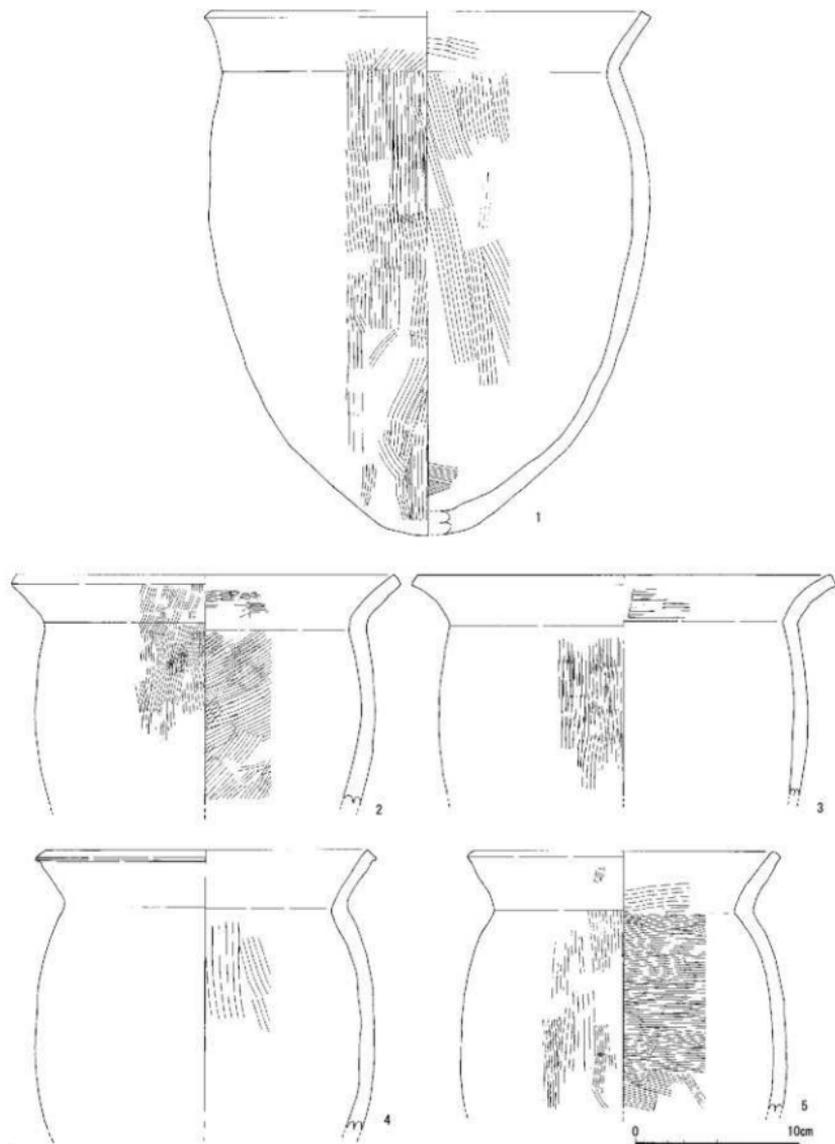


图19 2区SX246出土土器1 (1/3)

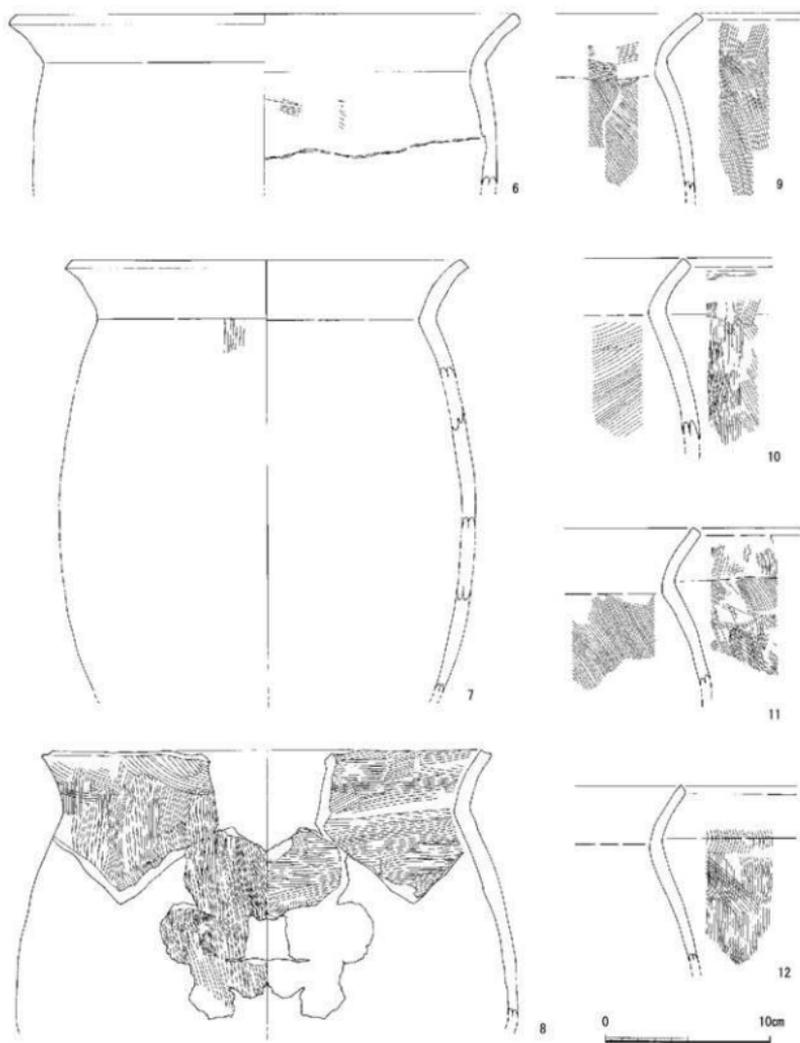


图20 2区SX246出土土器2 (1/3)

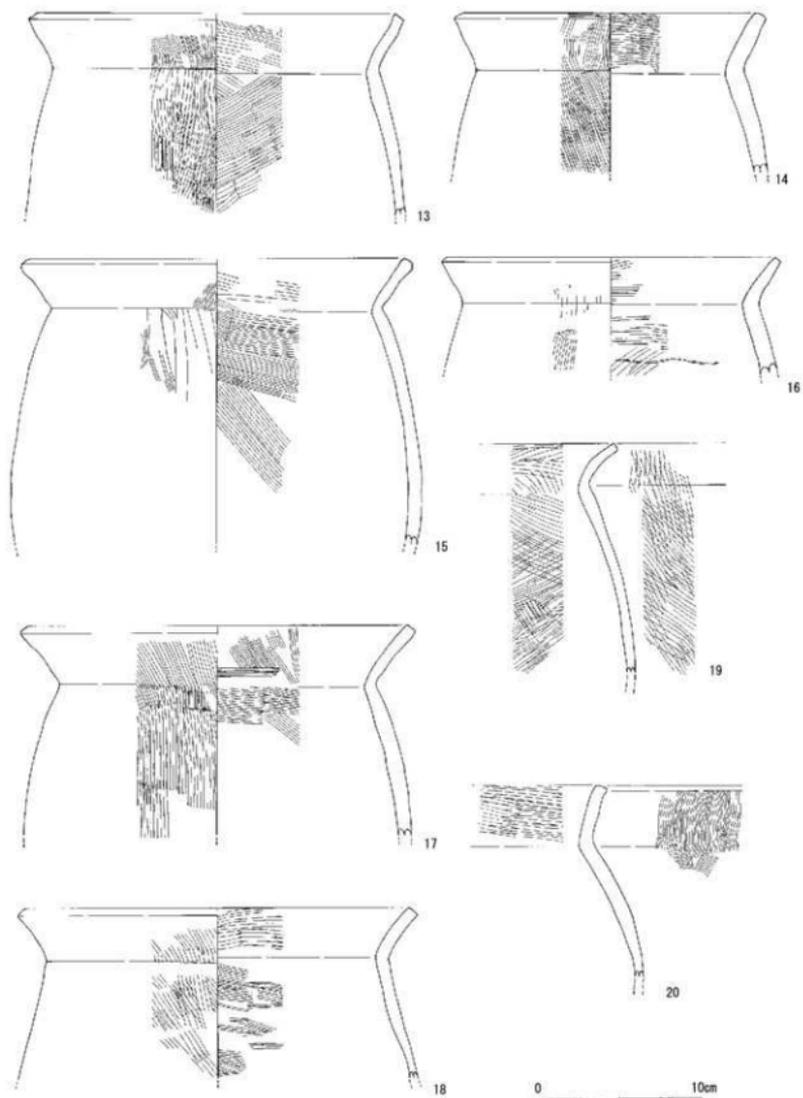


图21 2区SX246出土土器3 (1/3)

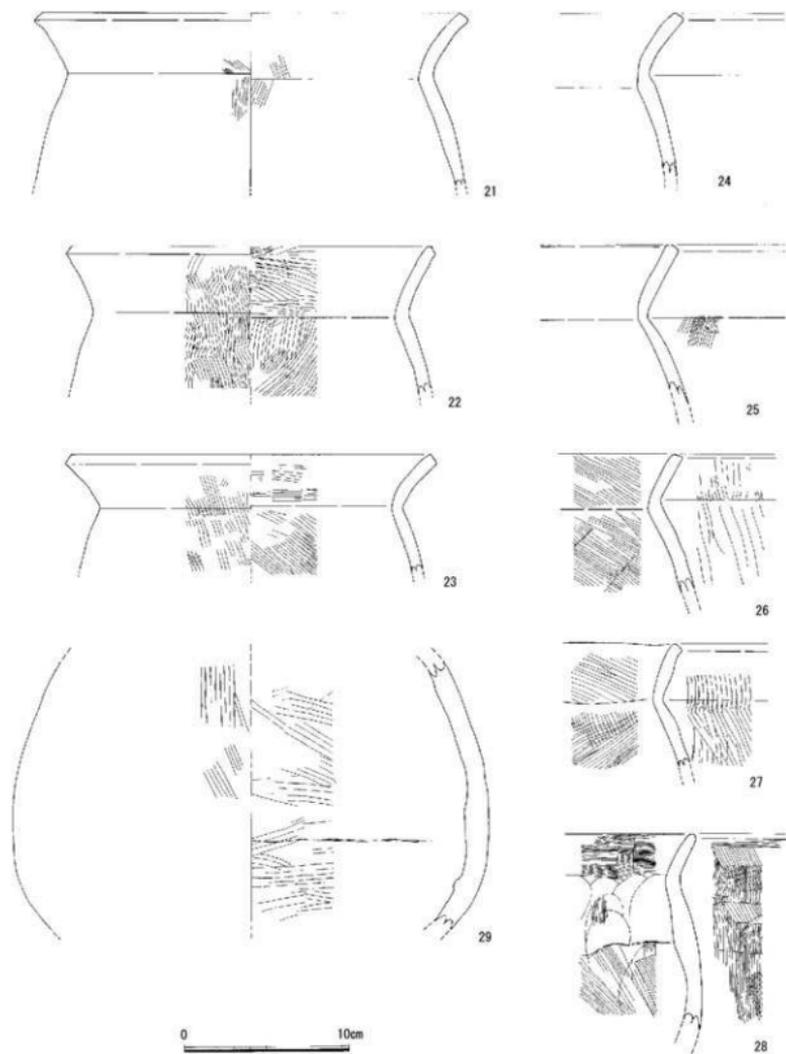


图22 2区SX246出土土器4 (1/3)

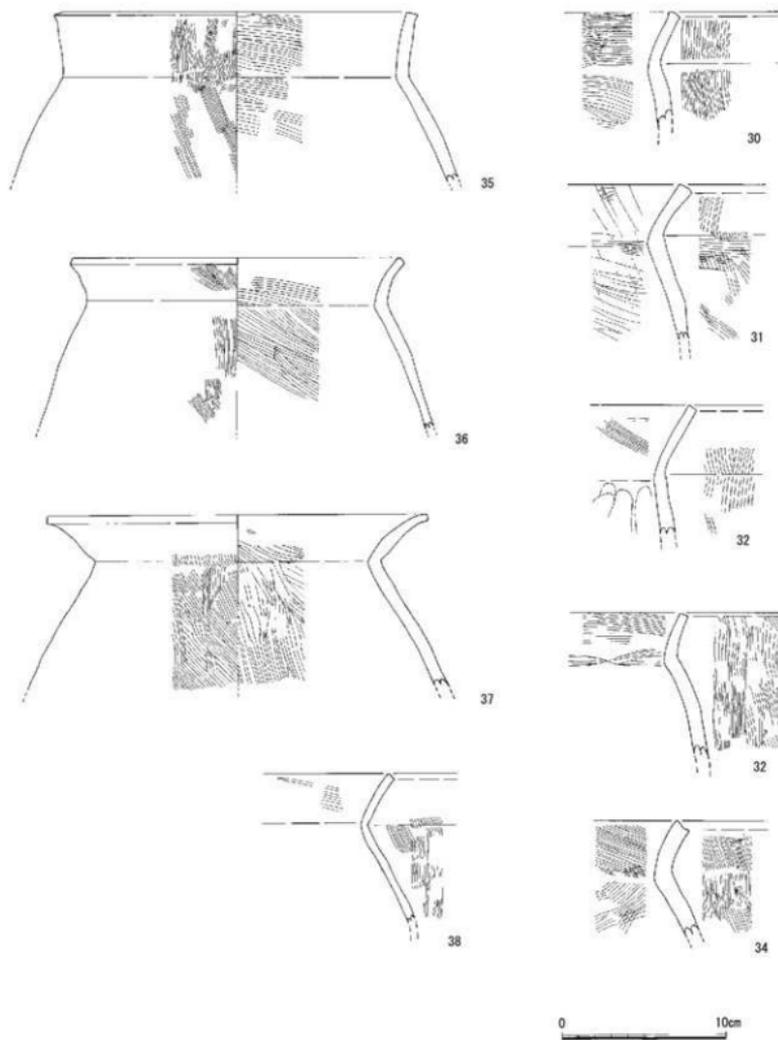


图23 2区SX246出土土器5 (1/3)

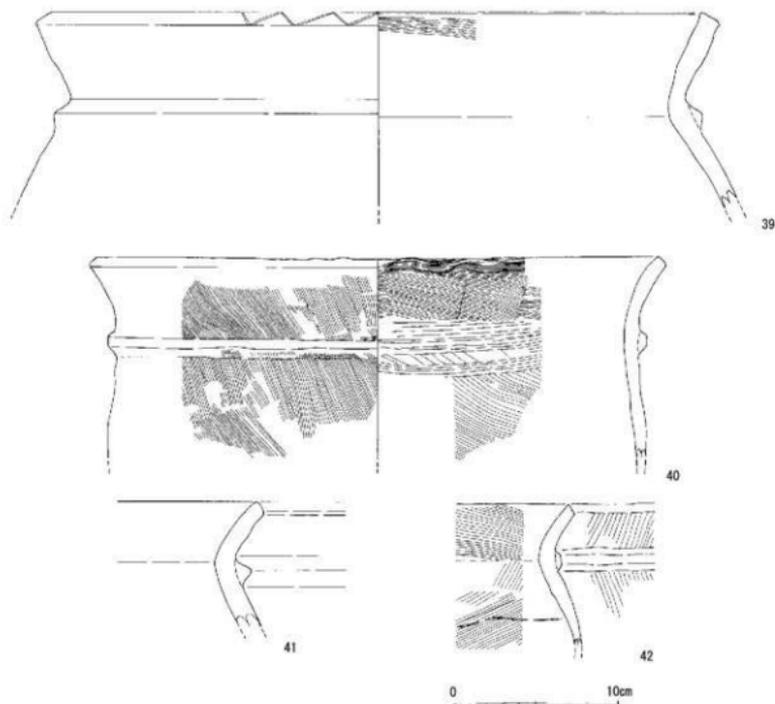


図24 2区SX246出土土器6 (1/3)

73は二次口縁が直立した後外反する。型式変化は72→73である。蒲原編年によると72が惣座0式、73は惣座1式である。

74～89は高杯。74、75は杯部片である。杯部と口縁部は粘土帯を接合するが74は杯部から口縁部にかけて直線気味に開く。内外面に粘土帯接合痕跡が沈線状に残る。内面はハケのちナデ、磨き状、外面は粗いハケ。75は口縁部外反。76～89は高杯脚部。脚裾部に三方あるいは四方の円形の透かしが入る。長脚と短脚があり、長脚には脚部中実と脚部中空がある。惣座式の高杯には脚部中実の型式がみられず特異な土器型式である。76～80、84、86は長脚の脚部中実である。中実部は約10cmと長い。77、79、80は三方透かし。78は四方透かし。81は脚部に棒状工具をつっこみ中空にする。四方透かし。82は中実部が約5cmと短い。83は脚部が完全に中空で外面磨きを施すなど精製品である。四方透かしか？透かしの約1.5cm下方に小さな円孔あり。84、86は三方透かし、85は四方透かし。87は脚裾部、三方透かし。台付鉢の脚部の可能性あり。88、89も台付鉢の脚部の可能性あり。90～93は浅鉢。90～91は口縁部が屈曲する。92の口縁部は内湾する。93は台付鉢の脚部である。

94～96は支脚である。94は受部が水平に近く裾部にかけて広がる。中空であり粗いタタキ目を残す。95は受部が傾斜し上方先端が嘴状に突出する。中空である。96は断面方形の中実で受部にかけて曲がる。背面に対になった窪みがある。

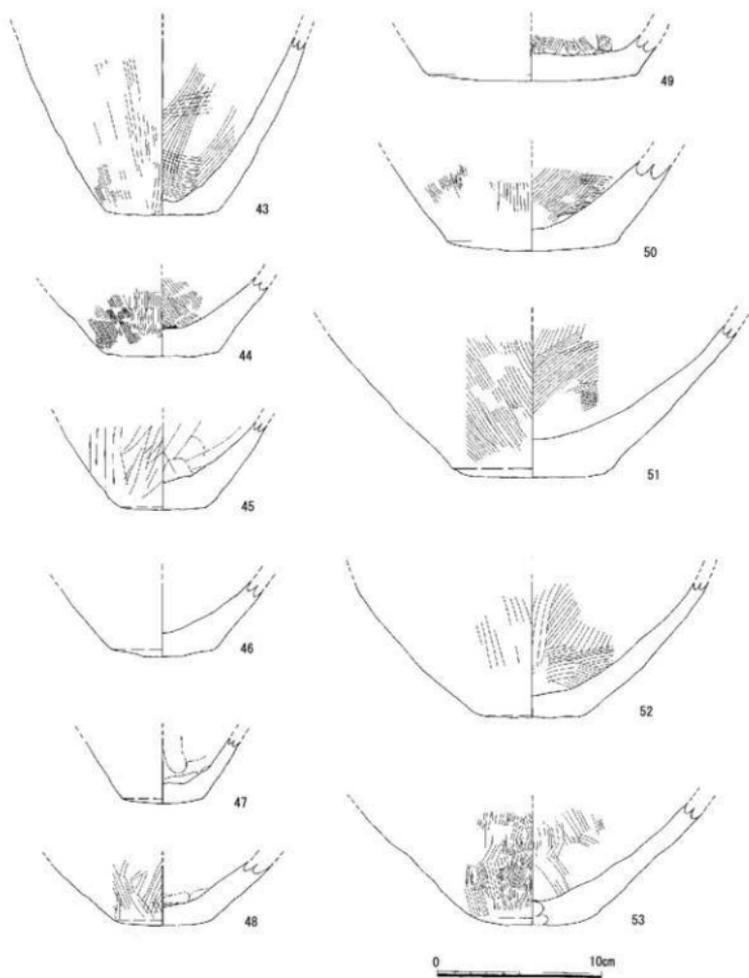


图25 2区SX246出土土器7 (1/3)

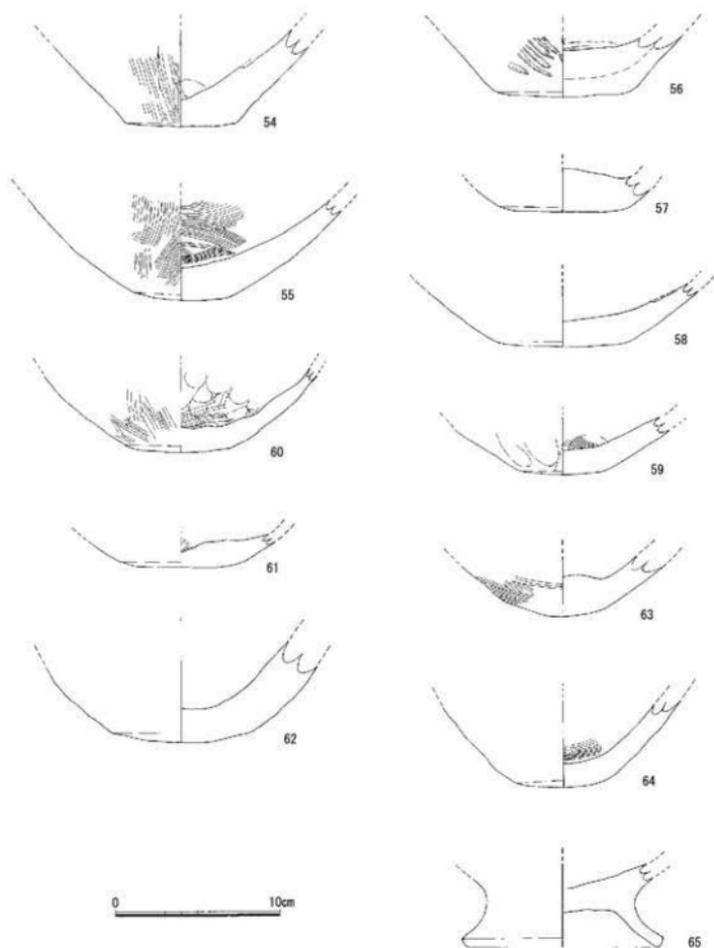


图26 2区SX246出土土器8 (1/3)

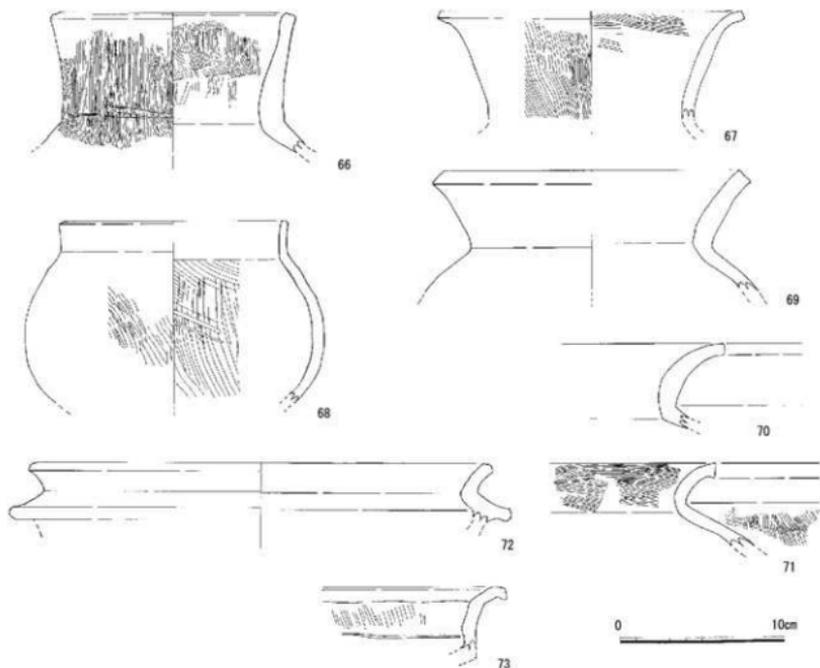


図27 2区SX246出土土器9 (1/3)

97は器台。胴部から裾部にかけて外反する。裾端部内面はわずかに内湾する。

98～179は器台形土器である。被熱痕がみられ支脚と考えられる。すべて粗製であり器壁が厚く指頭圧痕がみられる。蒲原編年（2003）の器台Cにあたる。佐賀平野では惣座式に器台形土器の占める割合は低いが唐津地域では高い傾向があるようである。

器台形土器は次のように分類できる。Ⅰ類は受け部、裾部とも外反するが、受部、裾部とも類似するため天地を迷う個体がある。胴部は棒状の工具で中空にする。受部や裾部形態でさらに細分は可能である。Ⅰ類は器高でⅠa類・高さ約15cm～17cmとⅠb類・高さ約10cmに細分できる。本遺跡出土器台形土器の大半はⅠ類である。Ⅱ類は胴部最小径が上位にあり、裾部が広く外反する。胴部の棒状工具による中空部分がⅠ類に比べ短い。105、106がⅡ類である。Ⅲ類は器壁が厚く、中空部は狭い。全体的形態は中空の棒状で、裾部はやや肥厚する。Ⅲ類は159である。Ⅳ類は全体的形態はⅠ類と同じであるが胴部が完全に中空にはならない。細分できる。Ⅳ類は177～179である。この分類で比率をだすとⅠa類が83%と大半を占め、Ⅰb類は10%、Ⅱ類は2%、Ⅲ類は1%、Ⅳ類は4%になる。以下、個別に記述する。

98～104はⅠa類である。98は受部内面がヨコナデにより丁寧な仕上げられる。外面全面にタテおよびヨコの線刻あり。99はとくに粗製で被熱痕あり。101は底面に同一方向の棒状の圧痕あり。103は裾部内面がやや内湾する。105、106はⅡ類である。105の胴部中空の径が約2cmで106の同径は1.3cmと細い。107は受部内面はナデにより直線的に仕上げる。108～158はⅠa類である。すべて裾部片である。

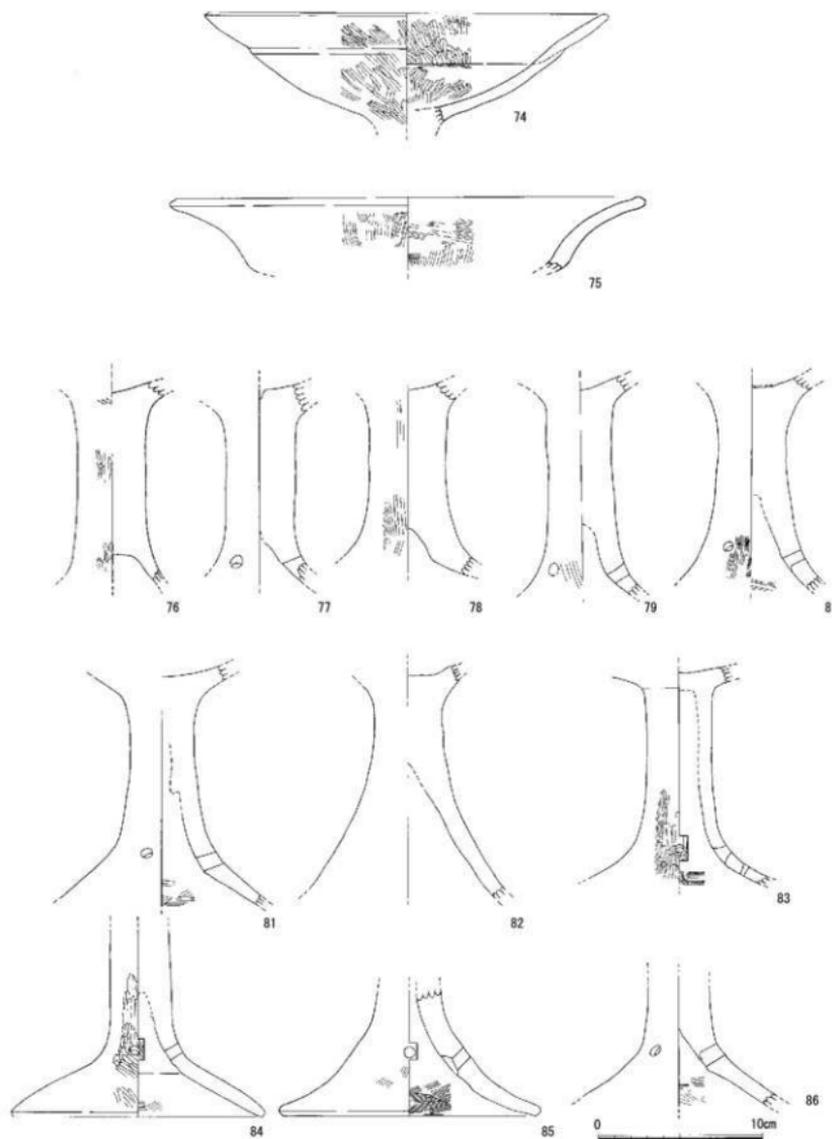
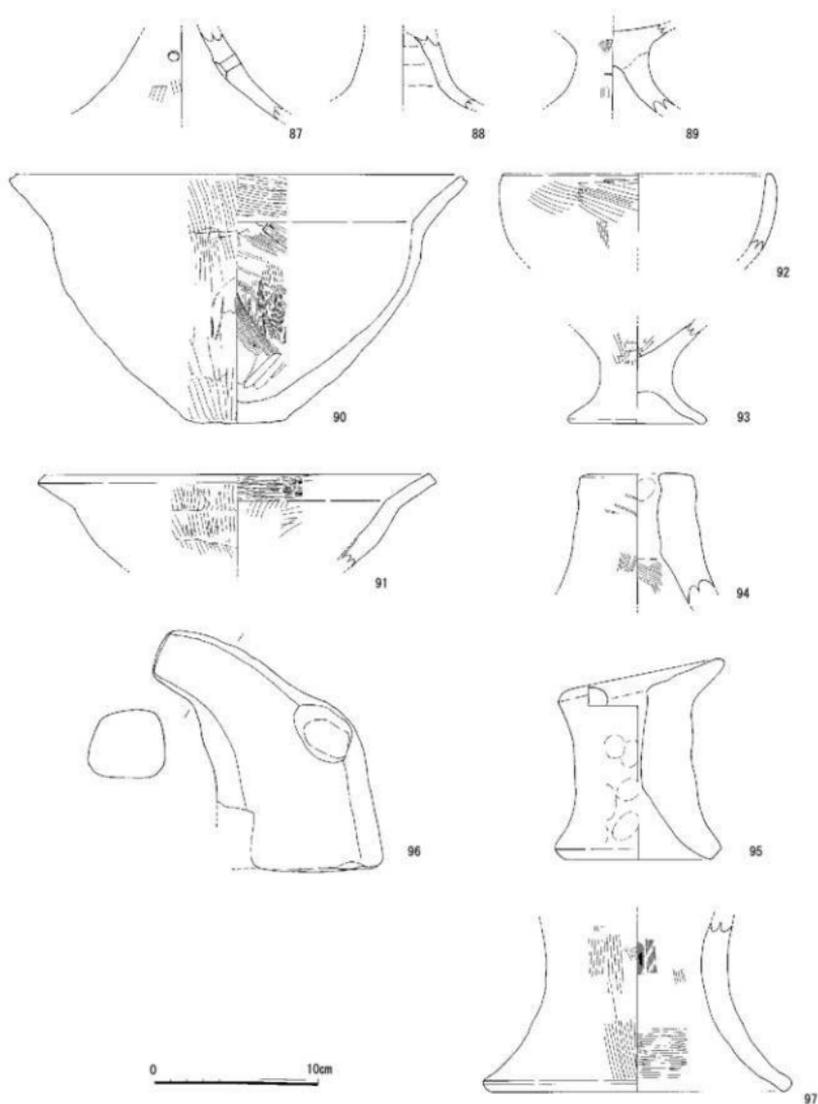


图28 2区SX246出土土器10 (1/3)



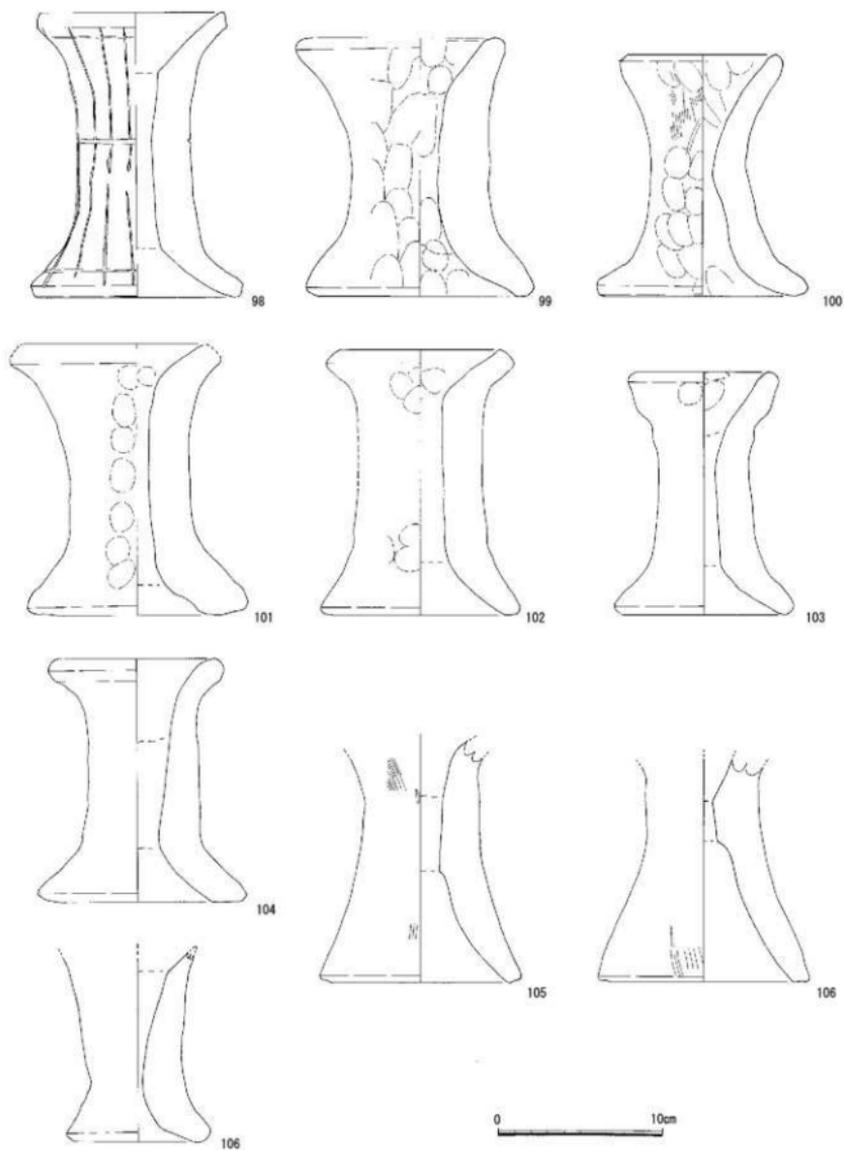
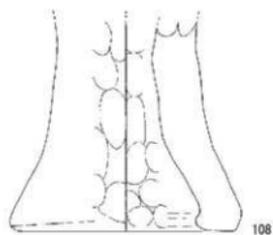
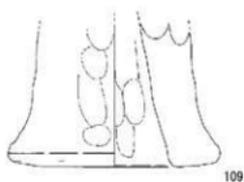


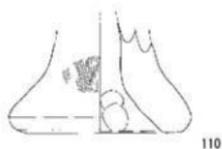
图30 2区SX246出土土器12 (1/3)



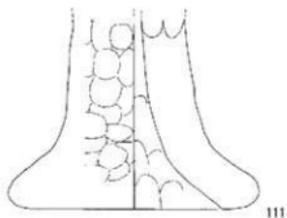
108



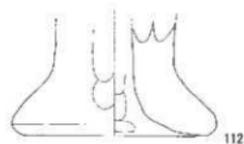
109



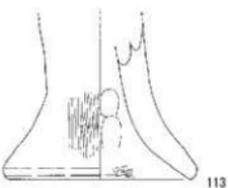
110



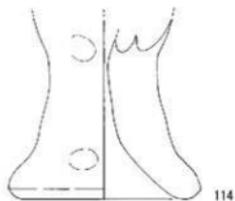
111



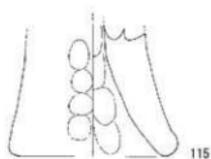
112



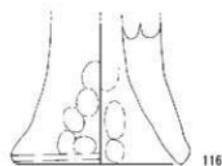
113



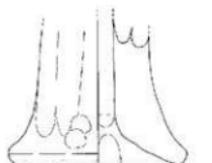
114



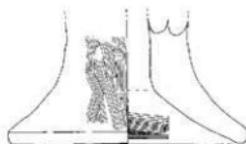
115



116



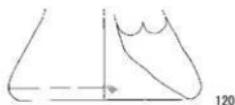
117



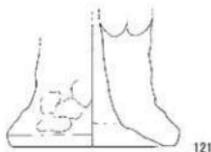
118



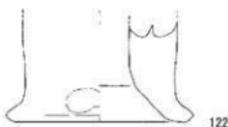
119



120



121



122

0 10cm

图31 2区SX246出土土器13 (1/3)

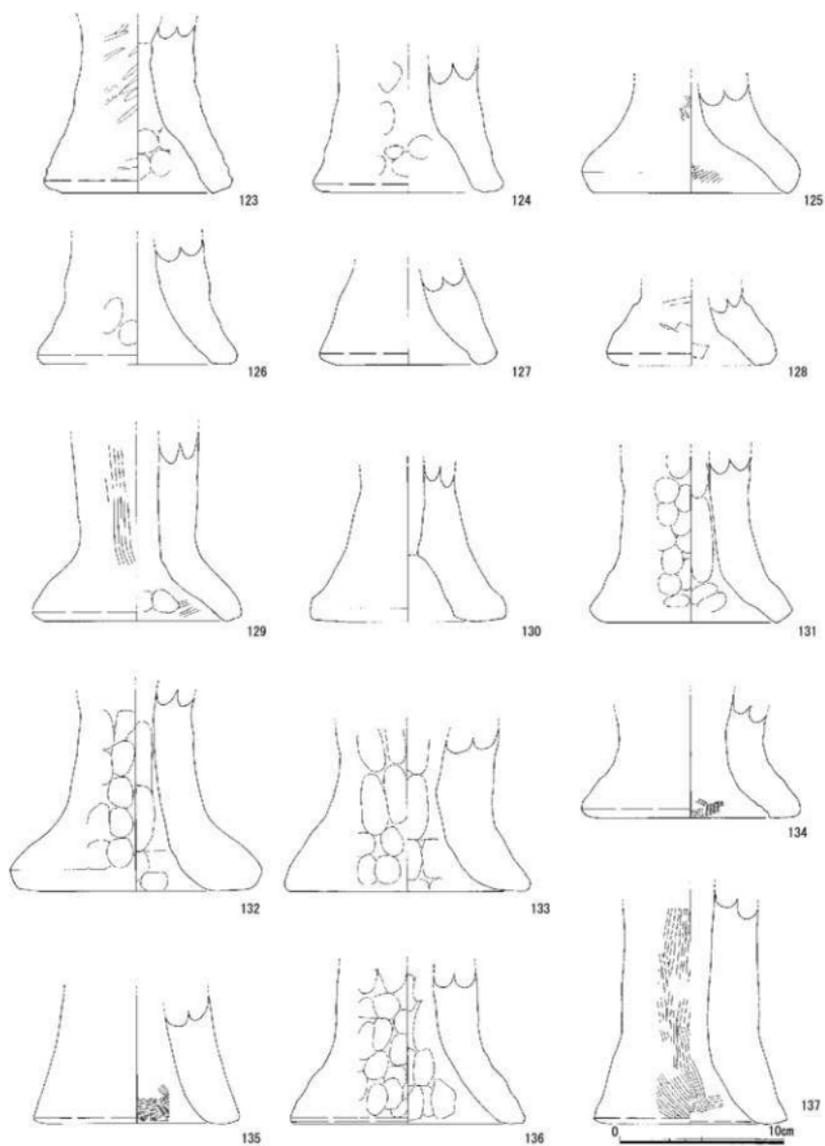


图32 2区SX246出土土器14 (1/3)

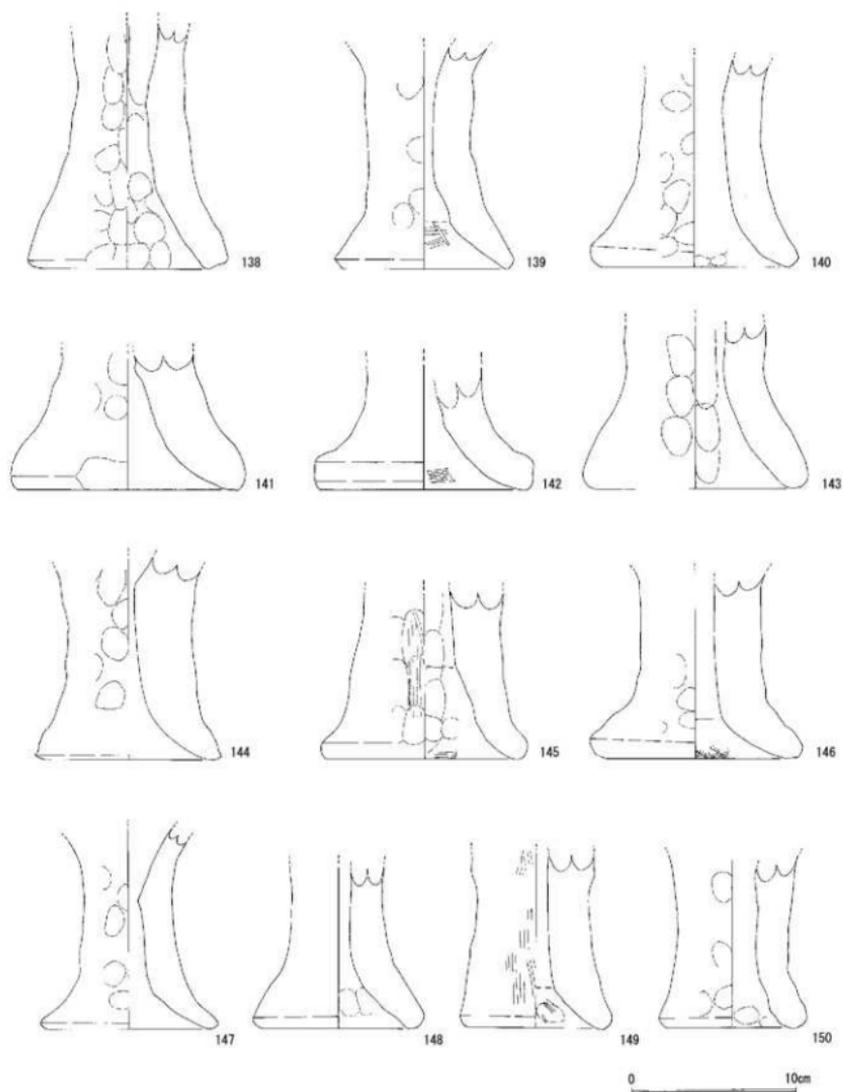


图33 2区SX246出土土器15 (1/3)

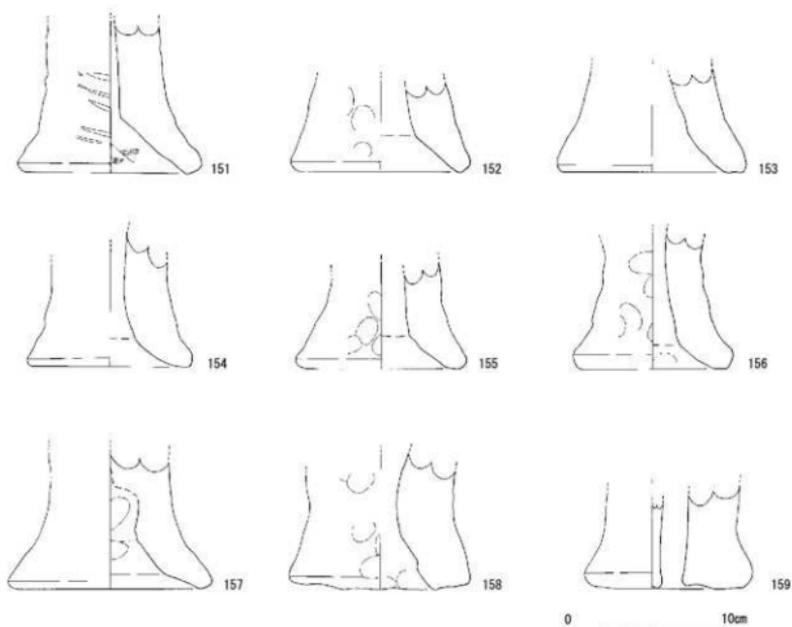


図34 2区SX246出土土器16 (1/3)

裾部形態には様々なバリエーションがある。108、109は裾部が直線気味に広がる。109の接地面には棒状の圧痕あり。110から121は外反しながら開く。裾端部が厚く肥厚するもの（110、111、112など）とハケで丁寧に仕上げるもの（113、118）などがある。122は胴部は直線的で裾部端部は外方に開く。123は外面にタタキ痕あり。124、125、128は裾部内面がやや内湾する。141の裾端部外面の一部に平坦面あり。147～150はやや小形である。151は外面にタタキ痕あるいは絞り痕がみられる。157はⅣ類。胴部中央は中実である。極めて細い棒に粘土を巻き付けて胴部をつくる。裾部内面は指にて孔をあける。158は器壁が厚く胴部から裾部にかけてほとんどひらかない。159はⅢ類である。胴部中空の径は1.6cmである。

160～167は受部片である。160、161、166は受部内面はハケやナデで仕上げる。168は受部と裾部が欠損する。169は比較的精製で器台に分類できるかもしれない。外面は絞り痕のちナデで丁寧に仕上げる。170～176はⅠb類。器高が約10cm前後と規格性がある。全体的な形態はⅠa類と同じ。

177～179はⅣ類である。177、178は細い棒状工具に粘土を巻き付けて胴部をつくるが完全には中空にはならない。176は受部と裾部から178は裾部から棒状工具をつっこむ。179は胴部が完全に中実で受部、裾部内面ともナデで仕上げる。

#### 木製品

刳物の杓子形木製品である。表面は平滑で丁寧に作りである。身部の口縁部と把手先端が欠損する。身は丸底の椀形であるが口縁部は全周が水平にならない。把手側の口縁部は水平であるが先端部に

かけて浅くなる。従って、身口縁部の置き方によって横杓子になる。把手は若干反しながら二叉に削り出す。断面形は隅丸台形である。左側把手の表面に三本の刻目がつく。

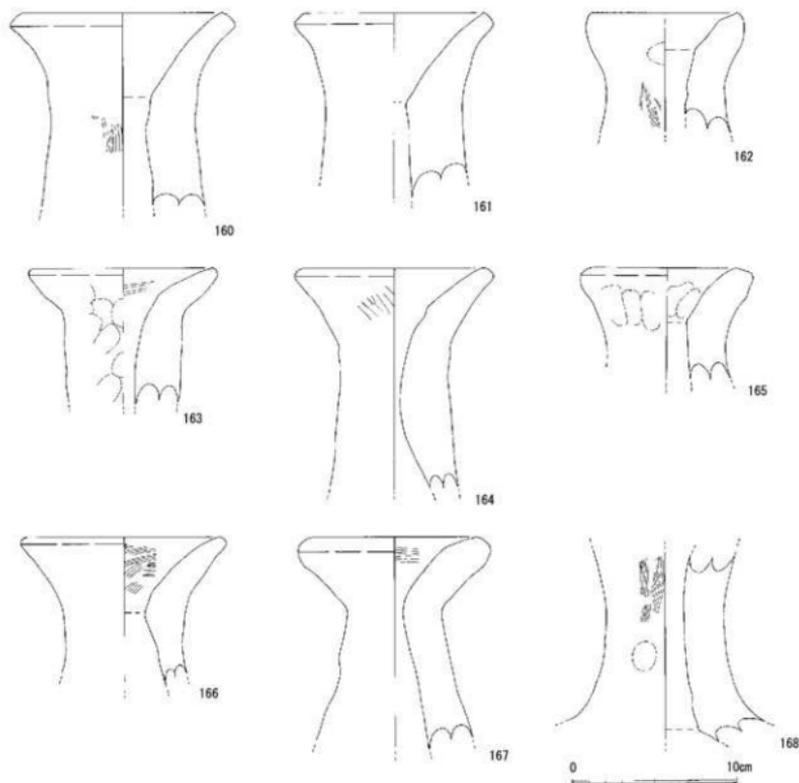
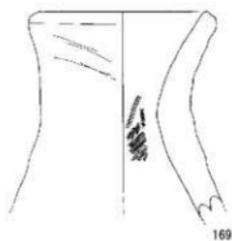


図35 2区SX246出土土器17 (1/3)

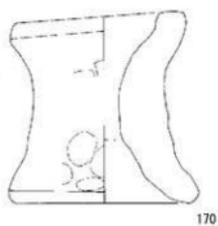
## (2) 下層水田跡

調査区南側低地部にて検出した。上層には奈良時代の水田跡を確認した。上層水田と下層水田の間には5層が堆積するがその厚さは約20cmである。5層は古墳時代から古代の堆積土で上層水田の耕作土になる。遺物はほとんど出土しない。黄褐色粘質土で1~5mm前後の砂粒を多く含み、樹皮、木の根状の植物繊維も多く混入する。下層水田は6層直上で検出した。6層は黒褐色粘質土で植物遺体を含む。北側では粘性が低くシルトに近くなるが南側では粘性が増す。

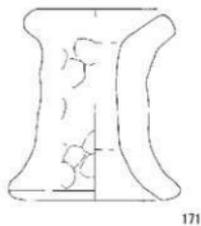
明確な畦畔は検出できなかったが、畦畔の芯材と思われる列状に並べた材群 (SF256) やそれに併行する杭列を確認した。SF256は調査区南西部のK、L-11区画で検出した。長さ約0.5~1.2mの自然木を南北方向に雑然と置く。芯材の幅は約1~1.4m、長さ約10mである。芯材の中には加工された木製品も



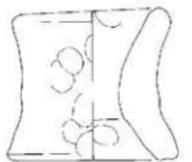
169



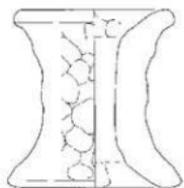
170



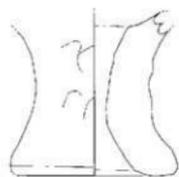
171



172



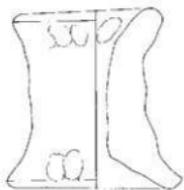
173



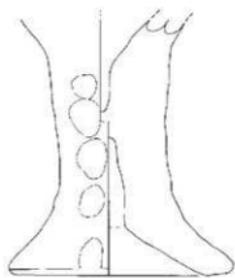
174



175

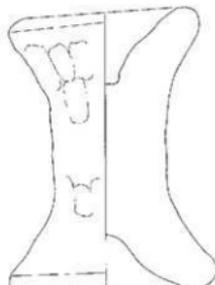


176

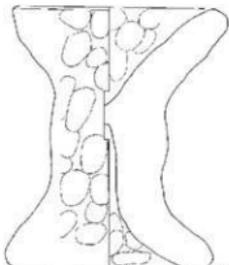


177

0 10cm



179



178

图36 2区SX246出土土器18 (1/3)

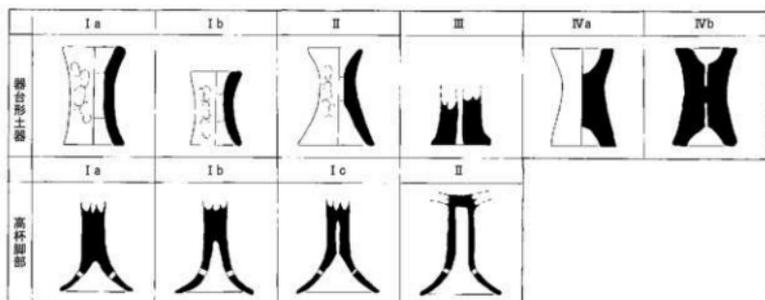


図37 器台形土器・高杯脚部分類図

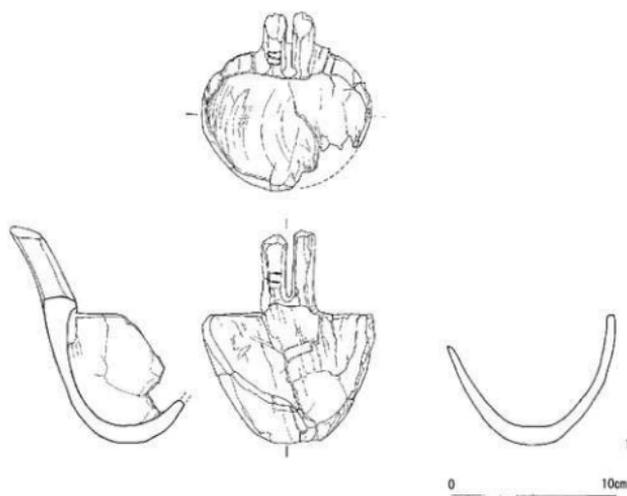


図38 2区SX246出土木製品 (1/3)

みられる。梅白遺跡の古墳水田であるSF171ときわめて類似しており、大畦畔の芯材と考えられる。本来あったと思われる小畦畔はその後の連続耕作や上層水田時の耕作により攪乱されたと思われる。水田区画は検出できなかったが、上層水田と畦畔の方向は同じであることから、同じような区画が想定できる。

9区の同じ層序からは子持ち勾玉が5区の同一層序からは古式須恵器が出土しており、水田の時期は5世紀代であろう。

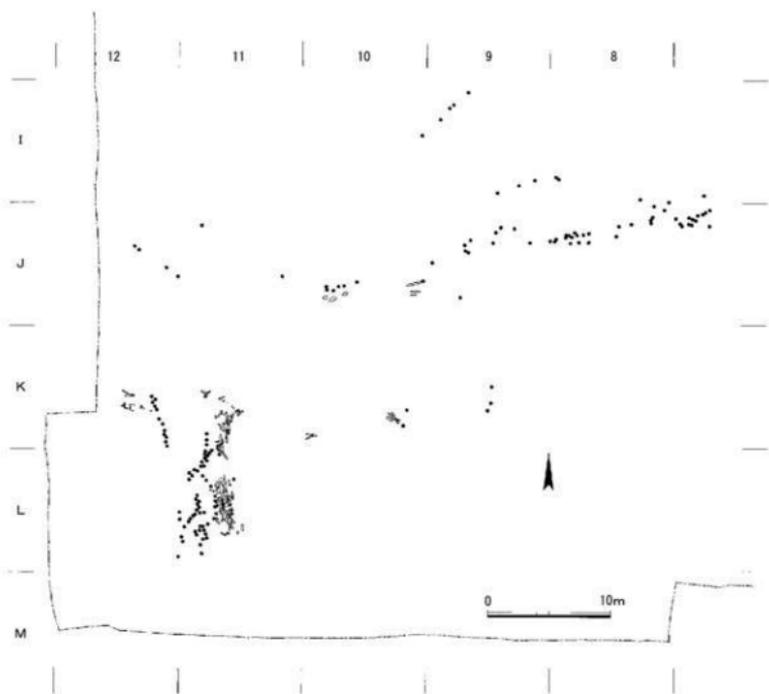


图39 2区下層(古填)水田畦畔杭(1/400)

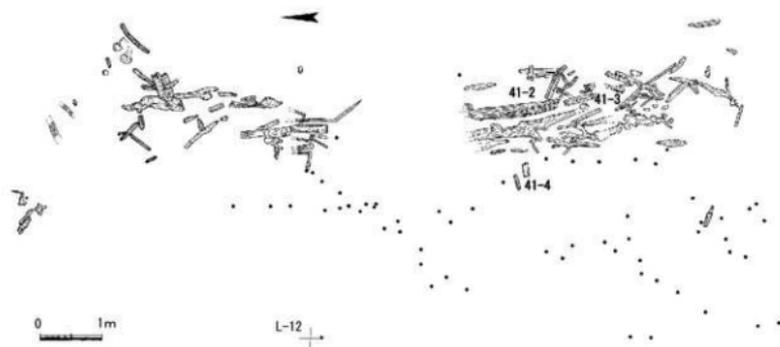


图40 2区下層(古填)水田畦畔芯材, 杭(1/80)

## 土器

1は畦畔盛り土内から出土した。土師器、広口壺の口縁部である。内外面調整不明瞭、径1~2mmの砂粒を多量に含む。内外面茶褐色。

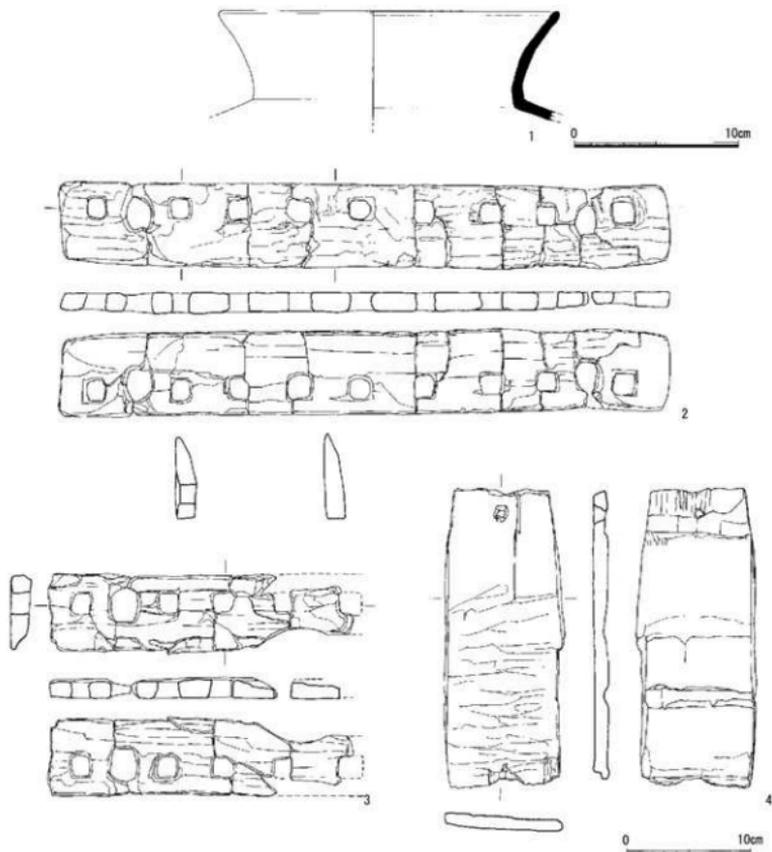


図41 2区下層水田出土土器 (1/3)・木製品 (1/4)

## 木製品

すべて畦畔盛り土内から出土した。2、3、4は田下駄である。2、3は杵の縦木。2は完形で全長50.5cm、最大幅6.8cm、最大厚1.6cmを測る。横断面形は略台形で、ほぞ穴をあけない長辺側が鋭角になる。横木のためのほぞ穴を11箇所穿つ。径約1.5~2cmの平面方形の穴が9箇所、両端から2番目のほぞ穴2箇所は長径

約2.5cmの不整形円形である。3は半分欠損。残存長25.0cm、最大幅6.3cm、最大厚1.6cmである。横木のため  
のほぞ穴は2と類似する。大きさ、ほぞ穴の形態などから、同一の田下駄の杵の縦木と考えられる。

4は田下駄の足板である。下半部を欠損する。最大幅9.5cmである。上半部端部よりに鼻緒孔1を穿つ。  
表面は足を置いた痕跡が横方向の皺となって残る。裏面4箇所に横木を受ける窪みが残る。

### (3) 自然流路跡

調査区南側の低地部にて検出した。上層には古墳時代の水田跡、さらにその上層には奈良時代の水田  
跡を確認した。砂丘を地山として東西方向に蛇行しながらSD252とSD253が流れる。流路の幅は2~3m  
でSD252の東側では9~10mほどにも広がる。深さは0.2m~0.6mであり、自然流路であるがゆえに形状  
が一定しない。流路の底も部分的に深くなる箇所がある。

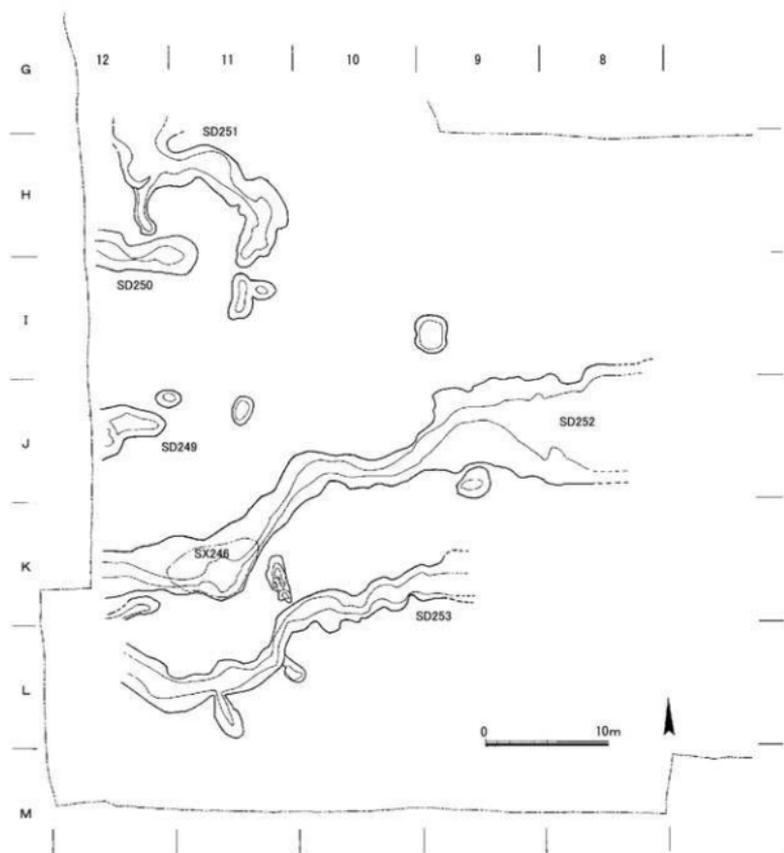


図42 2区自然流路跡 (1/400)

砂丘としては調査区の東側に向かって低くなる地形を反映していると考えられる。SD252の南北両側には土坑状の落ち込みが数箇所あるがこれも自然の地形と考えられる。このような砂丘を浸食する流路などの地形は梅白遺跡ではみられなかった。砂丘の形成とその後の地形変化に要因があるのだろう。流路は後述する土器集中部などから弥生時代には存在し、古墳時代中期には完全に埋没している。

### 3、古代の遺構と遺物

#### (1) 掘立柱建物跡、柵列

##### SB202

調査区の北西部に位置する。北方約4.5mにSB241が、南方約3.7mにSB226がある。長軸方位はN80°Wで桁行3間、梁間2間の掘立柱建物跡である。P7、P8で柱根が遺存し、P2、P6、P10で柱穴底面に柱根による硬化部がみられた。桁行の柱間はP7-P8が2.3mで、他はすべて2.0mである。梁間はすべて1.9mと規格性をもつ。柱穴は径60～80cmの円形や不整形円形、楕円形である。

柱穴出土遺物はP1から土師器胴部片、P3から土師器甕口縁部片、P4から土師器高杯脚基部片、P5、P7、P8から胴部片、P10から須恵器杯蓋口縁部片が出土している。P10出土の須恵器蓋のみ図示する。8世紀代である。

#### 出土遺物

1は須恵器杯蓋3ア類の杯蓋である。つまみ部分から破損しているが、つまみを有するタイプで、口縁端部が断面三角形に肥厚する。

##### SB213

調査区の北西部に位置する。北西約9mにSB202が、西方約6mにSB226がある。長軸方位はN81°Wで桁行3間、梁間2間の掘立柱建物跡である。ただし、北側の桁行は柱穴が1穴足りず2間になり、平面形態も台形であり歪である。また、総柱状になる可能性もある。

桁行の柱間は1.3～1.5mであり、P1-P2は3.2mで2間分にあたる。梁間はP3-P4は1.6m、P4-P5は1.4m、P1-P9は1.7m、P8-P9は1.8mとやや不規則である。柱穴は径約20～30cmの円形や不整形円形である。

柱穴出土遺物はP2から土師器胴部片、須恵器高台付杯の高台部片、P6、P7から土師器胴部片、口縁部片が出土している。胴部片はすべてヘラケズリである。P2出土の須恵器高台付杯は奈良時代である。

##### SB226

調査区の北西部に位置する。北方約3.8mにSB202が、東方約6mにSB213がある。長軸方位はN10°Wで桁行3間、梁間2間の掘立柱建物跡である。桁行の柱間は1.5m～1.7mで、梁間の柱間は1.4m～1.7mである。柱穴は径50cm～80cmの円形や不整形円形、楕円形である。

柱穴出土遺物はP7から土師器胴部片が出土している。

##### SB241

調査区の北西部に位置する。建物の北側は調査区外にのびる。南方約3.8mにSB202がある。長軸方位はN65°Eで桁行3間、梁間不明の掘立柱建物跡である。桁行の柱間は1.4m～1.7mである。柱穴は径約50cm～60cmの楕円形、不整形丸方形である。柱穴出土遺物はない。

SA240

調査区の北西部に位置する。南方約2.3mに長軸方位を同じにするSB202がある。北方約1.5mにSB241がある。櫛列の主軸方位はN84° Eである。柱穴はP1からP7までの7基でありP6とP7は近接する。柱間を考えるとP6は櫛列の柱穴ではないと考えられる。柱間はP1-P2は2.3m、P2-P3は2.0m、P3-P4は2.1m、P4-P5は1.8m、P5-P7は1.7mである。柱穴は径30cm～50cmの不整形、楕円形である。

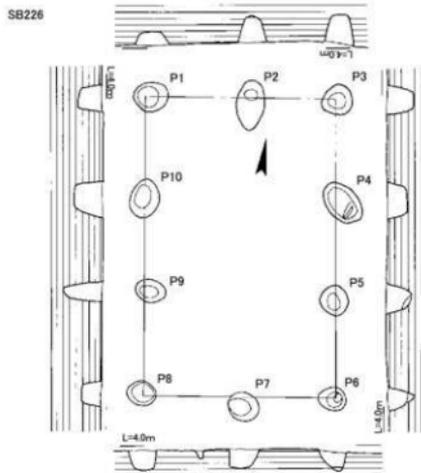
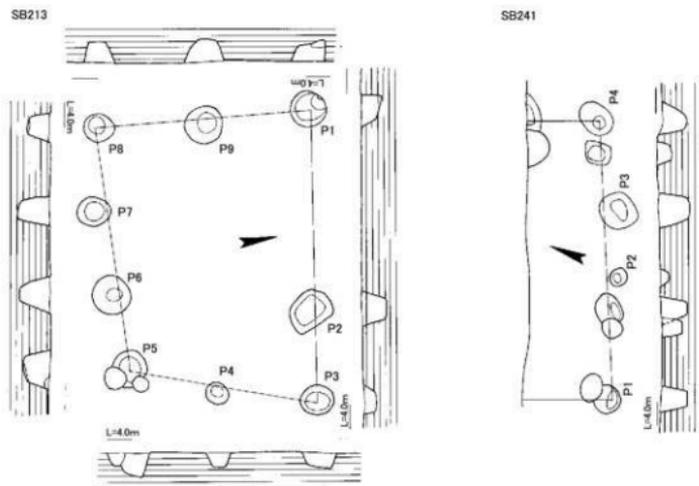
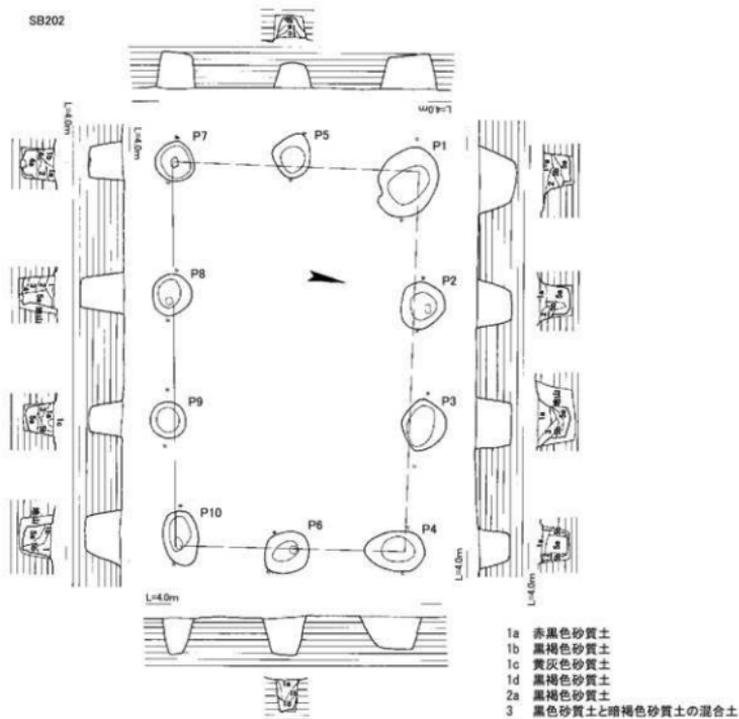


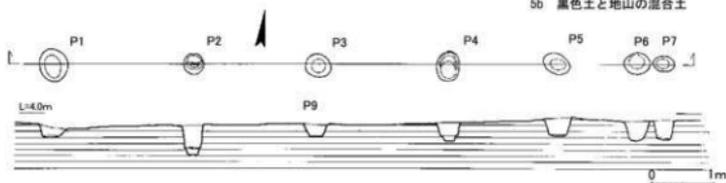
図43 2区掘立柱建物跡 (1/80)

0 1m

SB202



SA240



SB202



SA240

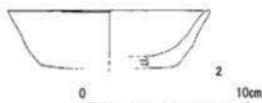


図44 2区掘立柱建物跡 (1/80)・出土土器 (1/3)

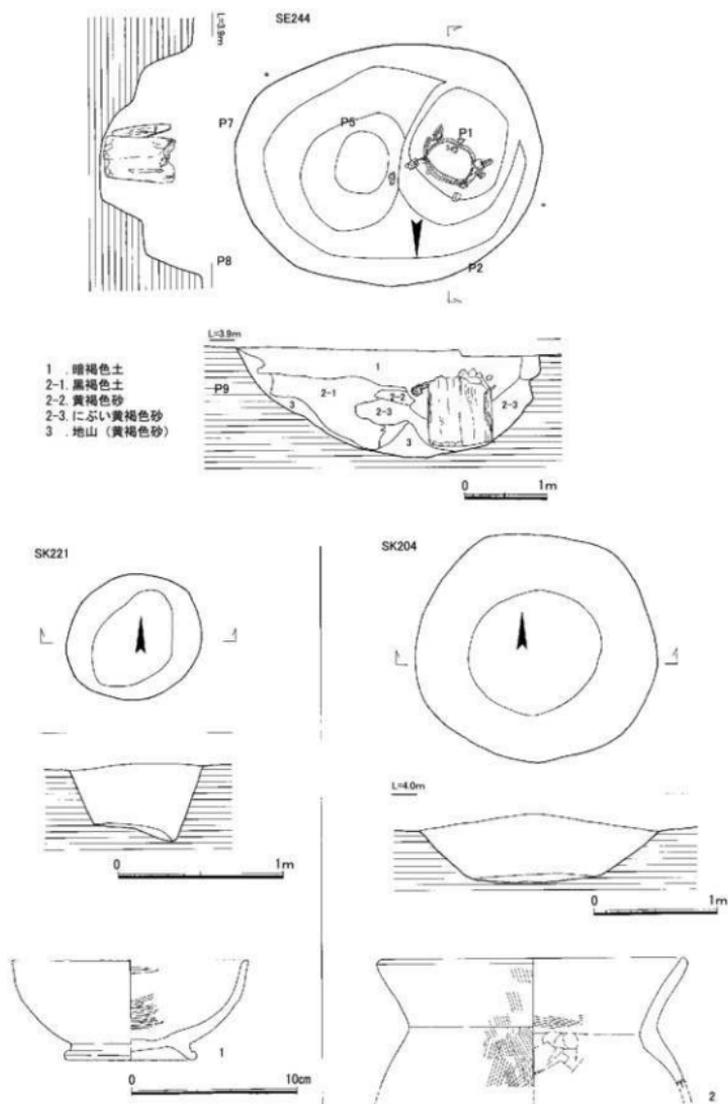


図45 2区SE244 (1/60) ・SK221 (1/30) ・SK204 (1/40)

柱穴出土遺物はP1から土師器杯口縁部片、P2から土師器片、P4、P5から土師器杯片、P5、P7から土師器胴部片が出土している。

#### 出土遺物

2は土師器杯3類の土師器杯である。口径は12.2cmと小さいが、体部と底部の屈曲は鋭さを残す。

#### (2) 井戸跡

#### SE244

調査区の西側に位置する。南方約4mにはSD256が、北方約7mにはSB226がある。長径3.78m、短径2.95mの平面楕円形の掘り方である。断面形は肩部に平坦面をもつ2段掘りになる。深さは1.3mである。底面2箇所長径約1mの楕円形の窪みがあり、そのうちの西側の窪みに井戸枠が収まる。遺存する井戸は掘り方の西側に偏っており、本来は1つの掘り方内に2基の井戸枠があったものと考えられる。

埋土は暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土である。井戸枠は高さ約80cmほど遺存していた。井戸枠内から曲物の底板2点が出土した。

#### 出土遺物

1は須恵器杯蓋3a類。口縁端部の肥厚は小さい。2は須恵器皿類。口径が19cmを超え、体部は直線的に開く。

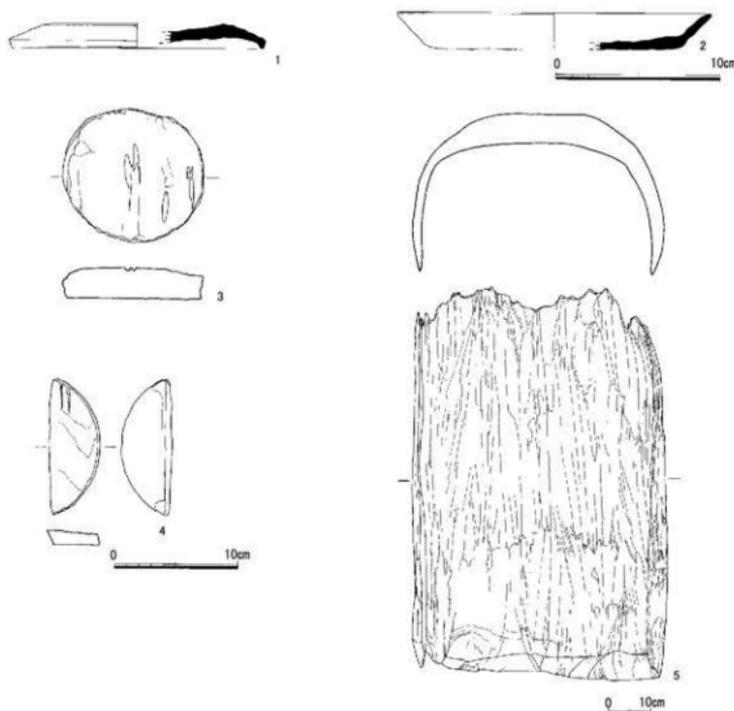


図46 2区SE244出土土器 (1/3)・木製品 (1/4)・井戸枠 (1/12)

3、4は井戸枠内から浮いた状態で出土した。3は円板状の木製品。曲物の底板か？厚みがあり、小口面は平坦気味。4は曲物の底板、他の曲物の底板に比べ、径は小さく厚みをもつ。図示していないが曲物の底板があと1点出土している。側辺部約1/5残存。復元径21.0cm。

5は井戸枠。芯部を削りぬいた井戸枠材3点でひとつの井戸枠になる。同一の材を3分割するかどうかは不明。5が最も大きな井戸枠材であり、下端部は内外面から丁寧に削る。内径で56cm、厚さ約5cmを測る。

### (3) 土坑跡

#### SK204

調査区の北壁近くに位置する。南東方約10mにSK221やSB202がある。平面円形で断面逆台形である。坑底は平坦で周壁は緩やかに傾斜する。径は1.96m、深さは55cmである。埋土は黒色砂質土1層で炭化物が少量混入、灰褐色土が斑状に混じる。出土遺物は土師器甕口縁部片と胴部片数点である。時期は古墳時代。

#### 出土遺物

2は土師器甕1ア類。口縁部が直線的に外反する。

#### SK221

調査区の北東部に位置する。北東約10mにSK204が、西方約2.5mにSB202が、南方約7mにSB213がある。平面不整形で断面は不整な逆台形である。坑底は傾斜をもち周壁は急角度で立ち上がる。

長径86cm、短径76cm、深さ48cmである。出土遺物は内黒の黒色土器椀や図示していないが土師器の椀の高台部片、胴部細片が出土している。

#### 出土遺物

1は内黒の黒色土器椀。高台はやや低く端部が外反し、体部は下半で屈曲し上方に立ち上がる。

### (4) SD256溝跡

調査区の北半部を北東から南西方向に向かって流れる自然流路である。その後の調査によりこの流路は5区、7区を横切り総延長約360mにもわたって確認できた。2区の調査時には遺構番号も付けず「落ち込み」として遺物取り上げを行った。5区、7区の調査では調査区毎にそれぞれの遺構番号を付けたため、遺物取り上げ等に若干の混乱が生じた。SD256溝跡は報告書作成時に付けており、遺物の注記等は「落ち込み」のままである。図9の空中写真をみても判るように流路の北東部は砂丘微高地を分断している。自然流路としてはやや不自然であり、この箇所に限れば人為的に掘削した可能性も考えられる。従って、この延長約360mの溝跡は自然流路を人為的に改変したと考えられる。そして、この総延長約360mの溝跡から木筒をはじめ、多量の墨書土器や曲物や挽物皿などの木製品や奈良三彩、緑釉陶器、舟形木製品などの祭祀遺物などが出土しており、この溝跡の両側に集落や官衛施設が形成されている。溝跡西側の砂丘微高地上に掘立柱建物跡や井戸跡、土坑からなる集落が形成される。溝に最も近いSE244やSB213は約3.5mの距離である。溝跡東側にはSD256溝跡にさらに流れ込む溝跡がみられるが、これは自然にできたものであろう。

溝跡の幅は北東部で約8m、南西部で約17mと広がる。深さは約1.5mで溝底は土坑状になり部分的に深い箇所がみられる。断面形はレンズ状である。溝跡の両壁は緩やかに立ち上がる。

埋土はレンズ状堆積である。植物遺体層（以下コモ層）が上下二面にみられる。上層のコモ層が上層水田を覆うコモ層と対応する。上層のコモ層は厚さ約10～20cmで溝跡の検出面に堆積する。下層のコモ層との間には2層あるが、水流による堆積で黄褐色中砂中に黒色土のラミナがみられるものもある。自

然木を混入する。下層コモ層の厚さは10～40cmである。下層コモ層の下は黄橙色中砂・青灰色中砂である。

出土遺物には土師器、須恵器、木製品などがある。木製品には杵、槌などの農具、槽などの容器、挽物皿、曲物などがある。溝底近くから6世紀後半の完形の須恵器杯身・蓋が出土している。最も多量に出土したのは奈良時代～平安時代前期の土師器・須恵器である。流路の上限は不明であるが、6世紀後半代にはすでに流れており、上層水田と同じ時期には埋没している。

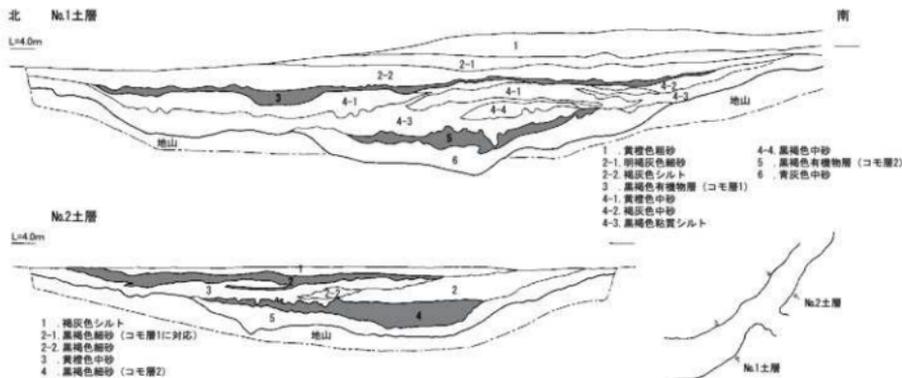


図47 2区SD256土層 (1/80)

### SD256出土遺物

出土した土器の多くは古代に属する須恵器と土師器の杯である。その他須恵器の甕や壺、皿などが出土しており、同時期の煮炊きに使われる土師器の甕が少ないのが特徴である。近隣の地域で古代の土器が多く出土しその研究も進んでいるのが太宰府市域であり、今回出土した土器の多くも太宰府市域で出土する土器とはほぼ同一であるため、今回行なう土器の分類基準もそれを基にしたものである。細分に当たっては中島氏（中島2005）の分類を参考にした。またSD256からは古墳時代（大宰府編年I期以前とする）の遺物も多く出土していることから、あてはまらないものもある。

### 土師器

#### 甕 (1～15)

- 1 : 口縁部が外反し、頸部が「くの字」状に屈曲し胴部の張りが強いもの
  - ア: 頸部が肥厚しないもの (1, 2)
  - イ: 頸部が肥厚するもの (3～5)
- 2 : 口縁部が外反し、頸部の屈曲が弱く胴部の張りも弱いもの
  - ア: 頸部が肥厚しないもの (6～8)
  - イ: 頸部が肥厚するもの (9, 10)
- 3 : 口縁部が外反し、頸部のしまりが弱く胴部の張りが弱いもの
  - ア: 頸部が肥厚しないもの (11～13, 15)
  - イ: 頸部が肥厚するもの (14)

甕は出土点数が少なく、遺存状態が悪いため全体の器形が分かるものが少ない。そのため肩部より上の

器形を基に分類している。これらは大宰府分類では全て堯a類に属する。1ア類の内2は頸部がほとんど残っていないため1イ類の可能性もある。5は外器面にスガが付着し頸部内面に鋭い稜をもつ。2ア類(6～8)の8はハケ調整を施さずナデ調整で仕上げ、外器面にスガが付着する。2イ類(9、10)の9は頸部の肥厚が小さく、3ア類の可能性もある。3ア類(11～13、15) 11～13は瓶の口縁部の可能性もあるが、今回は堯として報告する。15は堯の中で唯一の完形品である。体部に舌状の把手をもつ。口縁部内面は剥離している。内器面上部は縦方向の幅が狭いケズリの後斜め方向の工具によるナデ調整を施す。底部は平底気味の丸底である。14は口径が小さく小型の堯である。

今回分類したうち1ア類、2ア類は古墳時代に属する堯である。SD256の中心の時期である大宰府編年Ⅱ～Ⅵ期に確実に属するのは1イ類と2イ類、3イ類である。3ア類の15はつくりが丁寧であるためⅠ期以前であろう。

#### 甌 (16～19)

出土点数が少なく分類は行っていない。把手に関しては堯の可能性もあるが、甌として報告する。16は直線的に開口縁部をもち、端部に面取りを施す。把手は他と比べて上部への屈曲が大きい。

#### 壺 (20、21)

出土点数が少なく分類を行っていない。20、21共に古墳時代に属すると思われる。

#### 杯蓋 (22、23)

出土点数が少なく分類を行っていない。22はつまみが付き天井部外面に回転ヘラケズリを施しており、須恵器の坏蓋のうつつであろう。23は内器面だけにヘラミガキを施しており皿の可能性もあるが、口縁部内面に極浅い凹みをもつこと、天井部外面にヘラケズリを施していることから坏蓋とした。

#### 杯 (24～54)

1: 底部が丸底のもの(24)

2: 平底で底部から口縁部に向けて直線的に外反し、体部にミガキを施すもの。(25～27)

3: 平底で底部から口縁部に向けて直線的に外反するもの。(28～52)

4: 暗文を施したもの(53、54)

1類は古墳時代後期に見られる椀形の杯。2類、3類はそれぞれ大宰府分類杯d類、a類。1類は24の1点である。底部外面にヘラケズリを施す。2類は体部内外面に回転ヘラミガキを施している。27は丸底気味になるものと思われる。3類は土師器の中で最も多く出土している。28、29は口径が14cmを超える。29は器高が高く、体部が立ち気味に立ち上がる。30～34は口径13.5cm前後であり、34は底部内面に工具痕と思われる渦巻状の沈線が巡る。35～44は口径13.0cm前後であり、3類中で最も多い。45～49は口径12.5cm前後で、48は口径は大きめであるが、器高が低い。50、51は口径12.0cm前後で51は体部が立ち気味に立ち上がる。52は口径10.7cmで大宰府分類小杯a類である。53は大形の鉢形の杯である。体部内外面の上部にミガキを施し、体部内面の下部に渦巻状の暗文を施す。54は小形の鉢形の杯である。53と同じく体部内面の下部に暗文を施す。53とは違い体部外面下部にもミガキを施す。

#### 高杯 (55、56)

出土点数が少なく分類を行っていない。55、56共に古墳時代に属する低脚の高杯である。55は完形に復元できる。杯部中位で屈曲し、脚部も内面に稜をもち大きく裾が開く。

#### 椀 (57～64)

1: 体部が直線的に外反し、低脚の高台をもつもの(57～61)

2: 体部が丸みを帯び、高脚の高台をもつもの(62、63)

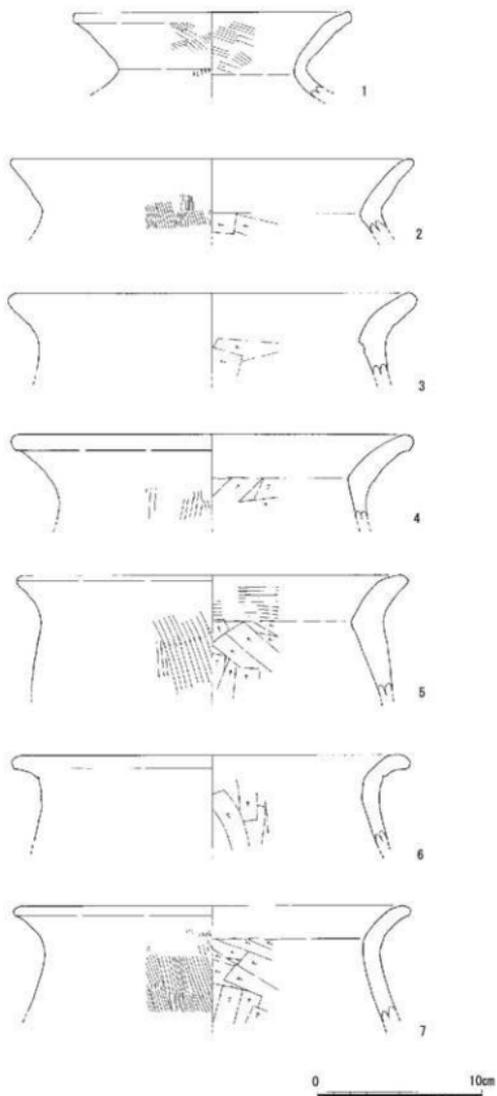


图48 2区SD256出土土器1 (1/3)

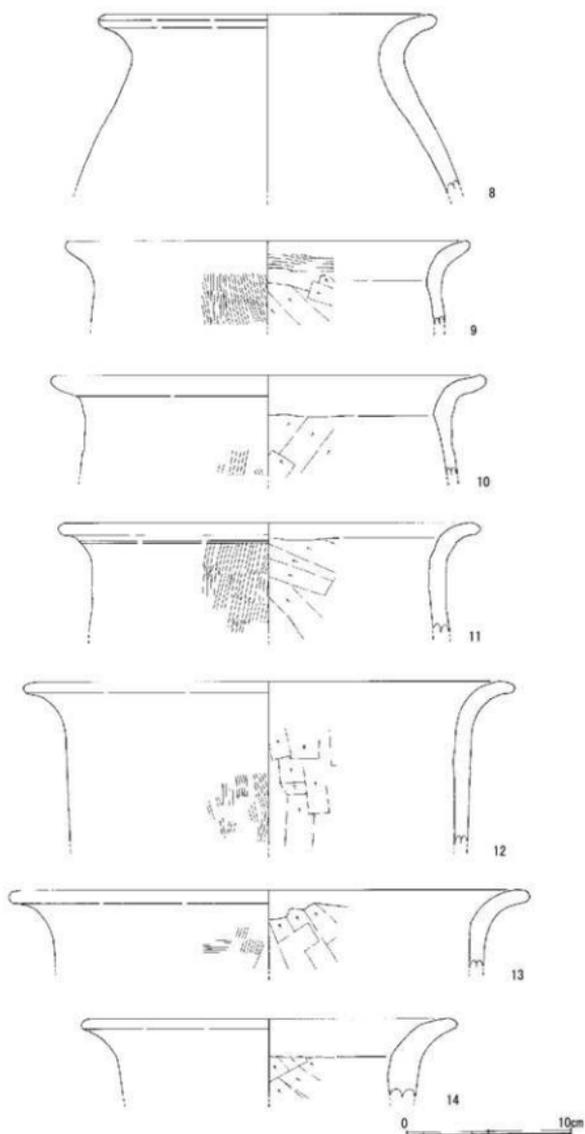


图49 2区SD256出土土器2 (1/3)

高台がつくものを椀とした。57は他と違い口径と底径の差が小さいため、須恵器杯2イβ類のうつしであろう。大宰府分類土師器杯c類。59は脚端部が小さく外反する。61は体部が若干丸みを帯び、脚部は低く、大きく外に開く。62は完形に復元でき、体部外面に浅い螺旋状の沈線が廻り口縁部が短く外反する。64は2類もしくは高台の付く皿であろう。

## 皿

1：底部が丸底気味なもの（65～67）

2：底部が平底のもの（68～76）

1類、2類はそれぞれ大宰府分類皿b類、a類にあたる。65は高杯の杯部と思われ、体部中位で大きく屈曲し口縁部が外反する。須恵器高杯のうつしであろう。65と66は外器面に朱塗りを行った可能性がある。2類は口径により中皿（68～74）と大皿（75、76）に分かれる。69と69は体部が直線的に立ち上がるが、70～76は体部が外反しながら立ち上がる。

## 須恵器

### 杯蓋

1：器高が高くかえりがないもの（77～85）

2：器高が低くかえりがあるもの

ア：天井部がドーム状に盛り上がりかえりの突出が大きいもの（104～106）

イ：天井部は平坦でかえりの突出が小さく口縁部とはほぼ同じもの（107～115）

ウ：天井部は平坦でかえりの突出が小さく口縁部より低いもの（116～123）

3：器高が低く口縁端部が断面三角形に突出するもの

ア：断面三角形の突出が大きいもの（124～136、144）

イ：断面三角形の突出が小さいもの（137～143）

1類は古墳時代後期に通常の杯蓋。77は口唇部内面に稜をもつ。81は口唇部内面に極浅い段をもつ。77～83は天井部にヘラ切り離し後ヘラケズリを施すが、84、85はヘラ切り離し後ナデで仕上げる。口径も11cm台と他よりも小さい。2類、3類は本来であればつまみの形状もふまえた分類を行わなければならないが、つまみ部が残存しているものが多くないためかえりの有無を主として分類した。2ア類の内106は口縁端部が残存していないが、天井部がドーム上に盛り上がり天井部にカキ目を施しており、2ア類としてよいと思われる。104と105は大宰府分類小杯蓋である。107～110、112は扁平な擬宝珠形つまみを有する。123のかえりは短く丸みを帯びている。3類は杯蓋の中で最も多く出土している。ア類とイ類は口唇部の突出の大きさだけではなく、口唇部の面取りの有無の違いでもある。そのため123のように突出が小さいものでも面取りを施しているものは3ア類に含めた。144は焼け歪みが大きく、出土品中で唯一輪状つまみをもつ。

### 杯

1：口縁部に受け部をもつもの（86～103）

2：口縁部に受け部をもたないもの

ア：底部に高台をもたないもの

a：平底のもの

甲：口径10cm以下のもの（148～150）

乙：口径10cm以上のもの（151～169）

β：丸底気味のもの（170、171）

イ：底部に高台をもつもの

α：高台が高く断面形が縦長長方形のもの

甲：高台端部を跳ね上げるもの（172、173、180）

乙：高台端部を跳ね上げないもの（174～179、181～190）

β：高台が低く断面形が正方形もしくは横長長方形のもの

甲：高台端部が外傾するもの（191～200、226、228）

乙：高台端部が外傾しないもの（201～225、230、231）

1類は古墳時代後期に通用な杯身。底部にヘラケズリ調整を施すものが多いが、98はヘラ切り離し後ナデ調整で仕上げるため体部下半に稜をもつ。杯1類は杯蓋1類と共にSD256下層では、調査区北側のC、Dグリッドから遺存状態が良好な個体が多く出土している。2アα甲類は大宰府分類小杯α類、乙類は杯α類である。2アα乙類は出土点数が多いため口径/底径比（以下口/底比）により、[～1.5]、[1.5～]に細分する。前者は151～153、後者は154～169である。153は底部全体にヘラケズリ調整を施しており、他の個体とは最終調整が異なるため蓋の可能性もある。体部調整は回転ナデ調整で仕上げるものがほとんどであるが、159、163、168は体部と底部の境の狭い範囲にヘラケズリを施す。体部と底部の境にヘラケズリを施した個体は内底面から体部への立ち上がりが緩やかになる。2アβ類は2点出土しており、170は口縁端部が外反するが171は直立する。171は須恵器杯蓋1類に似る。2イ類は杯c類を細分したものである。2イα類は178を除き高台を貼り付ける位置が中央によっている。2イα乙類は器高が高い174、177、178と器高が低い175、176、179に分かれる。175～177は体部と底部の境にヘラケズリを施す。2イβ類は出土点数が多く、口/底比により、[～1.4]、[1.4～1.7]、[1.7～]に細分する。2イβ甲類は、[口/底比～1.4]が191～198、[1.4～]が199、200、[1.7～]が226である。191は高台の端部が跳ね上がっているが2イα甲類と比べ高台が低いので、別類を設定すべきものだが、1点しか出土していないため2イβ甲類に含めている。器高の高低により器高が高い191、196、200とそれ以外に分かれる。2イβ乙類は[口/底比～1.4]が201～213、[1.4～1.7]が214～222、[1.7～]が223～225である。また2イβ乙類は器高が高いものが少なく、[口/底比1.7～]に含まれる224、225だけ器高が5cmを超える。[口/底比1.7～]の223～225は体部と底部の境にヘラケズリを施す。238は椀の可能性もある。

#### 椀（239、240）

出土点数が少なく分類を行っていない。2点共に体部下半から底部にかけてヘラケズリ調整を施す。239は口縁部が内湾しながら、240は外反しながら立ち上がる。

#### 高杯（241～246）

出土点数が少なく、遺存状態も悪いことから分類を行っていない。243、244は古墳時代に属すると思われる。244は脚部に3方スカシ窓を穿つ。

#### 皿（247～261）

器形はほぼ一致しており、口縁部が外反しながら立ち上がる。口径により、～15cm（247～255）、16cm～20cm（256～258）、20cm～（259～261）に分かれる。

#### 壺（262～268）

出土点数が少なく分類を行っていない。262は壺蓋である。263は無頸壺あるいは鉢。口縁端部がわずかに外反する。264、265は短頸壺、266は口縁部はないが付付長頸壺、267は口縁部は欠損しているが複合口縁をもつものと思われる。268は底部を除きほぼ完形に復元できる。器壁が薄手で凸帯や沈線はシャープであり、波状文の描き方も丁寧に間隔も密である。

## 瓶 (269~275)

出土点数が少なく分類を行っていない。270は提瓶。口縁部と把手部が欠損している。底部と高台は坏2イβ乙類に近似し、体部下半にはヘラケズリ調整を施す。把手はヘラ切りにより面取りされる。内面と上面に黒色の付着物が付いており漆の可能性もある。271~275は壺もしくは瓶の底部片である。

### 甕

#### 1: 素口縁のもの

ア: 口縁部外面に装飾を施さないもの (276、277、279)

イ: 口縁部外面に凹線等をもつもの (278、280~286)

#### 2: 複合口縁のもの (287)

甕は器形が分かるものがほとんどないため大きさによる分類は行っていない。1、2類はそれぞれ大宰府分類甕 a、b 類。276は甕で唯一完形に復元できる個体である。素口縁であり文様をまったくもたないが、口縁部が若干肥厚し、下位に小さく段を有する。286は胴部中位まで残存しており、やや焼け歪み大きい。

2類は1点だけの出土であり、口縁部に間隔の広いいびつな形の波状文を施文する。

### その他

#### 瓦質土器? (288)

SD257北端の地山直上から出土した。小片であり傾きは不明。甕か壺の頸部付近と思われる。内器面のタタキは十字型をしており同様のタタキは古墳時代に類例がある。周辺からは古墳時代の坏、杯蓋の1類が多く出土しており、288も古墳時代に属するものか。

#### 黒色土器 (289)

上層から1点出土している。内黒の甕。高台は欠損しており、高さは不明。外器面の体部下半にヘラケズリ調整を、内器面にヘラミガキ調整を施す。

#### 土製品 (291、292、293)

人形土製品、移動式竈、瓦が出土している。291は人形土製品の胴部付近と思われ、その他の部分は全て欠損する。292は移動式竈の底片。下面に薄くススが附着する。293は西端から出土した2区では唯一の平瓦片である。土師質であり、縄目タタキを施す。

#### 灰軸陶器? (290)

1点出土しており、外面の一部に釉が附着する。体部内面には数段の工具痕が残り、高台は細く丸みを帯びる。灰軸陶器と考えているが、否定的な見解(註1)もいただいており、須恵器であるかもしれない。須恵器であれば北部九州以外の産地を考えなければならない。

#### 陶硯 (294~315)

1点を除き転用硯である。転用硯が多いことは中原遺跡の特徴である。転用硯は須恵器を転用したものであり、杯蓋、杯類がある。

#### 把手付中空円面硯 (294)

溝尻部から出土しており、把手部が欠損する。側面下半部は手持ちヘラケズリ調整を施し下面はヘラ切り離し未調整である。上面は中央部が平滑な凸面となり、墨痕が残る。側縁部には浅い溝が巡る。

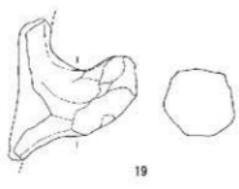
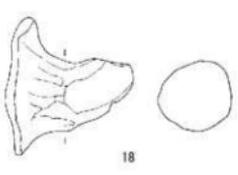
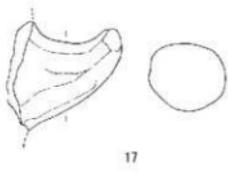
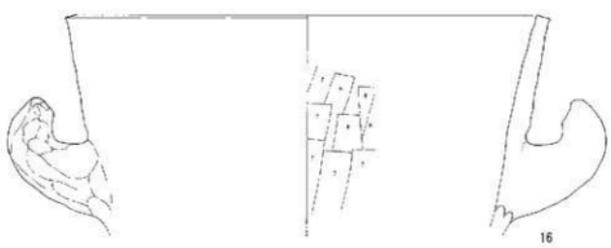
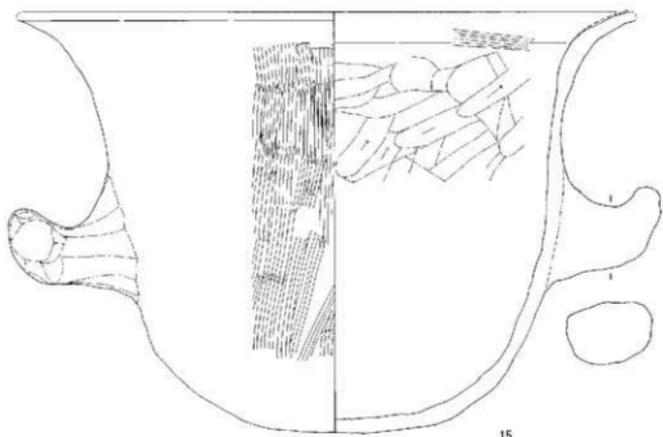


图50 2区SD256出土土器3 (1/3)

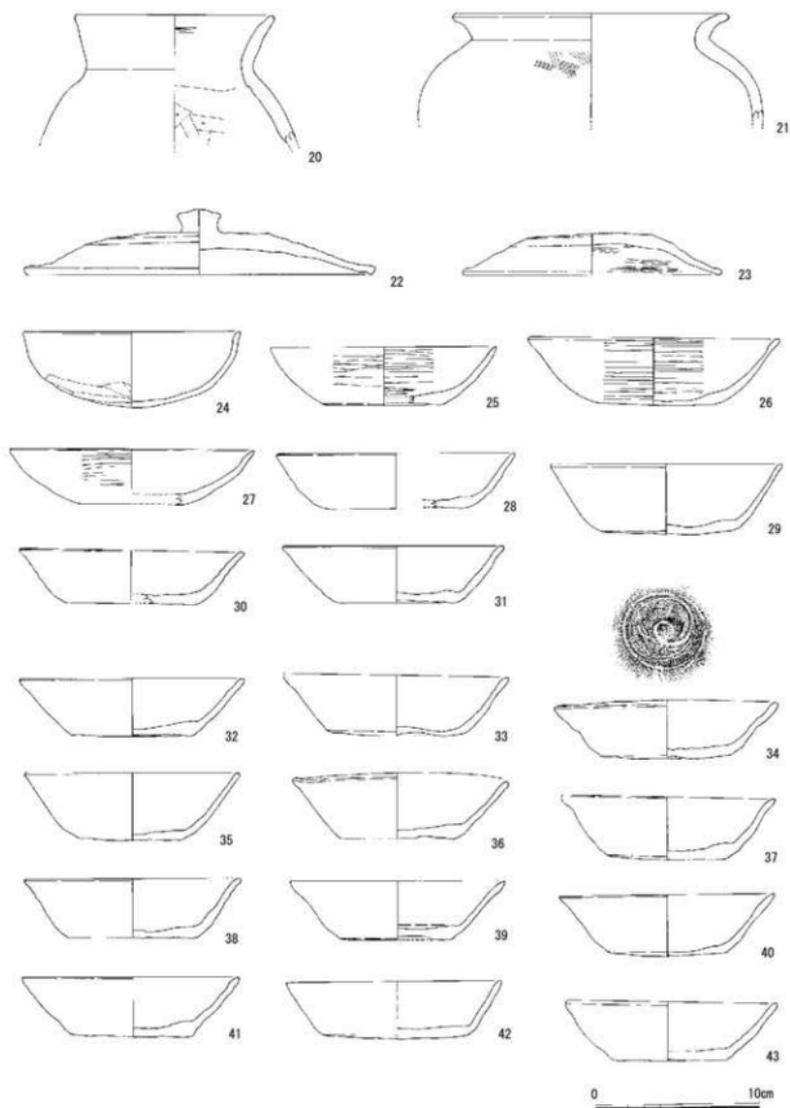


图51 2区SD256出土土器4 (1/3)

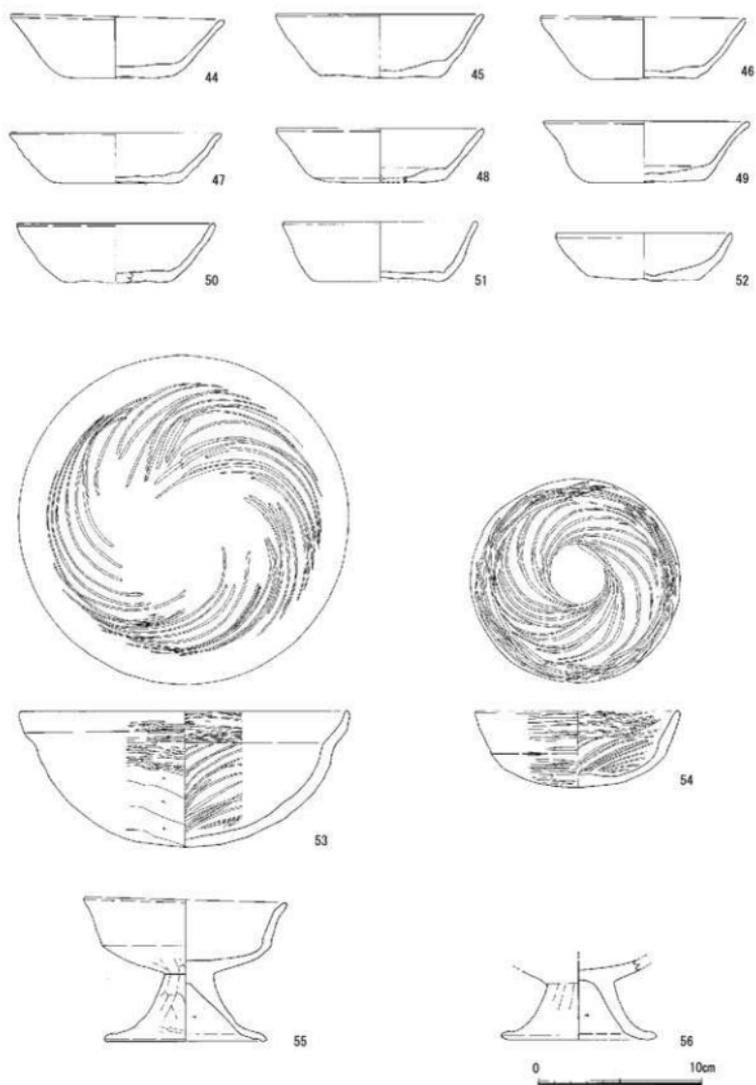


图52 2区SD256出土土器5 (1/3)

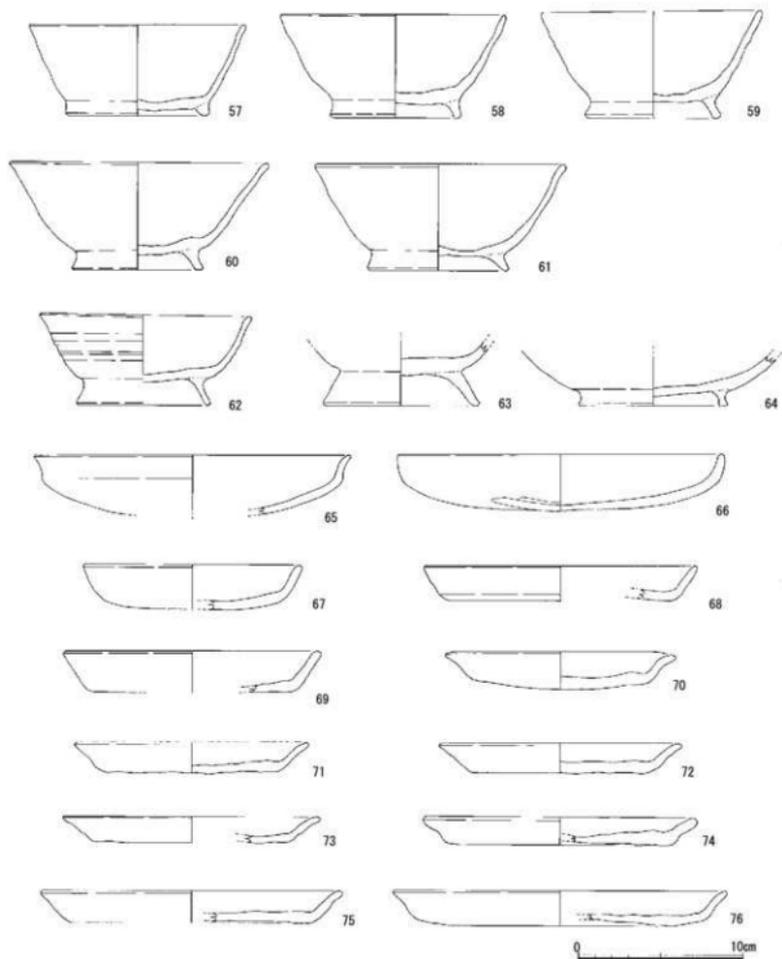


图53 2区SD256出土土器6 (1/3)

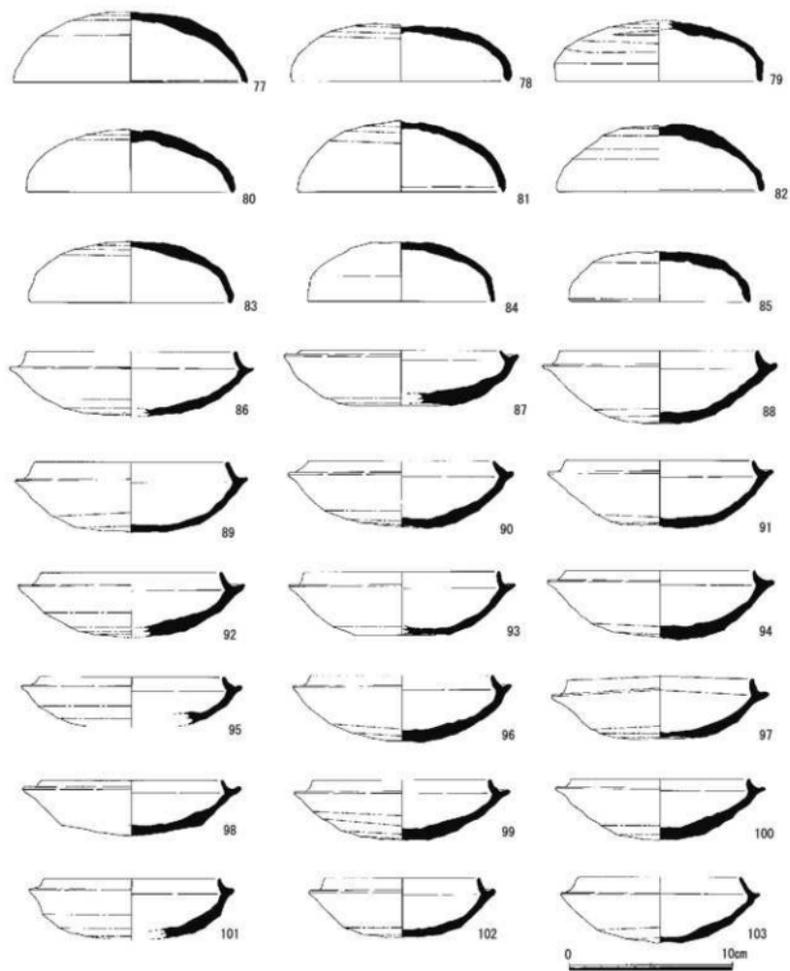


图54 2区SD256出土土器7 (1/3)

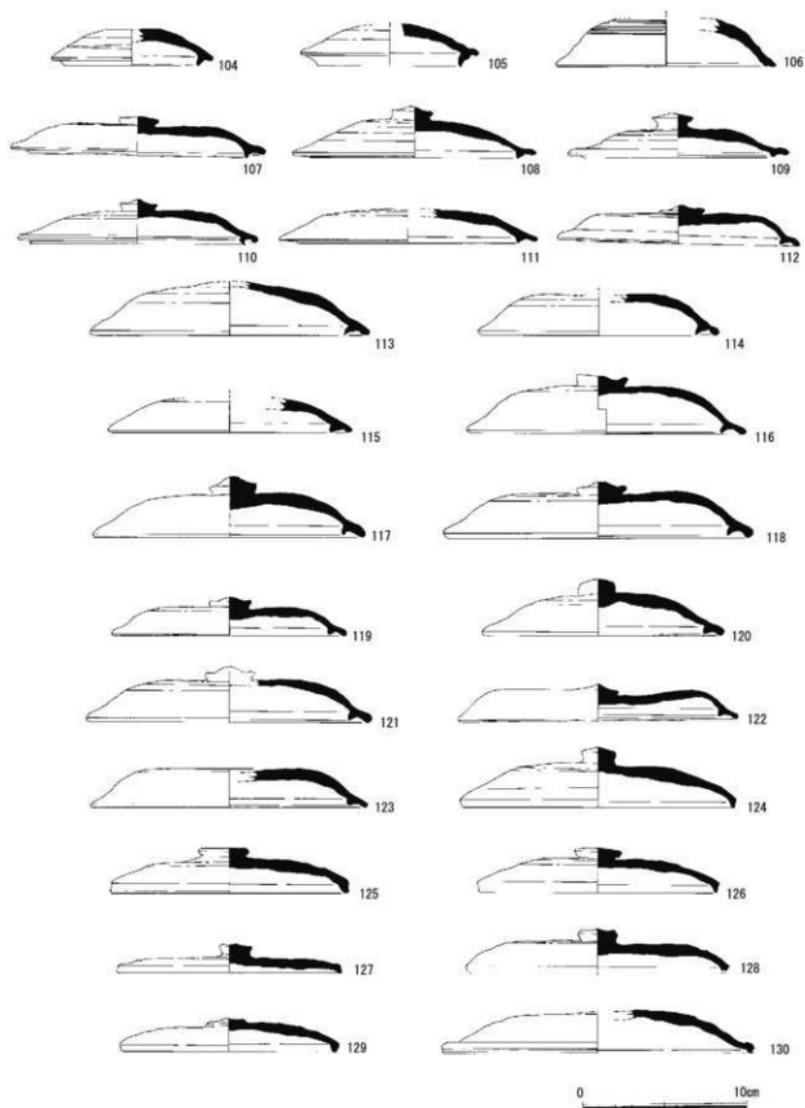


图55 2区SD256出土土器8 (1/3)

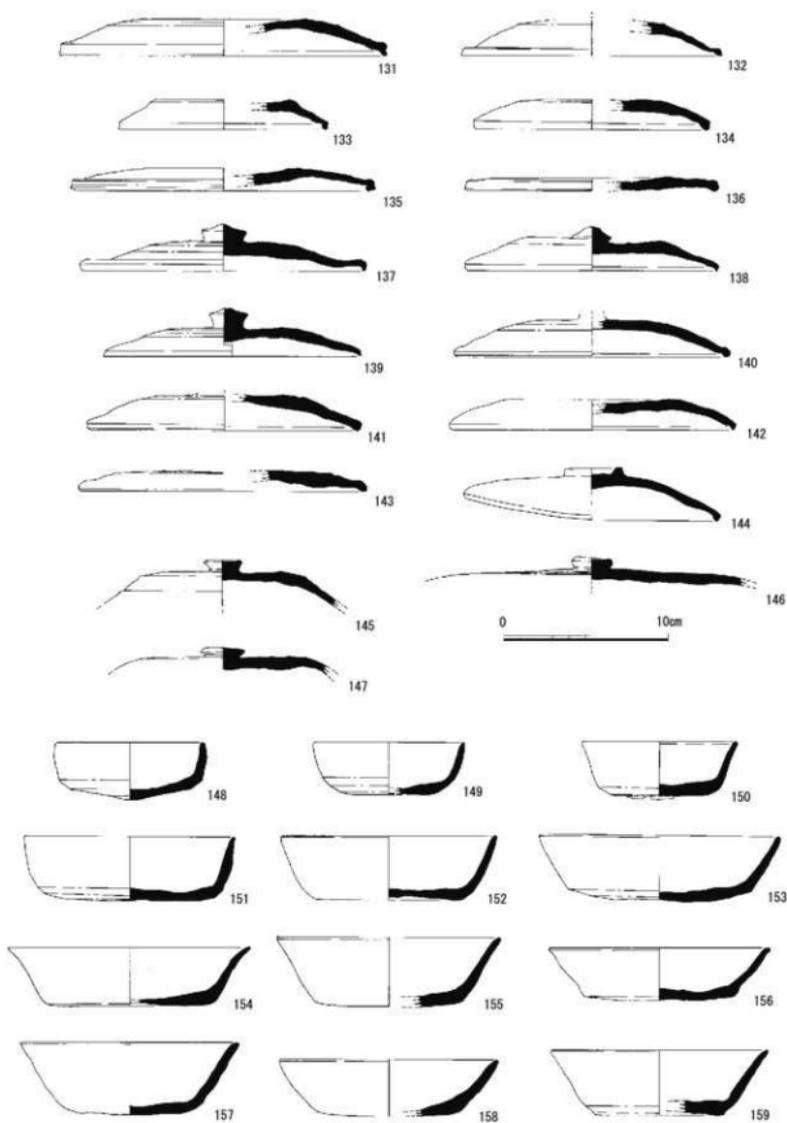


图56 2区SD256出土土器9 (1/3)

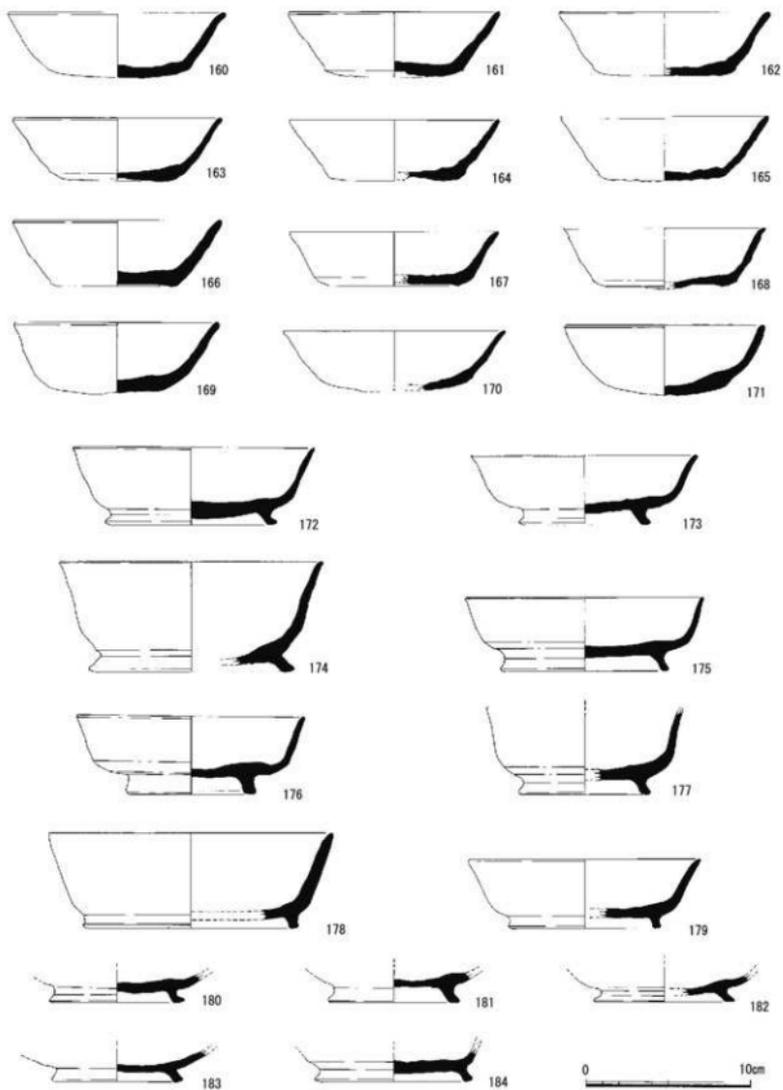


图57 2区SD256出土土器10 (1/3)

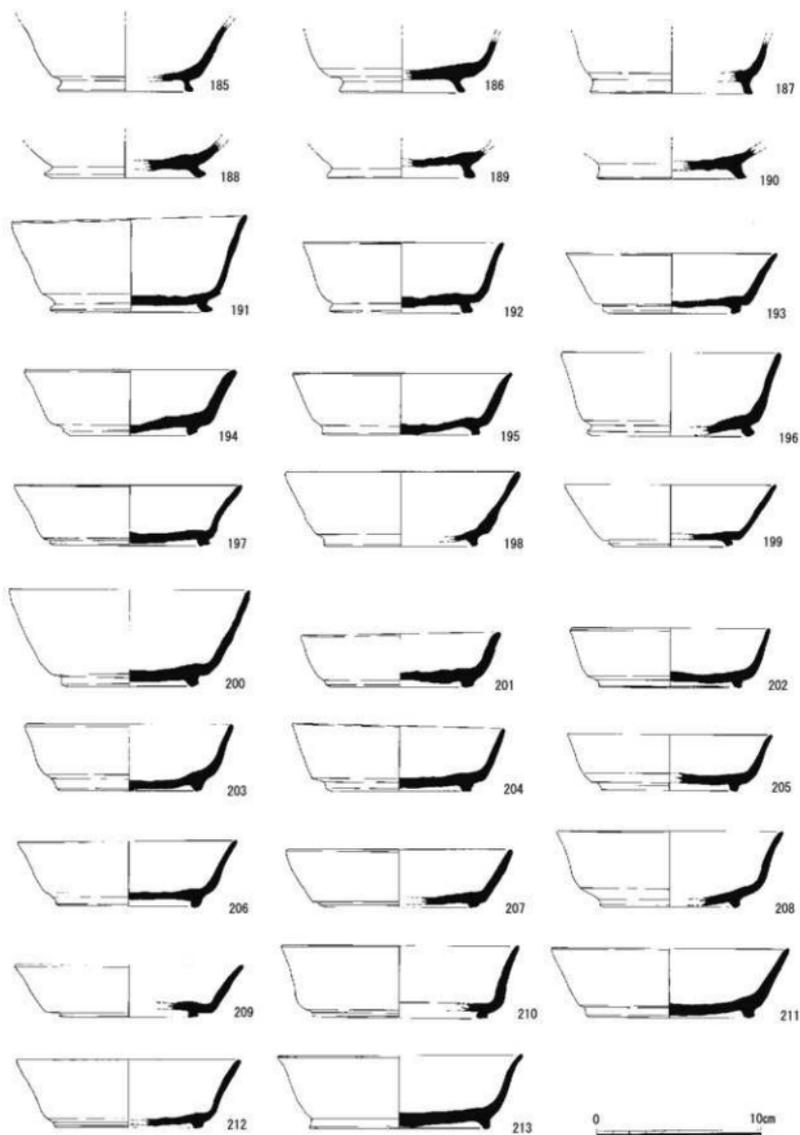


图58 2区SD256出土土器11 (1/3)

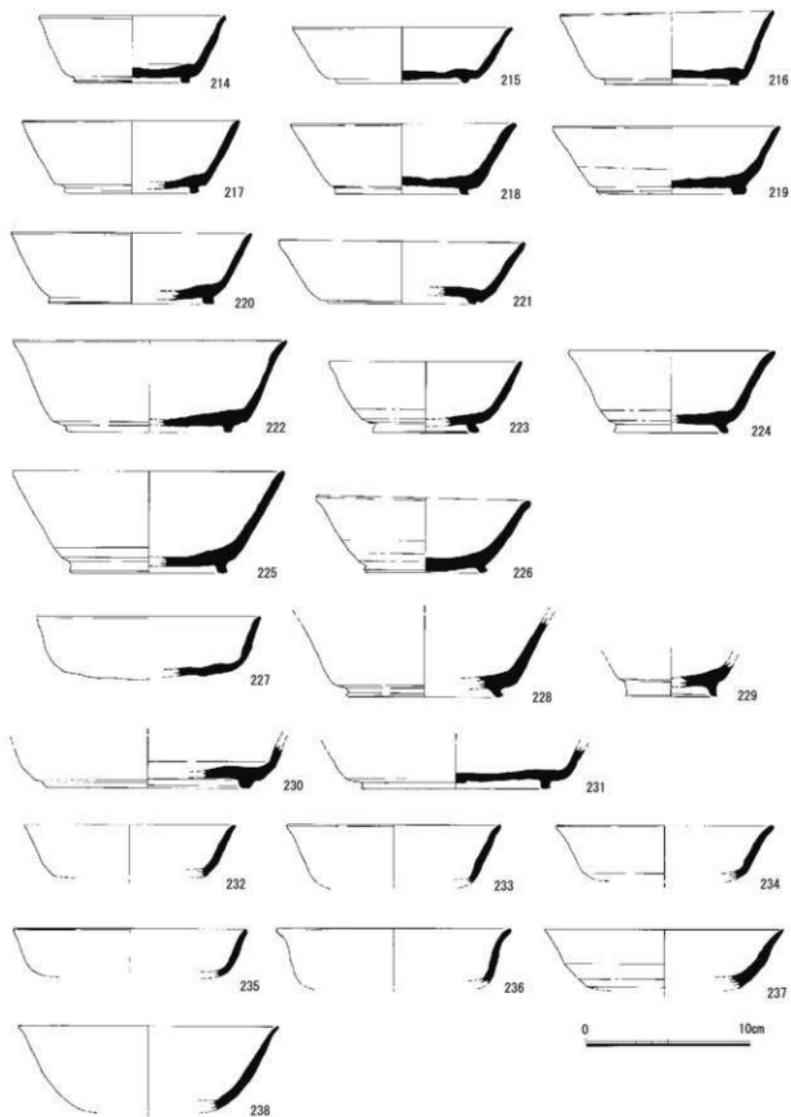


图59 2区SD256出土土器12 (1/3)

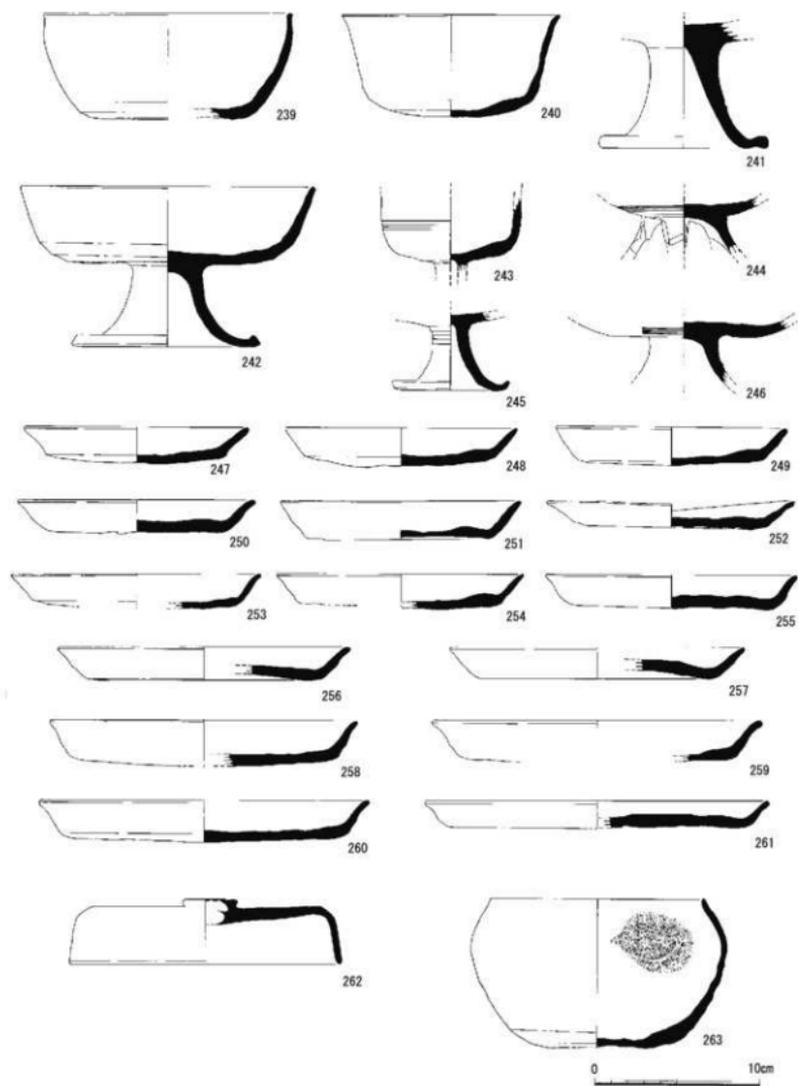


图60 2区SD256出土土器13 (1/3)

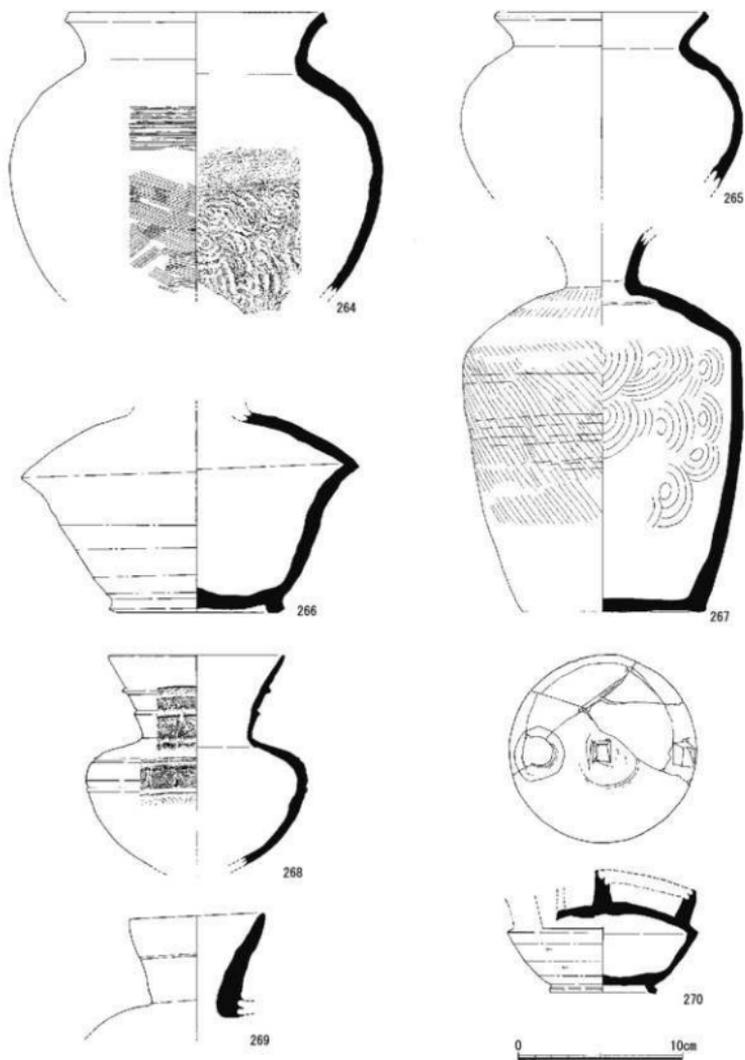


图61 2区SD256出土土器14 (1/3)

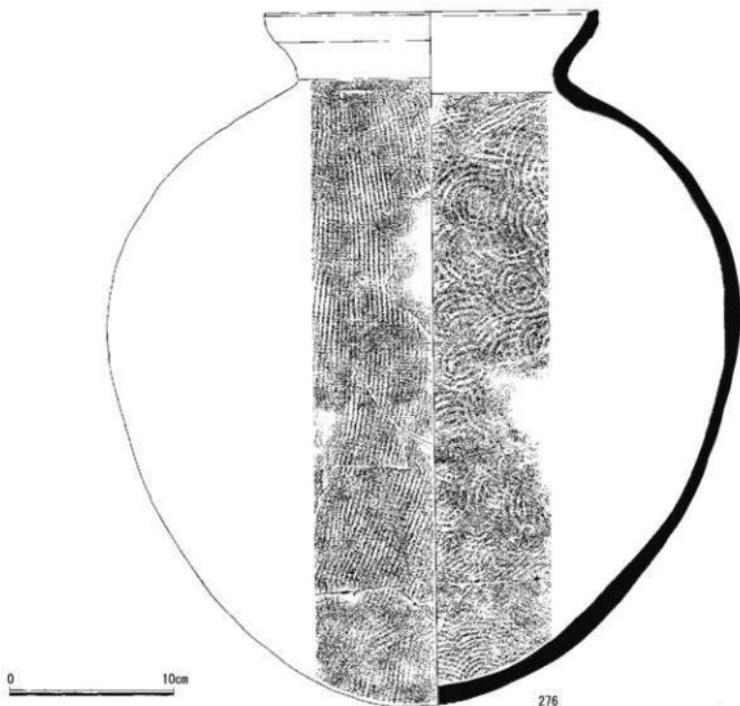
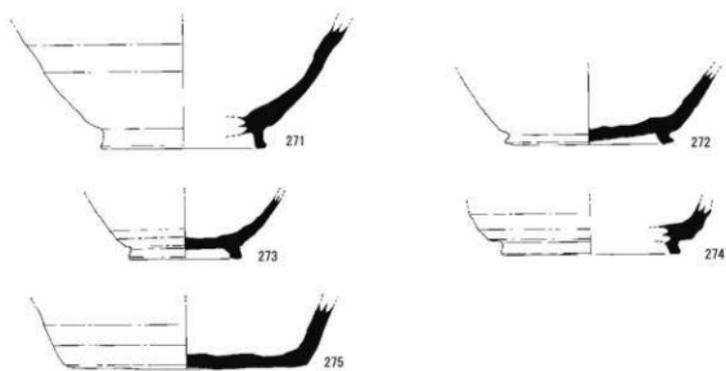


图62 2区SD256出土土器15 (1/3)

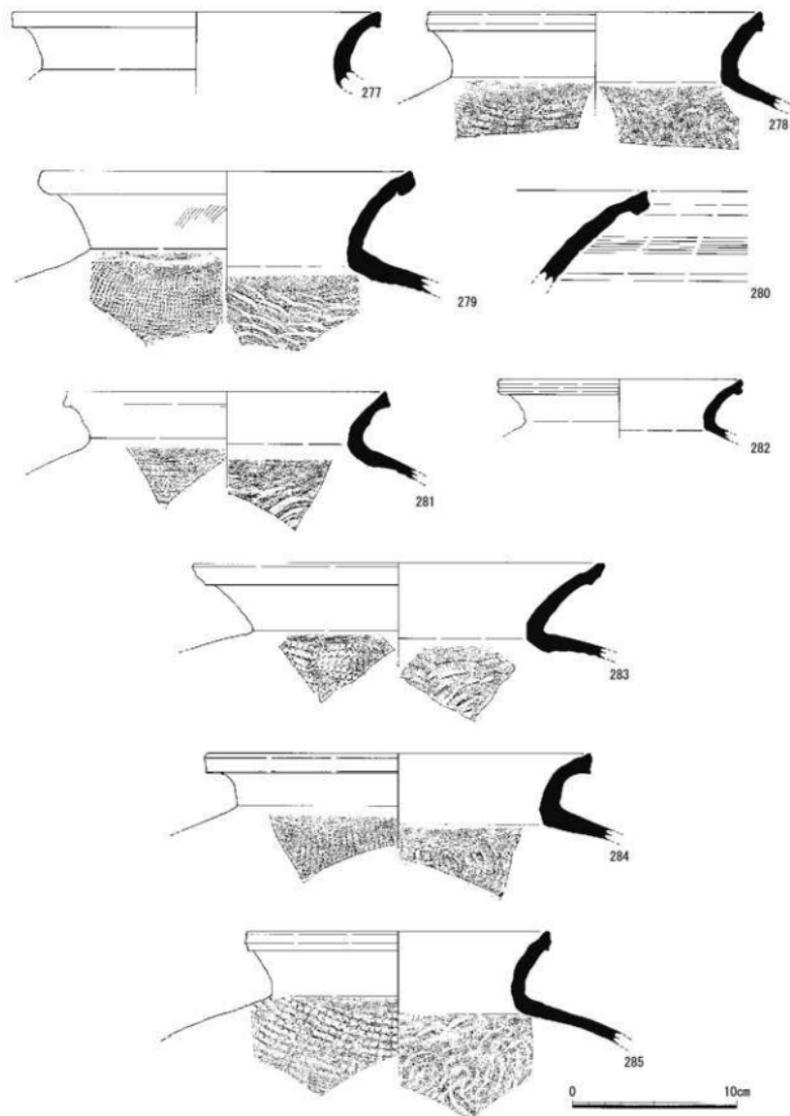


图63 2区SD256出土土器16 (1/3)

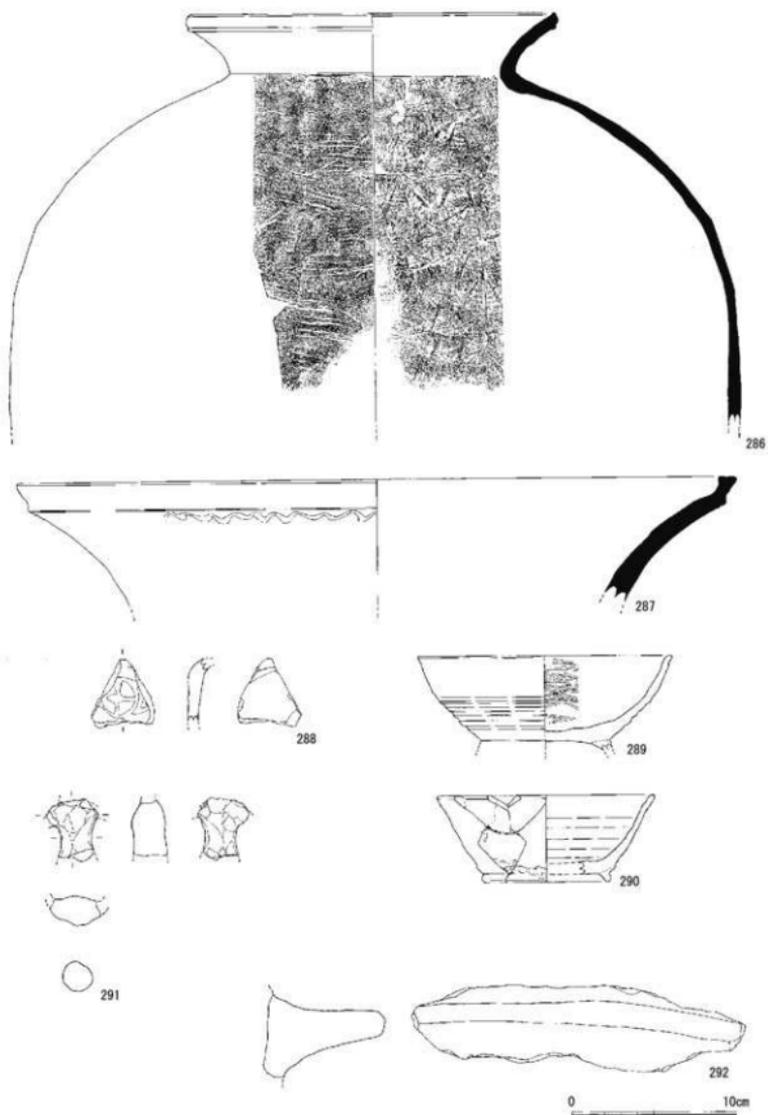


图64 2区SD256出土土器17 (1/3)

### 転用硯（須恵器杯蓋）（295～306）

硯に転用された杯蓋は杯蓋3類だけである。天井部にヘラケズリ調整を施していないもの（296～298、302、304）とそれ以外に分けられる。301、303は使用頻度が高く、墨痕が全面に付着し、器面が平滑になっている。

### 転用硯（須恵器杯）（307～314）

307は杯1類である。内器面に墨痕があるが、詳細に観察すると器面が平滑になっておらず、内底面に墨が付いていない。また胎土中の砂の粒子が動いた痕に墨が入っていなかったりするため硯としては使われておらず、何らかの行為により墨が内器面に付着したものである（註2）。308～314は杯2イ類である。外底面を硯として転用している。308～310はβ甲類〔口／底比～1.4〕である。311～314はβ乙類〔口／底比1.4～1.7〕である。314は高台のつくりが異なるため別器種の可能性もある。

### 転用硯（須恵器皿）（315）

1点出土している。平滑になっておらず、墨が付着しているだけの可能性もある。

### 墨書土器（316～356）

墨書土器は土師器、須恵器があり、それぞれに刻書と墨書がある。ここでは器形により分類している。また土師器の墨書土器は須恵器に比べ点数が少ないことも特徴の一つである。

ここでは考古学的な所見を中心に述べる。

### 須恵器杯蓋（316～324）

はっきり分かる1、2類は出土していないが、316はつまみの形状や器形から2類の可能性が高い。316だけが刻書土器である。杯蓋の墨書の内容は「魚女」が多いことが特徴である。「川嶋」は318と杯の325がある。321と324は天井部に墨書、内面を硯として転用している。

### 須恵器杯（325～343）

331、332、334が「林」が墨書されている。「林」の墨書があるものは須恵器杯だけである。325～328は2α乙類〔口／底比1.5～〕である。329～332も2イα乙類である可能性が高い。332だけは刻書で、その他は外底面に墨書され、分かるものは全て二文字以上墨書されている。比較的書体は丁寧である。326の「田人」は雇われて田を耕す人の意味があるとのこと教授を受けた（註3）。

333～336、338は2イβ乙類である。335、338、339は器高が5cm以上で〔口／底比1.4～1.7〕である。墨書されていない2イβ乙類〔口／底比1.4～1.7〕は、器高が5cmを超えるものがないことから、墨書された2イβ乙類〔口／底比1.4～1.7〕の大きな特徴である。334は外底面に「少、林」の墨書があり、体部内面に黒褐色の樹脂状のものが付着しており、漆の可能性もある。340、342、343は2イα乙類である。340は杯蓋以外では唯一「魚女」が墨書されたものである。342は「K」形のヘラ記号の可能性もあるが、「大」の変形字体の刻書としたい。343は魚の記号化されたものではないかとの指摘があったが、ヘラ記号の可能性が高い。体部と底部の境で打ち欠かれていると思われる。

### 須恵器その他（344～348）

344、345は皿である。345は墨痕が極薄く残る。348は甕の体部外面に「三斗」と墨書される。

### 土師器杯蓋、杯、皿（349～356）

杯蓋は2点出土している。349は文字ではなくつまみ上面に「○」が墨書されている。須恵器の杯蓋2ウ類のうつしである。天井部と体部の中ほど、口縁部近くの3ヶ所にカキ目を施す。350は皿の可能性もあるが、口縁部内面に段があることから杯蓋とした。351～355は杯であり、355は高台を有する。351は「林」が墨書されるが、書き方が異なるため「記号化された文字」（字の意味を理解していない人が書

いた)である可能性が高い。352は内外面にススが附着する。356は皿である。

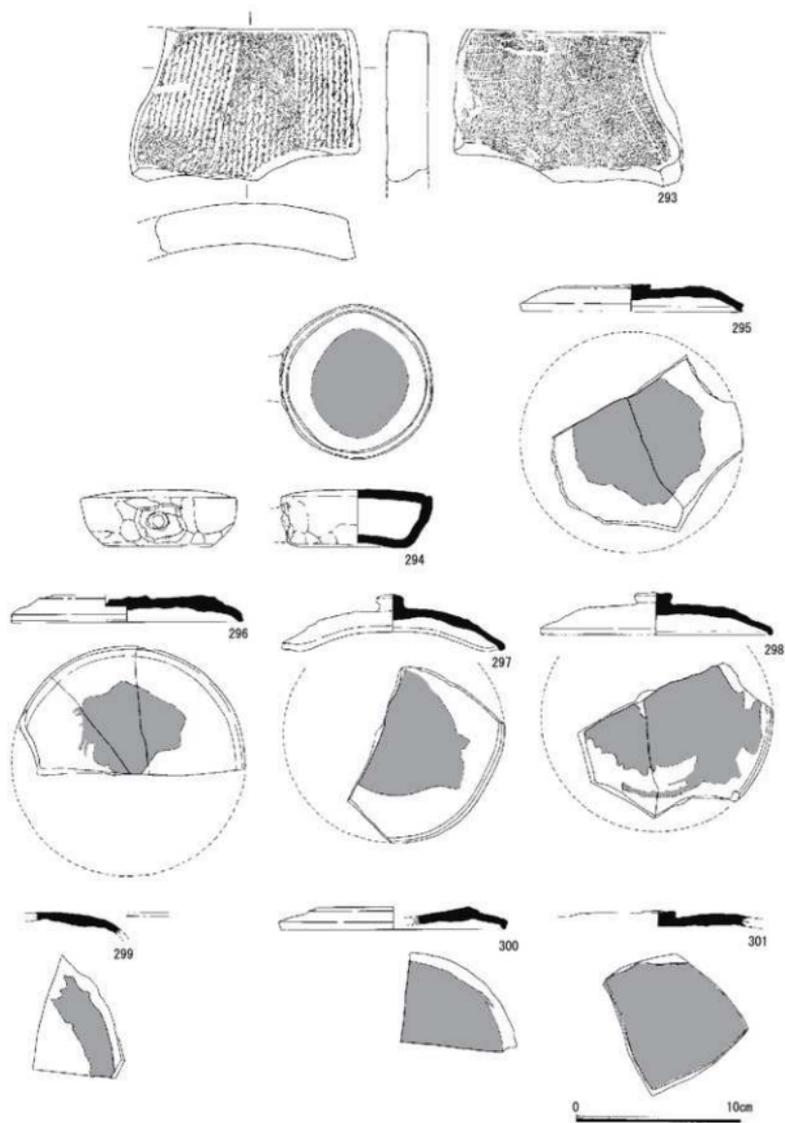


図65 2区SD256出土土器18 (1/3)

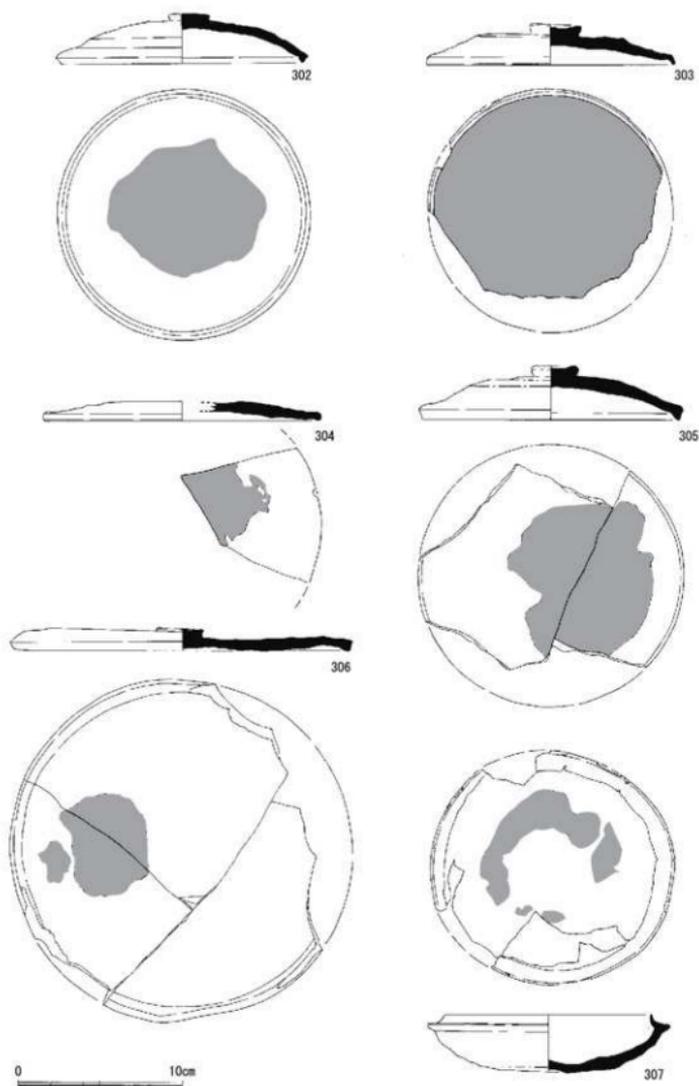


图66 2区SD256出土土器19 (1/3)

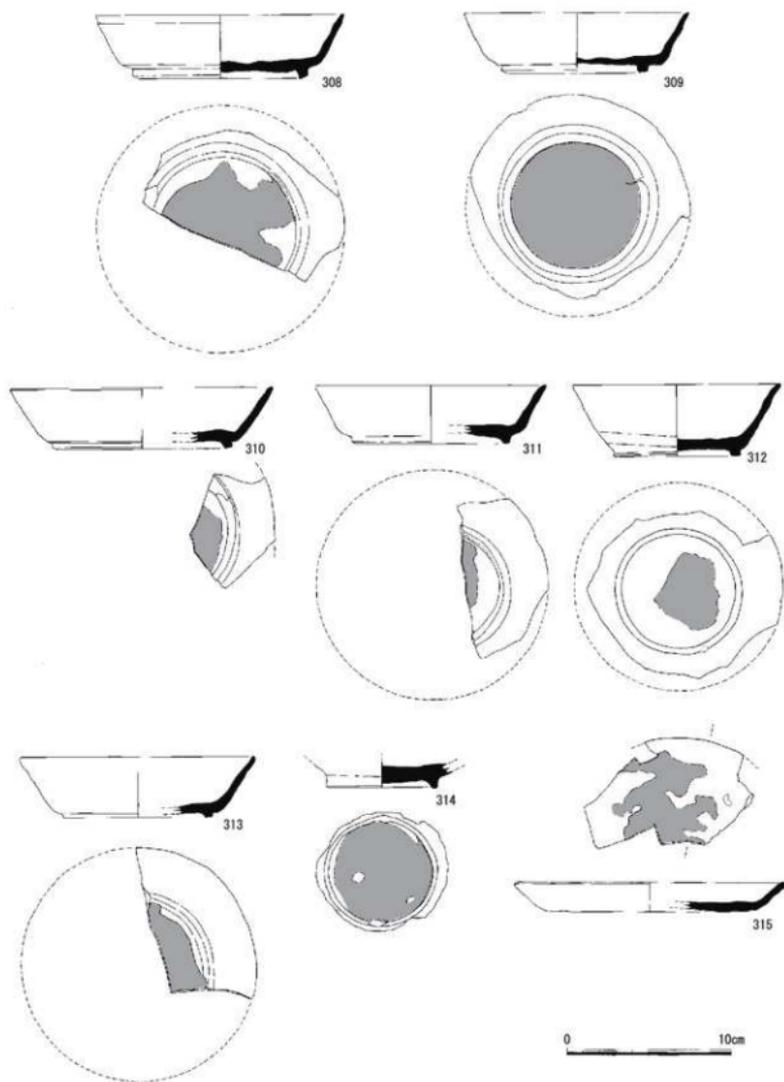


图67 2区SD256出土土器20 (1/3)

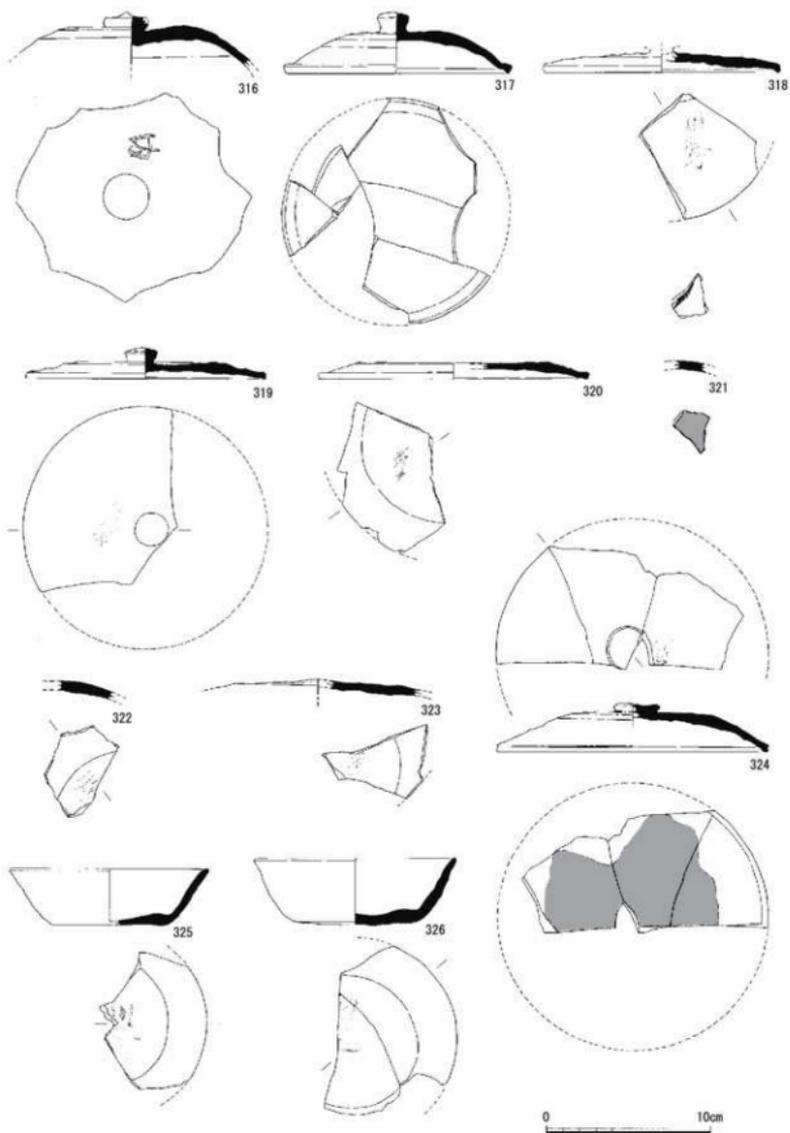


图68 2区SD256出土土器21 (1/3)

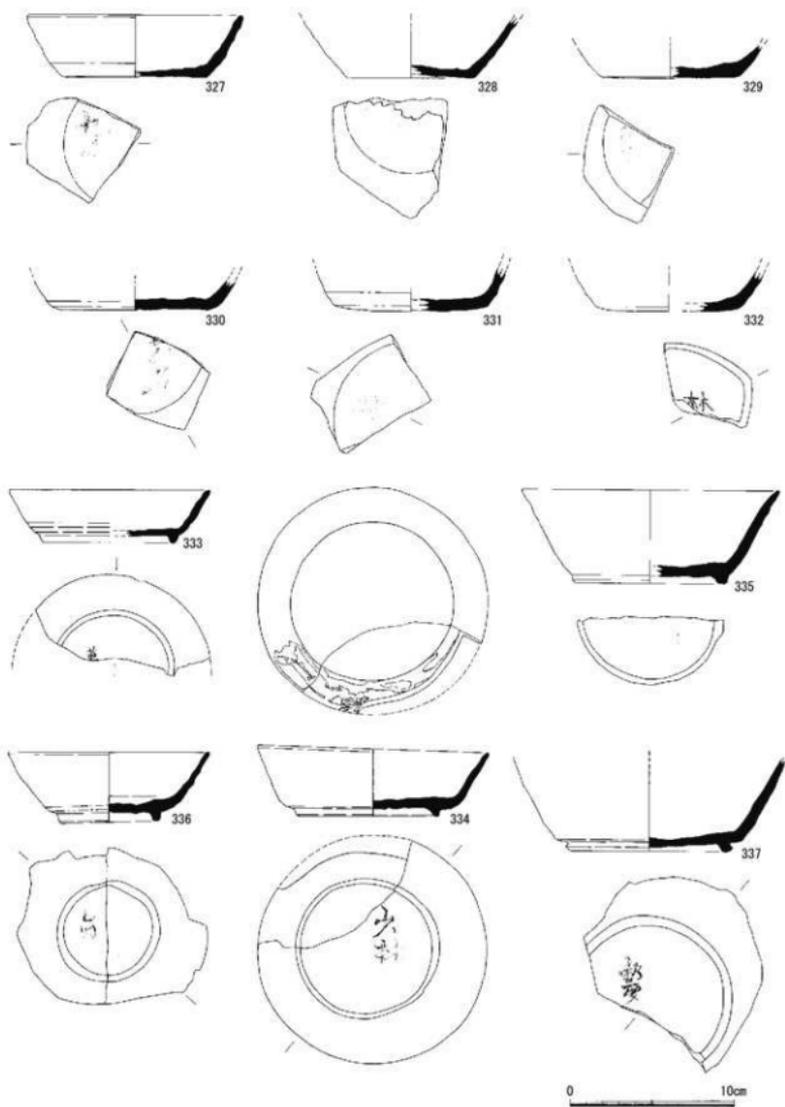


图69 2区SD256出土土器22 (1/3)

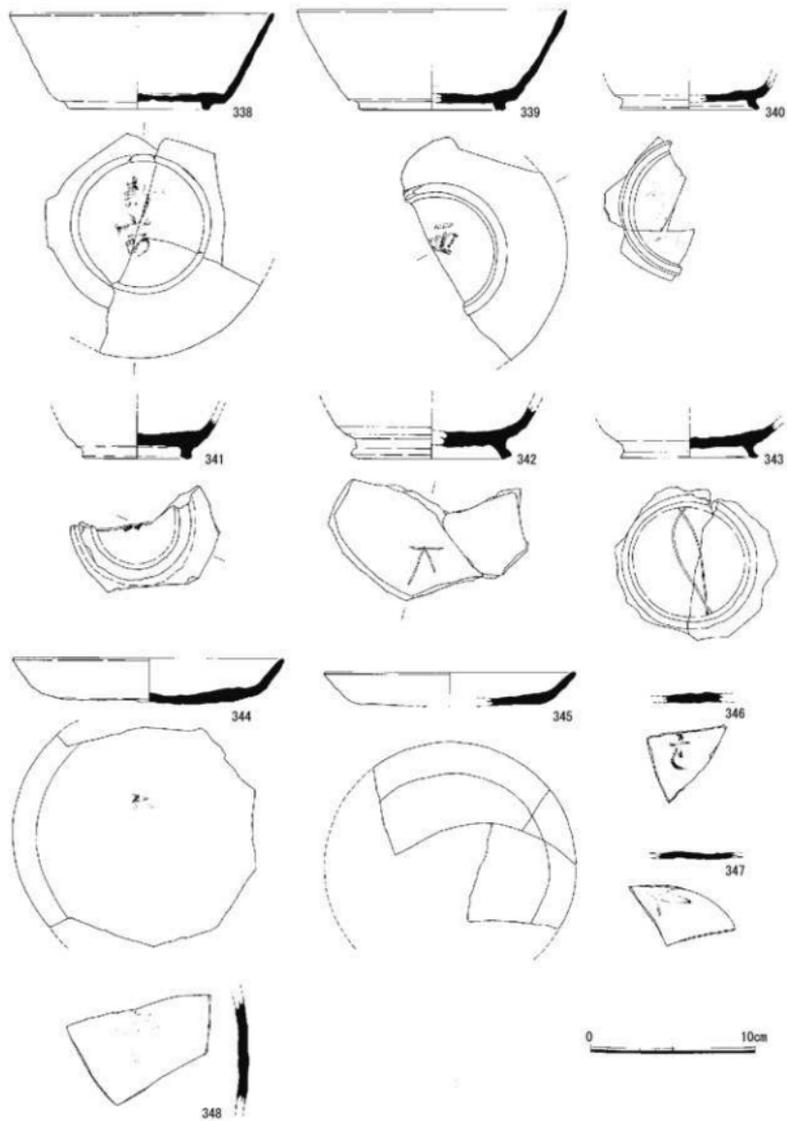


图70 2区SD256出土土器23 (1/3)

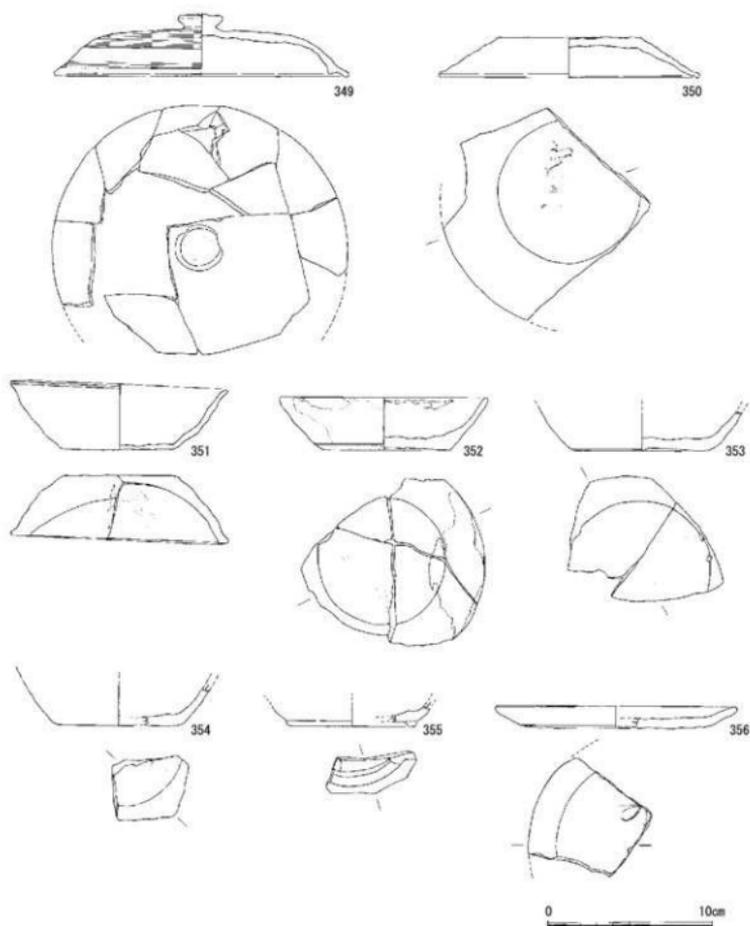


图71 2区SD256出土土器24 (1/3)

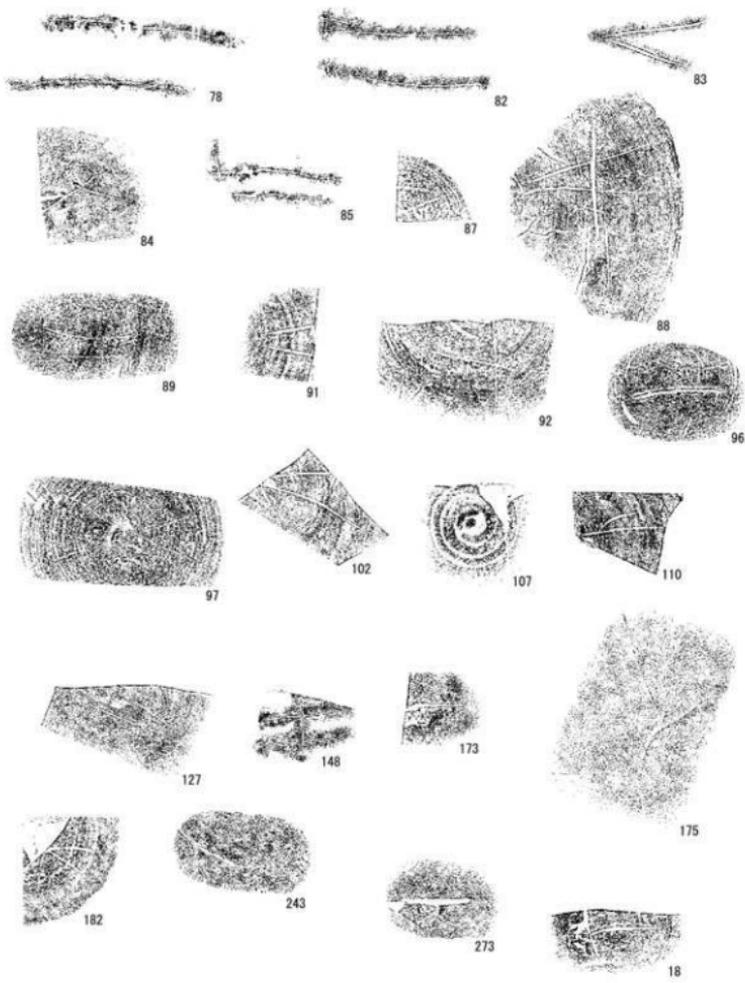


図72 ヘラ記号

## 木製品

1は堅形、完形である。全長90.9cm。丸材の中央部を削り細くして握りとし両端に掲き部がある。2～5は横槌である。大きさも様々で槌部の断面形も円形(2、4、5)方形(3、6)がある。2は完形、全長40.6cm。槌部断面形は円形で、握部断面形も円形である。握部端部は平面台形に肥厚する。3は握り部を欠損する。槌部断面形は方形である。芯持ち材の四面を平坦に仕上げる。槌部長は22.2cm。握部は槌部の中央でなくやや偏った箇所造りに出される。4は完形、全長26.8cm。槌部断面形は円形で、握部断面形も円形である。握部端部は先細りである。木取りは芯部をはずし辺材部を使う。5は完形、全長33.8cm。槌部断面形は円形で、握部断面形も円形である。握部端部は平面台形に肥厚する。槌部は芯持ち材で形態的には2と類似するが槌部から握部にかけては垂直に削る点異なる。6は握り部の中程から先端部にかけて欠損する。槌部断面形は長方形で、握部断面形も長方形である。

7は田下駄の足板か?上半部と両側面を欠損する。下端より平面長方形の孔を2ヶ所に穿つ。左側面にも孔らしき痕跡がみられ、加えると3ヶ所が一列に並ぶ。孔を穿つ部分は断面台形に肥厚する。表面中央は微妙に凹凸がみられ足置いた痕跡か?8は田下駄の枠の縦木である。片側を欠損する。幅は4.9cm。端部は断面三角形に仕上げる。横木のためのほぞ穴は平面正方形である。長辺部に人為的に削った窪みが1ヶ所みられる。

9、10は柄の端部片である。9は断面円形で端部は肥厚する。横槌の柄か。10は断面方形で端部は片側が肥厚する。11は鎌柄、数片に折れる。柄先端部は平面三角形に肥厚する。柄部は直線的で断面形は先端側は不整形で装着部側は扁平である。

12～14は槌の子である。すべて木心のある丸木材を用いる。形態的に2種類がある。ひとつは中央にむかって両方から円錐状に削り込むもの(12、13)と他方は材の中央の紐を結ぶ箇所が棒状にある鉄アレー形のもの(14)である。14は樹皮が残る。

15は下駄である。約1/4残存する。歯は台と同じ幅で縦断面形は略台形である。16は木靴、右側約1/2残存する。底面は平坦で、側面にかけて垂直に立ち上がる。右側面に孔を穿つ。底面断面は踵の方が薄くなる。また、踵側の側面は緩やかに立ち上がる。

17、18は木製壺である。17は底面と上端の吊紐の孔部を一部欠損する。吊紐が通る孔は左右に穿たれる。粗雑なつくりである。18は足を支える壺部の先端部のみの残存である。底面内外面は平坦である。

19、20は剣物の容器である。ともに平面長方形の槽である。19は長側面から片端小口にかけて残存する。底面は内外とも平坦で小口側は垂直に側面はやや緩やかに立ち上がる。20は片側長側面から両小口にかけて残存する。全長39.8cm。底面は内外とも平坦で小口側は垂直に側面はやや緩やかに立ち上がる。

21は剣物の把手付き容器である。完形。把手部は華奢なつくりで先端部は上方に曲がる。身部の外面は削り痕が明瞭に残る。それに比べて内面は削り痕が粗いため未製品の可能性もある。22は剣物の容器である。完形。鉢形の容器であり、内外面をきわめて平滑に仕上げる。芯のある丸材を輪切りにして削りぬく。内外面は年輪の木目が美しい。底面は平坦で左右両側に向かって緩やかに立ち上がる。

23～25は挽物皿。23は口縁部の1/3を欠損する。材の縦断面を口縁部にあてる横木取り。底部外面に轆轤目を残し、さらに轆轤の爪痕が3ヶ所みられる。底部内外面には不定方向に直線の細線の傷痕が多数つく。24は1/2残存。材の縦断面を口縁部にあてる横木取り。底部外面に轆轤の爪痕が2ヶ所みられる。底部内外面には不定方向に直線の細線の傷痕がつく。25は約1/2残存。材の縦断面を口縁部にあてる横木取り。底部器壁は薄い。図示していないがあと1点、挽物皿が出土している。約1/3残存。復元口径18.8cm、器高2.5cm。横木取り、底部外面に轆轤の爪痕が1ヶ所みられる。

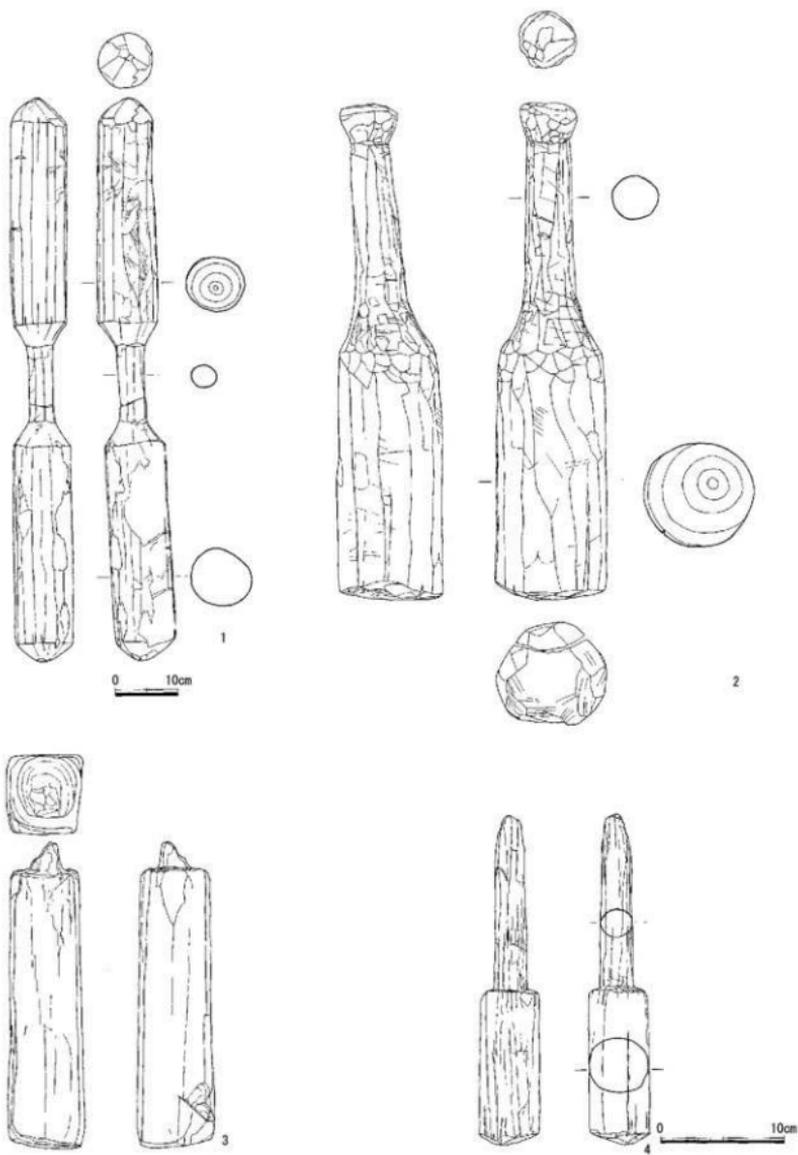


图73 2区SD256出土木製品1 (1/8、1/4)

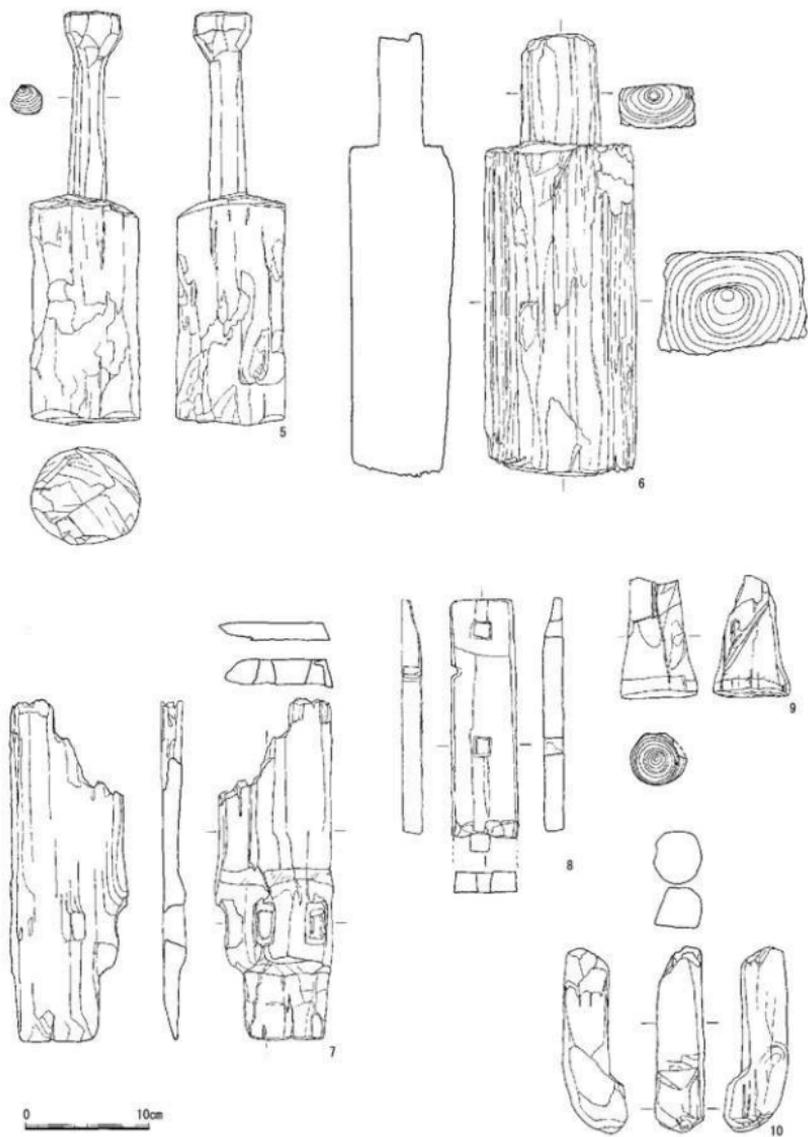


图74 2区SD256出土木製品2 (1/4)

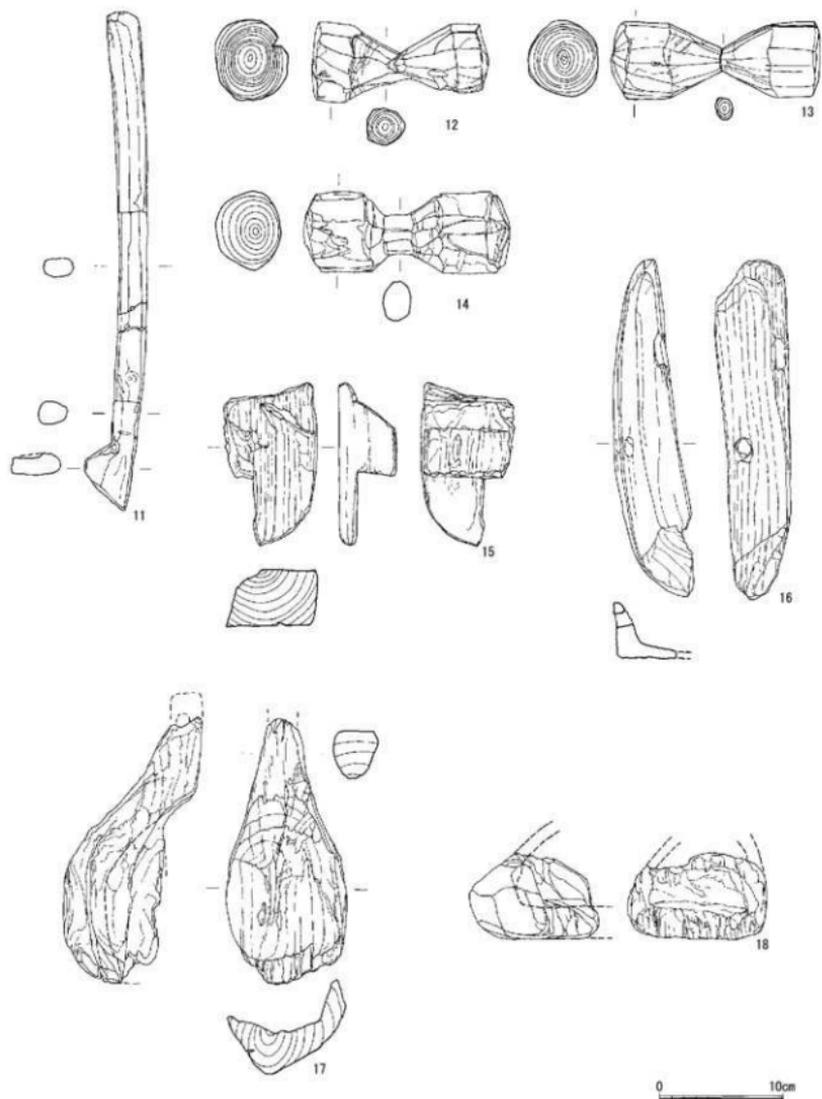


图75 2区SD256出土木製品3 (1/4)

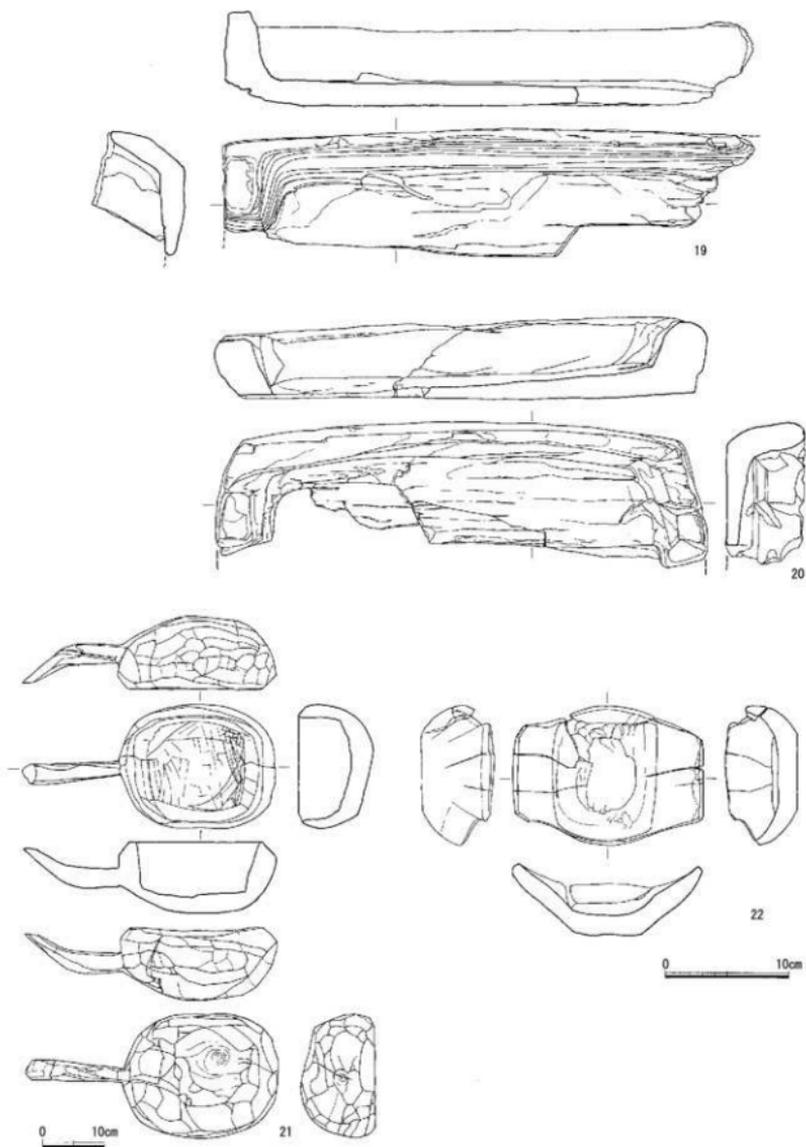


图76 2区SD256出土木製品4 (1/4、1/8)

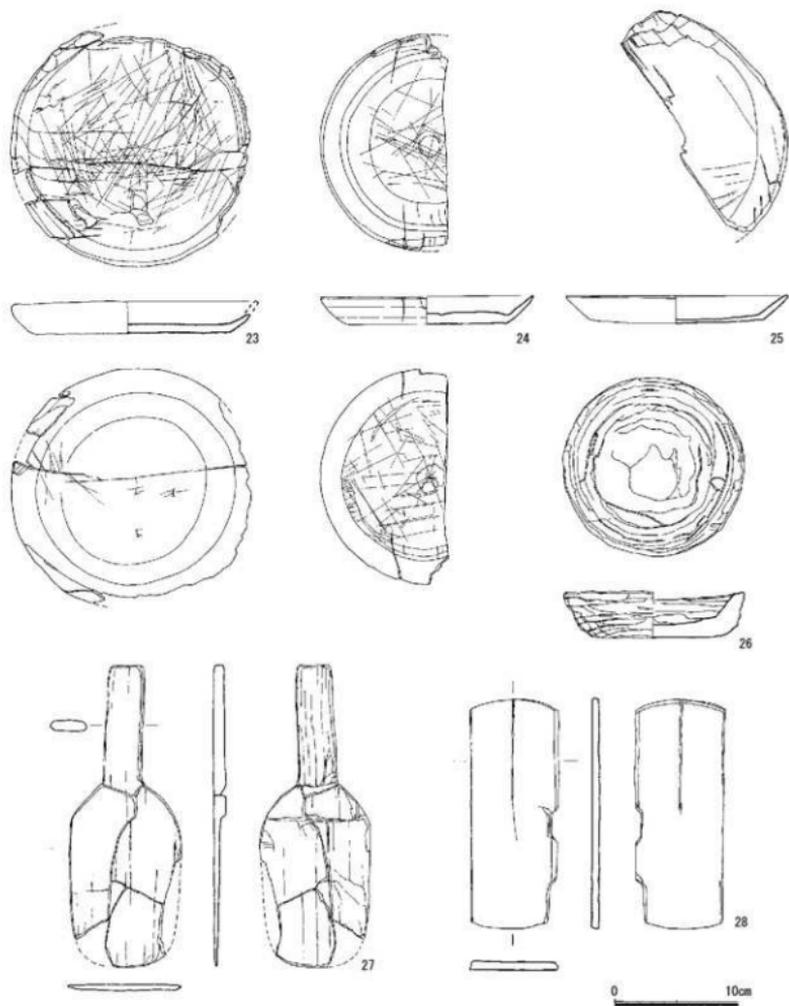


图77 2区SD256出土木製品5 (1/4)

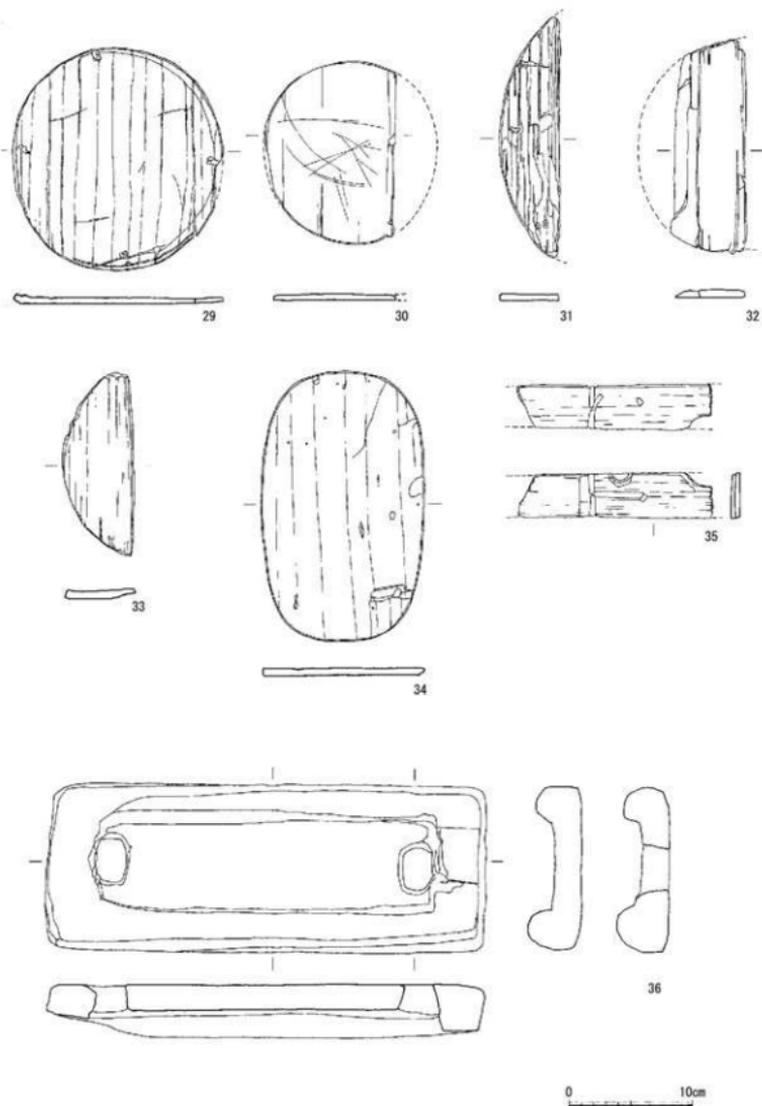


图78 2区SD256出土木製品6 (1/4)

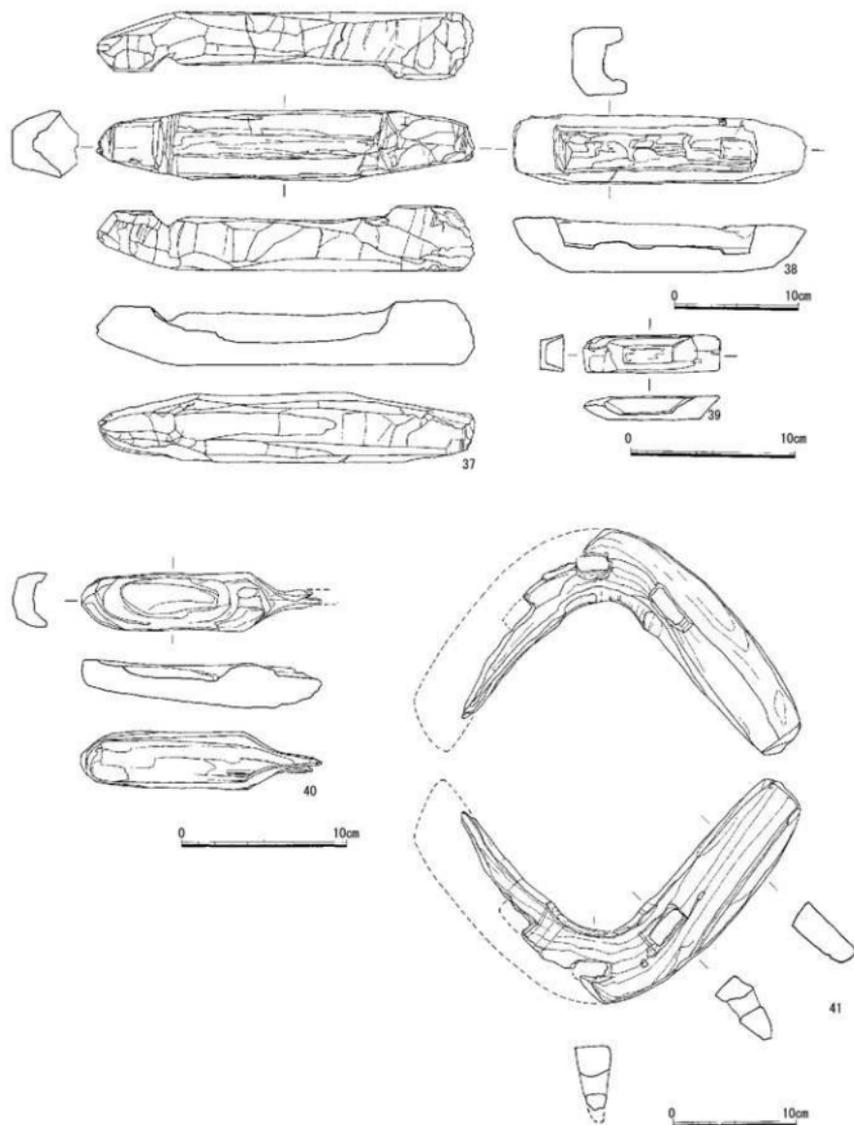
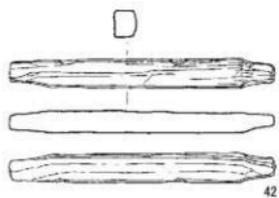
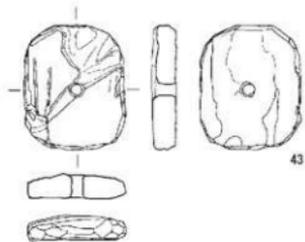


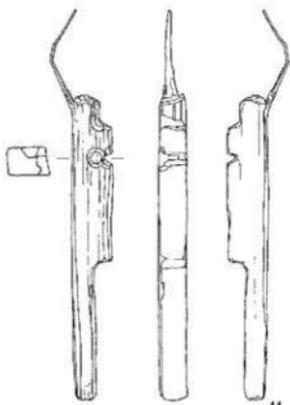
图79 2区SD256出土木製品7 (1/4、1/3)



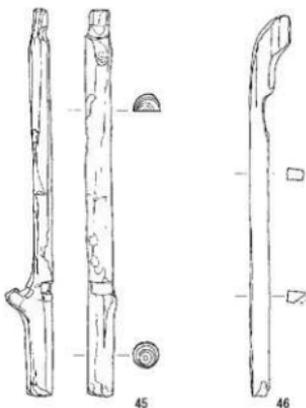
42



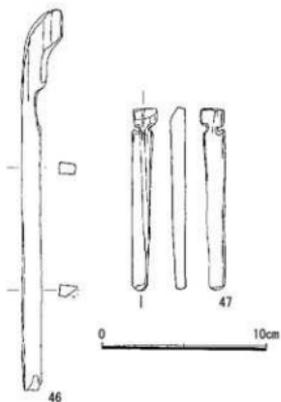
43



44



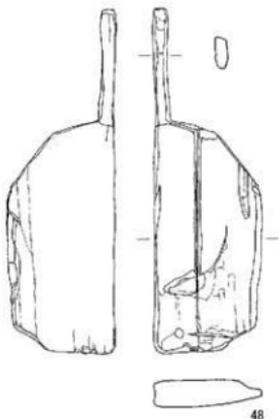
45



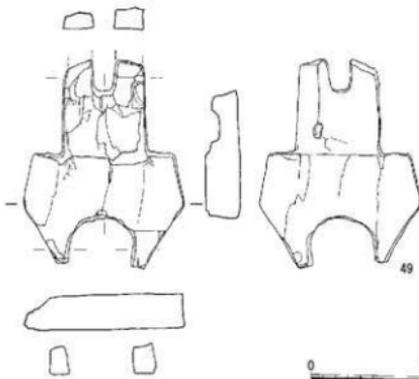
46

47

0 10cm



48



49

0 10cm

图80 2区SD256出土木製品8 (1/4、1/3)

26は刳物の皿。完形、材の横断面の小口を器の口縁部にあてる縦木取りである。挽物皿に比べ器壁は厚く、口径も小さい。粗雑なつくりである。

27は杓子形木器。身の先端一部と側面一部を欠損する。ほぼ完形。身の基部側に段をつくり、柄にかけてやや厚くなる。身の先端部はわずかに弧状である。

28～35は曲物である。28～34は曲物底板。28は円形底板の左右両側を欠損する。残存底板には結合孔や木釘孔はみられない。29はほぼ完形、円形底板4ヶ所に2孔1対の榫皮結合孔がある。30は約2/3残存、円形底板2ヶ所に2孔1対の榫皮結合孔が残る。31は円形底板の外縁部約1/4残存、底板2ヶ所に2孔1対の榫皮結合孔が残る。32は円形底板片。33は円形底板の約1/3残存、残存底板には結合孔や木釘孔はみられない。34は楕円形の底板、完形。35は曲物側板、1列2段の榫皮綴じである。

36は用途不明木製品である。完形。刳物で平面長方形の槽状に削りだし、底部の小口側両端に楕円形の孔を穿つ。

37,38は舟形木製品である。ともに完形。船底部をやや雑に削りぬいた刳船を模倣する。37は船首材をほめ込む溝を削る。38は船底部の両端と中央部3箇所が部分的に深く削る。39はミニチュアの舟形木製品である。完形。外内面とも丁寧なつくりである。ただし船首、船尾の区別がつかない。40は舟形か容器である。舟形とすれば船首側を長くつくる。

41は鞍である。約2/3残存。断面形は台形気味。洲浜形を削りだす。片面は平滑に仕上げる。長方形の孔を3箇所に穿つ。

42は織木の部材か？完形。断面長方形の身の両端にほぞ状の突起をつくりだす。図面右側のほぞ部がより鋭く削る。43は紡錘車。完形。平面隅丸長方形で中央に円孔を穿つ。

44は火鑽板、断面長方形の角材に間隔をおいて切り込みを入れ、火鑽白を上面にとどめる。火鑽白の断面は半球形である。半分以上を欠損しており火鑽白は2箇所みられる。火鑽白内面は黒色に炭化する。

45～47はなんらかの部材である。45は完形。二又に分かれた枝を切りおとし、長さ31.5cmの丸棒の片面を削り平坦に仕上げる。その反対面の2箇所にはほぞ状の切り込みをつくる。46は断面長方形の細長い板の片側を緩やかに湾曲するように仕上げる。47は細長い板の片方両端に対になるように半円形の切り込みをいれる。

48は叩板である。約1/2残存。身部の基部小口は面取りして仕上げる。身部の側面から上側面小口は雑に仕上げる。

49は栓。柱など建築用の部材である。両端は半円形およびU字形に繰り込む。表表面とも比較的丁寧に仕上げる。

## 木簡

2点出土した。図81-1は1号木簡として既報告した。下端部を欠損する。残存長19.1cm、最大幅3.8cm、厚さ0.9cmである。材質はマツ科モミ属である。上端小口面は削りにより丸味を持って仕上げる。表面上部に削り痕が残る。下端部が欠損しているため木簡に記載された文字の全容は不明である。釈文について当初「木簡研究22」に「大村戸主川部組次□〔付カ〕日下□〔部カ〕」として報告したが、保存処理後に再度観察を行い「大村戸主川部組次付日下□〔部カ〕」と修正した。12文字のうち戸主は小さく書かれる。以下、解説した文字について記す。

判読した文字の中に史料に登場する地名や人名がみられる。まず「大村」は肥前国の大村駅であろう。肥前国の古代の駅として10世紀前半に成立した「延喜式」巻28兵部式諸国駅伝馬条に15の駅名が記載されており、その中に「大村駅」がみられる。その所在地について松浦郡内に想定する説と「和名類聚抄」

にみえる彼杵郡大村郷に比定する説があった。松浦郡内に想定する説は現在の唐津市浜玉町東北部に大村とよぶ地域がありここを比定地とした。大村には境内内から布目瓦が出土する奈良時代の寺院跡と考えられる大村神社もある。本遺跡から「大村」が書かれた木簡は別にあと1点出土しており、大村駅の所在地は唐津市浜玉町五反田の大村神社付近であることが確定できた。

次に「川部祖次」は人名である。当初、「川部組次」と解説したがその後の観察で「組」は「祖」か「租」がいいとの結論になり、人名としては「祖次」が適当であろうとのことで「川部祖次」に訂正した。

川部に関しては『続日本紀』宝亀6年(775年)4月壬申条には肥前国松浦郡人の舵師である川部酒麻呂の名が登場する。川部酒麻呂は勝宝四年(752年)遣唐使の舵師となり、船尾で火を發した。その炎は舵を覆って飛び交ったが、その時、酒麻呂は舵を回し火に手を焼かれながらも舵を取って動かず、人々を安全に導いた。その功により十階級特進し外従五位下を叙せられ郡員外の主張に補せられている。また、唐津市千々賀古園遺跡出土の墨書土器にも「川部」がみられる。

「日下部」も人名である。八号木簡にも日下部がみえる。『肥前国風土記』松浦郡の条に日下部君の祖先伝承がある。弟日姫子(松浦佐用姫)と大伴狭手彦の悲恋物語は著名であるが、その弟日姫子は日下部君等の祖先であるとの記述がみられる。弟日姫子については松浦郡篠原村の出身で日下部君の祖ということだけで他は全く明らかでなかったが、摺振峯(鏡山)などその伝承がある地で「日下部」の文字が書かれた木簡が出土したことは興味深い。

図82-1は9号木簡である。上端部は欠損する。残存長22.1cm、最大幅3.0cm、厚さ0.4cmである。材質はヒノキ科アスナロ属である。上端は裏面から刃物を入れた跡が残り、人為的に折ったと考えられる。側面および下端小口面は丁寧に削られ平滑に仕上げられる。表面下半部に削り痕がみられる。

文字は表面の上方に「□也」がある。□は一の墨痕があるが文字としては判読できない。

#### (5) その他の溝跡

砂丘微高地上には幅約0.3~1.6m程の直線的な溝が南北方向や東西方向に走る。SD205、SD230、SD232は南北方向、SD225は東西方向である。SD205は溝幅が一定しておらず、地形に沿ってなされるため自然流路と思われる。



図81 2区SD256出土1号木簡 (1/1)

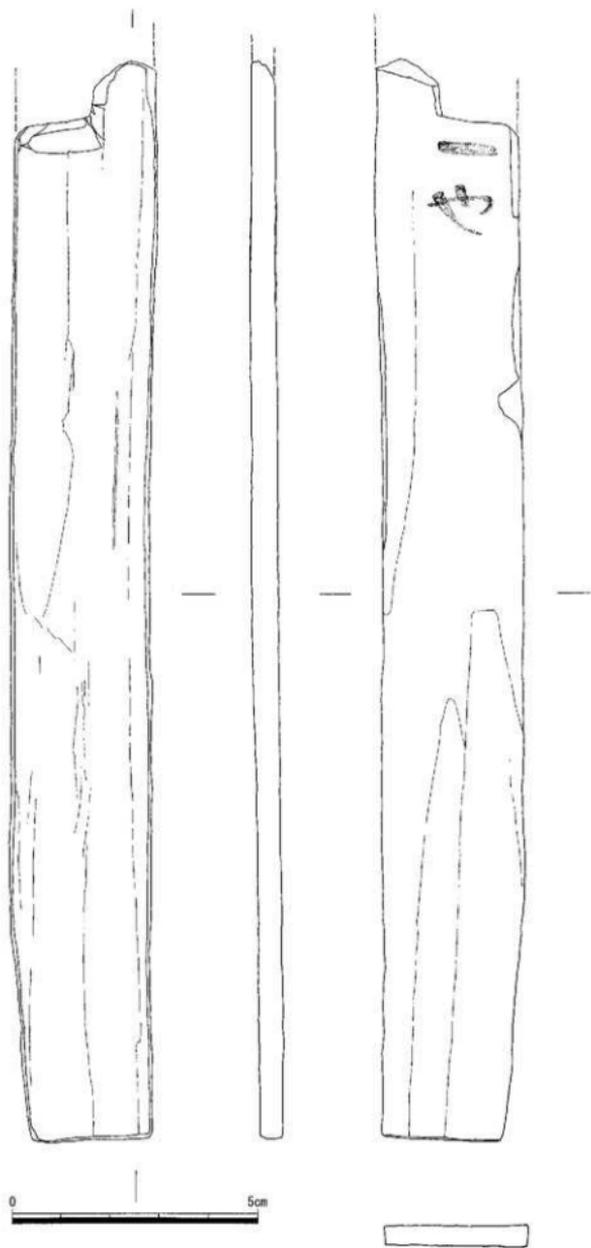


图82 2区SD256出土9号木简 (1/1)

埋土中から須恵器杯蓋片が出土。SD225はSB226と切り合う。埋土中から土師器、須恵器片が出土しているが時期決定はできない。性格も不明である。

また、SD243はD256に流れ込む自然にできた流路であろう。

#### 出土遺物

1はSD205から出土した杯蓋。2はSD243から出土した杯2 $\alpha$ 乙類の杯である。体部が直線的に外反し、底部との境は明瞭である。



図83 2区溝跡出土土器 (1/3)

#### (6) 上層水田跡

調査区の南半部で検出した。調査区北側の砂丘微高地上に掘立柱建物群からなる集落が、南側の低地には水田跡がある。その比高差は約50cmである。低地には植物遺体層(コモ層)が厚さ約30cm程堆積しており、その直下にて水田跡を確認した。コモ層を重機の平バケットで薄く序々に剥いでいくと基盤目状に黒色粘質土の中に灰褐色の畦畔が検出できた。調査区の南東部では畦畔が自然に消滅していき検出できなくなった。旧地形によるものか、本来水田はあったがその後の改変で畦畔が検出できなくなったのかは不明である。水田面の標高は3.3~3.4mである。

畦畔の走行方向はほぼ南-北および東-西である。畦畔の遺存状態は極めて悪かった。畦畔の規模は下幅約50cm~100cm、上幅約30cm~80cmで高さ5cm~15cmである。断面形態はカマボコ形である。杭や芯材は全くみられず、灰褐色粘質土を盛土しただけのものであった。

水田区画は平面正方形が主で長方形もみられる。小区画水田面積は最大区画で1辺約10mの約100 $\text{m}^2$ 、最小区画で7.6 $\text{m}^2$ と開きがみられる。区画が小さい水田は西半部にみられ、大きい区画は東半部にみられる。取水、排水路や堰は確認できず、配水や水懸りなども不明である。SD256からの取水口もみられなかった。出土遺物は水田跡の耕作土から須恵器、土師器片が出土した。

#### 出土遺物

1は須恵器の小片で杯と思われる。2は須恵器杯2 $\alpha$ 乙類の杯の小片。3、4は底部糸切りの土師皿。3は大形であり杯とした方がよいか。

#### (7) 包含層出土遺物

##### 土器

包含層からは弥生土器から近世陶磁器まで出土しており、SD256の土器分類により記述を進める。

##### 弥生土器・土師器 (1~10)

1は弥生土器裏の底部。内器面に少量のススが付着する。2~8は土師器杯類である。2~7は杯3類。2、3は底径が小さく体部下半が丸みを帯び、器形は杯2類に似る。3は焼け歪みがある。8は杯1類の外器面だけに暗文を施したもの。明らかにミガキ分けをした暗文であり、今回の分類では暗文を施したものは杯4類としているが、他の杯4類は内器面に渦巻状に暗文を施していることから8は杯1類とした。9、10は土師器皿。9は口縁部の外反が大きい。



图84 2区上層水田跡 (1/300)



図85 2区上層水田跡出土土器 (1/3)

#### 須恵器 (11~22、24)

11~17は杯蓋。11、12は杯蓋2ア類。13、14は3イ類。18は杯1類。底部はヘラ切り離し未調整である。19は杯2アα乙類。20は杯2イβ乙類で〔口/底比は1.4~1.7〕である。21は杯2イα乙類である。器高が高いため椀とすべきかもしれない。22は壺の胴部~底部片。24は高杯脚部。

#### その他 (23、25~28)

23は壺の胴部片。胎土中に黒色粒子を含む。軸が付着しており、灰軸陶器と考えているが、須恵器であるとの指摘も受けている(註4)。須恵器である場合、生産地は北部九州ではないと思われる。25は土師器小皿。底部は糸切離しである。26は白磁底部片。蛇ノ目高台をもち白磁I類である(森田、横田1978)。27、28は陶器片。

#### 石器 (1~3)

2区からはほとんど石器が出土していないため石器を一括して報告する。1は調査区西端から出土した石鎌の完形品。上部端と基部には研磨を施していない。2はSD256下層から出土した特殊砥石。棒状の道具の先端を研磨するために用いられたと考えられており、唐津市内では雲透遺跡や神田中村遺跡などの弥生時代の遺跡から出土するものが多い。3は上層の水田面から出土した打製石鎌。平基式であり先端部が欠損する。

#### 註

- 1 愛知県立陶磁資料館の井上氏、文化庁坂井主任調査官より指摘をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 2 神埼市中間遺跡SE-304から墨痕と研磨痕が残る杯1類が出土しており(報告では伝世品とする)、今後とも古墳時代後期の文字関係資料は注視する必要がある。
- 3 宮崎県立産業経済大学の柴田先生よりご教授いただいた。記して感謝申し上げます。
- 4 註1と同様。

#### 参考文献

- 河野竜介 1992 『中間遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区』第32集 神埼町教育委員会  
 中島恒次郎 2005 「聖武朝の土器-九州(大宰府と周辺)-」『古材の土器研究 聖武朝の土器様式』  
 古代の土器研究会  
 仁田坂聡 1998 『雲透遺跡』第83集 唐津市教育委員会  
 山本信夫 1990 「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究に寄せて-」  
 『乙益重隆先生古稀記念論文集』  
 山本信夫他 1983 「大宰府条坊Ⅱ」『大宰府町の文化財 第7集』大宰府町教育委員会  
 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』  
 九州歴史資料館

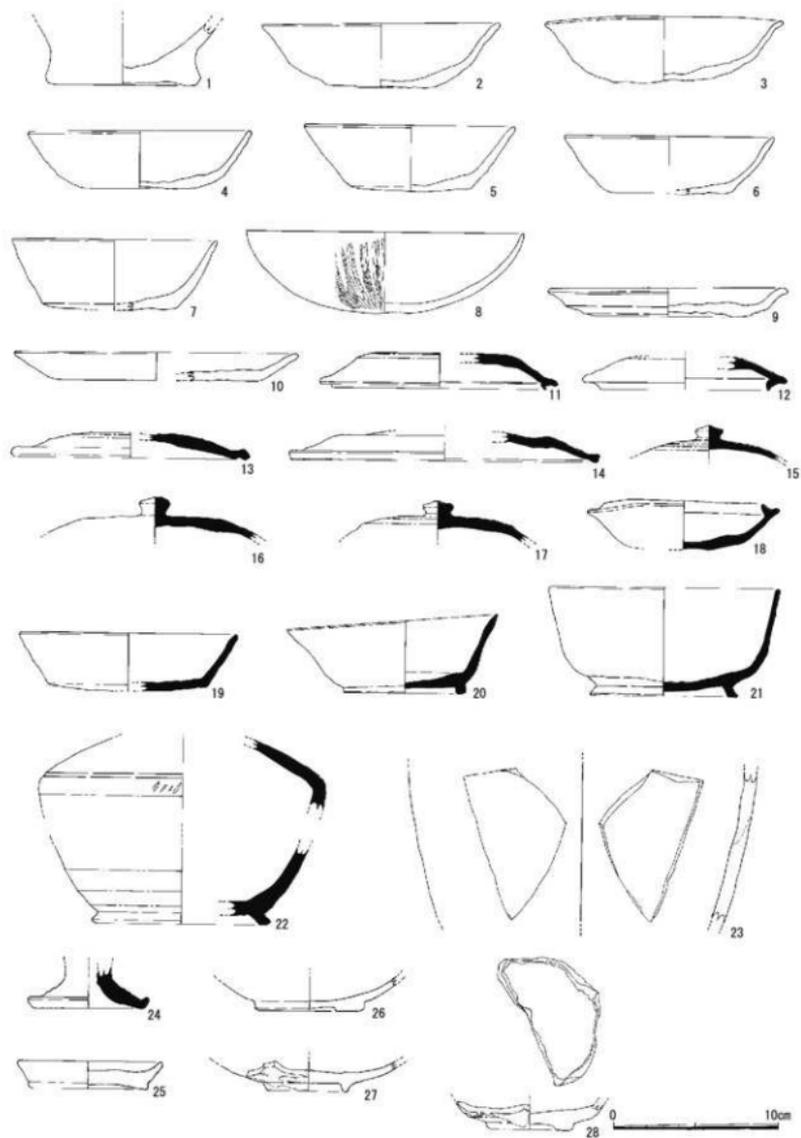


图86 2区包含层出土土器 (1/3)

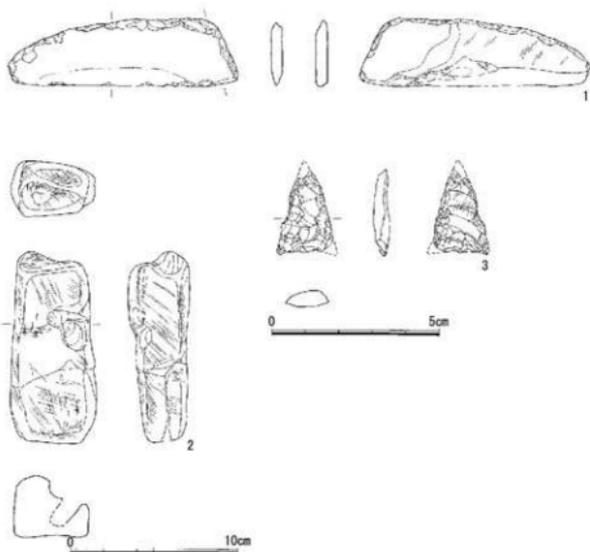


图87 2区出土石器 (1/3、2/3)

表6 2区SX246出土土器観察表(1)

\*復元値は( )

神田 番号	登録番号	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
						器高	口外(底) 径	外器面	内器面			外器面	内器面	
19-1	01000039	SX246 №207	弥生土器	甕	完形	32.5	27.3	にぶい 黄褐色	赤褐色	1mm~3mm の砂粒混入	良好	縦ハケ	縦ハケ	
+	2	01000100	SX246 №141	弥生土器	甕 口縁部	—	(23.8)	黒褐色	黒褐色	径3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	斜め ハケ	
+	3	01000098	SX246 №102	弥生土器	甕 口縁部	—	(26.0)	黒褐色	黒褐色	径3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	ナデ	外面煤付着
+	4	01000035	SX246 №211	弥生土器	甕 口縁部	—	(20.9)	にぶい 赤褐色	褐灰色	径1mm~3mm 前後の砂粒混入	良好	ナデ	縦の粗 いハケ	
+	5	01000042	SX246 №147	弥生土器	甕 口縁部	—	(19.2)	灰黄 褐色	黒色	径1mm以下の 砂粒混入	良好	縦の粗い ハケ	横ハケ	口縁部~肩部 外面煤付着
20-6	01000041	SX246 №182	弥生土器	甕 口縁部	—	(31.4)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	径2mm前後 の砂粒混入	やや 不良	不明	横ハケ	横ハケ	内面に粘土帯 接合痕あり。
+	7	01000097	SX246 №61	弥生土器	甕 口縁部	—	21.1	暗灰黄色・ 黒褐色	黒褐色	径5mm以下の 砂粒混入	やや 良好	ナデ	ナデ	
+	8	03002462	SX246 №64	弥生土器	甕 口縁部	—	(27.4)	灰黄褐色・ 褐灰色・ 明黄褐色	にぶい 黄褐色・ 黄褐色	1mm~3mm の砂粒混入	良好	縦ハケ	横ハケ	
+	9	03002474	SX246	弥生土器	甕 口縁部	—	—	にぶい黄褐色・ 褐色	黒色・ にぶい黄褐色	2mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	斜め ハケ	
+	10	03002475	SX246	弥生土器	甕 口縁部	—	—	にぶい黄褐色	にぶい 黄褐色	5mm以下の 砂粒混入	やや 良好	縦ハケ	斜め ハケ	
+	11	03002468	SX246 5層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	にぶい暗 褐色	にぶい黄褐色・ 黒褐色	0.3mm~1.5mm の砂粒混入	良好	縦ハケ	斜め ハケ	
+	12	03002470	SX246 7層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	浅黄褐色・ 黒褐色	にぶい 黄褐色	0.5mm~4mm の砂粒混入	良好	縦ハケ	ナデ	
21-13	01000043	SX246 №191	弥生土器	甕 口縁部	—	(23.0)	黒褐色	にぶい黄褐色 ・黒褐色	径3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	斜め ハケ		
+	14	01000099	SX246 №114	弥生土器	甕 口縁部	—	(19.1)	黒褐色	黒褐色	径3mm以下の 砂粒混入	良好	縦、斜め ハケ	口縁部の み横ハケ	肩部外面煤付 着
+	15	01000036	SX246 №231	弥生土器	甕 口縁部	—	(24.0)	暗褐色	にぶい 黄褐色	径1~2mm前後 の砂粒混入	良好	縦ハケ	横、斜め ハケ	
+	16	01000045	SX246 №217	弥生土器	甕 口縁部	—	(20.8)	にぶい 黄褐色	にぶい黄褐色・ 黒褐色	径3mm以下の 砂粒混入	やや 良好	ナデ	横、斜め ハケ	
+	17	01000038	SX246 №244	弥生土器	甕 口縁部	—	(24.2)	黒色	灰黄 褐色	径1mm~2mm 前後の砂粒混入	良好	縦ハケ	横、斜め ハケ	肩部外面煤付 着
+	18	01000094	SX246 №30	弥生土器	甕 口縁部	—	(24.6)	褐色	暗褐色	径2mm以下の 砂粒混入	良好	斜め ハケ	横ハケ	口縁部~肩部 外面煤付着
+	19	03002473	SX246	弥生土器	甕 口縁部	—	—	にぶい黄褐色・ 灰黄褐色	褐灰色	2mm以下の 砂粒混入	良好	縦、斜 めハケ	横、斜め ハケ	
+	20	03002472	SX246 7層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	浅黄 褐色	灰白色	0.5mm~2mm の砂粒混入	やや 良好	縦ハケ	横ハケ	
22-21	01000034	SX246 №201	弥生土器	甕 口縁部	—	(26.6)	にぶい 黄褐色	灰褐色	径1~2mm の砂粒混入	良好	縦ハケ のちナデ	ナデ		
+	22	01000095	SX246 №62	弥生土器	甕 口縁部	—	(22.6)	にぶい黄褐色・ 褐色	にぶい黄褐色・ 黒褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	縦ハケ	横、斜め ハケ	
+	23	01000096	SX246 №82	弥生土器	甕 口縁部	—	(22.8)	暗褐色	暗褐色	約3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	横、斜め ハケ	
+	24	03002471	SX246 7層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	にぶい黄褐色・ 褐色	褐色・ 灰褐色	0.3mm~4mm の砂粒混入	やや 良好	ナデ	ナデ	
+	25	03002436	SX246 7層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	浅黄褐色・ 褐色	浅黄 褐色	0.5mm~4.5mm の砂粒混入	やや 良好	縦ハケ のちナデ	ナデ	
+	26	03002469	SX246 5層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	にぶい 黄褐色	浅黄 褐色	0.5mm~2mm の砂粒混入	やや良 好	縦ハケ	斜め ハケ	
+	27	03002466	SX246	弥生土器	甕 口縁部	—	—	浅黄 褐色	浅黄 褐色	1mm~4mmの 砂粒が多く混入	やや 良好	縦ハケ	斜め ハケ	
+	28	04000005	SX246 4層	弥生土器	甕 口縁部	—	—	黄灰色	灰黄色・ 黄灰色	4mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	横ハケ	口縁部~肩部 外面煤付着
+	29	01000040	SX246 №78	弥生土器	甕 胴部	—	—	暗灰 黄色	暗灰 黄色	細砂粒~1mm 前後の砂粒混入	良好	縦、斜 めハケ	横、斜め ハケ	外面煤付着
23-30	04000002	SX246	弥生土器	甕 口縁部	—	—	—	灰色・ 黒褐色	黄褐色・ 灰黄色	2mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	横ハケ	

表7 2区SX246出土土器観察表(2)

\* 復元値は ( )

神田 番号	登録番号	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
						器高	口外(底) 径	外器面	内器面			外器面	内器面	
23-31	0400004	SX246	弥生土器	甕	口縁部	—	—	灰白色・ 黒褐色	灰黄色	5mm以下の 砂粒混入	良好	腹ハケのち 一部腹ハケ	ナデ	
・32	0400003	SX246	弥生土器	甕	口縁部	—	—	褐色・ 黒褐色	褐色	5mm以下の 砂粒混入	良好	腹ハケ	ナデ	
・33	03002467	SX246	弥生土器	甕	口縁部	—	—	灰青褐色・ 黒褐色	にぶい 黄褐色	1mm~3mm の砂粒混入	良好	腹ハケ	横ハケ	
・34	03002463	SX246 No115	弥生土器	甕	口縁部	—	—	にぶい褐色 ・褐色	灰黄 褐色	3mm以下の 砂粒が多く混入	良好	腹ハケ	斜め ハケ	
・35	01000044	SX246 No115	弥生土器	甕	口縁部	—	(22.3)	にぶい 褐色	にぶい 褐色	約3mm以下の 砂粒混入	やや良 好	腹ハケ	横ハケ	
・36	01000037	SX246 No143 No230	弥生土器	甕	口縁部	—	(20.5)	黒色	にぶい 黄褐色	細砂粒が 多く混入	良好	腹ハケ	斜め ハケ	口縁部~肩部 外面僅存着
・37	03002439	SX246 No89	弥生土器	甕	口縁部	—	(23.2)	にぶい 黄色	灰黄色	2mm以下 5mmの砂粒混入	良好	腹ハケ	縦・斜 めハケ	
・38	03002465	SX246	弥生土器	甕	口縁部	—	—	黒褐色・ 灰白色	にぶい褐色 ・褐色	0.3mm~4mm の砂粒混入	良好	腹ハケ	ナデ	
24-39	03002442	SX246 No167	弥生土器	甕	口縁部	—	(41.8)	灰白色	灰黄色	5mm以下の 砂粒混入	不良	不明瞭	不明瞭	口唇部断面文
・40	03002438	SX246 No76 No77	弥生土器	甕	口縁部	—	(35.0)	褐色	浅黄 褐色	5mm以下の 砂粒混入	良好	腹ハケ	縦・斜 めハケ	
・41	03002432	SX246	弥生土器	甕	口縁部	—	—	黒褐色・ にぶい褐色	にぶい褐色 ・褐色	4mm以下の 砂粒混入	良好	横ナデ	横ナデ	
・42	03002440	SX246 No65	弥生土器	甕	口縁部	—	—	—	—	0.5mm~5mm の砂粒混入	やや良 好	腹ハケ	横・斜 めハケ	
25-43	03002452	SX246 No93	弥生土器	甕	底部	—	(6.7)	灰黄色	灰黄色	4mm以下 3mmの砂粒混入	やや良 好	板ナデ 状	ハケ	
・44	03002453	SX246 No95	弥生土器	甕	底部	—	7.0	黒褐色・ 灰白色	黒褐色・ 灰白色	4mm以下の 砂粒混入	良好	ハケ	ハケ	
・45	03002424	SX246 No43	弥生土器	甕	底部	—	(4.0)	黒青褐色・ にぶい黄色	灰黄色	5mm以下の 砂粒混入	良好	縁状に よるナデ	不明瞭	
・46	03002447	SX246 No9	弥生土器	甕	底部	—	(6.2)	灰黄 褐色	灰白色	1~4mmの 砂粒が多く混入	良好	ナデ	ナデ	
・47	03002422	SX246 No7	弥生土器	甕	底部	—	4.8	黒色・ 灰黄色	黒褐色	4mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	指頭 圧痕	
・48	03002457	SX246 No187	弥生土器	甕	底部	—	6.0	灰黄色・ 赤褐色	にぶい褐色 ・褐色	5mm以下の 砂粒混入	良好	腹ハケ	不明瞭	
・49	03002461	SX246 No99	弥生土器	甕箱?	底部	—	(13.0)	褐色・ 灰黄色	灰白色	4mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
・50	03002421	SX246 No1	弥生土器	甕箱?	底部	—	(10.6)	黄褐色・ 赤・黄褐色	灰黄色	4.5mm以下の 砂粒混入	良好	ハケの ちナデ	ナデ	
・51	03002458	SX246 No223	弥生土器	甕箱?	底部	—	(9.8)	にぶい褐色 ・褐色	暗灰色	5mm以下の 砂粒混入	良好	ハケ	ハケ	
・52	03002460	SX246 No252	弥生土器	壺	底部	—	(6.2)	にぶい褐色 ・灰白色	灰褐色・ 灰白色	4mm以下の 砂粒混入	やや良 好	不明瞭	ハケ	
・53	03002426	SX246 No107	弥生土器	壺	底部	—	(7.2)	褐色・ 灰黄色	黒色	4mm以下の 砂粒混入	良好	腹ハケ	ナデ	
26-54	03002448	SX246 No21	弥生土器	壺	底部	—	(6.8)	にぶい褐色 ・灰黄色	暗灰 黄色	1mm~5mm の砂粒混入	良好	腹ハケ	器面 剥離	
・55	03002455	SX246 No125	弥生土器	壺	底部	—	5.8	にぶい褐色 ・にぶい褐色	褐色・ にぶい褐色	3.5mm以下の 砂粒混入	良好	腹ハケ	横ハケ	
・56	03002456	SX246 No157	弥生土器	壺	底部	—	(8.2)	灰黄色・ 褐色	灰黄色	4mm以下 砂粒が多く混入	やや良 好	叩き?	器面 剥離	
・57	03002423	SX246 No22	弥生土器	壺	底部	—	7.4	暗灰 黄色	灰黄色	3.5mm以下 の砂粒混入	やや良 好	ナデ?	器面 剥離	
・58	03002429	SX246 No246	弥生土器	壺	底部	—	8.2	暗灰黄色 ・褐色	褐色	5mm以下の 砂粒混入	やや良 好	ナデ	ナデ	
・59	03002425	SX246 No100	弥生土器	壺	底部	—	(5.0)	黒褐色・ 赤褐色 ・褐色	にぶい褐色 ・褐色	5mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ハケ	
・60	03002459	SX246 No225	弥生土器	壺	底部	—	5.9	褐色・ 浅黄褐色	淡黄色	5.5mm以下 の砂粒混入	良好	腹ハケ	ナデ	

表8 2区SX246出土土器観察表(3)

\* 復元値は ( )

神田 番号	登録番号	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考	
						器高	口外(底) 径	外器面	内器面			外器面	内器面		
26-61	03002428	SX246 №204	弥生土器	壺	底部	—	(7.2)	橙色・ 灰黄色	明赤 褐色	4mm以下の 砂粒を多く混入	やや 良好	ナデ	器面 剥離		
+	62	03002450	SX246 №64	弥生土器	壺	底部	—	(8.4)	にぶい 黄褐色・ 黒褐色	灰白色・ 灰黄色	1mm~5mm の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
+	63	03002427	SX246 №123	弥生土器	壺	底部	—	—	にぶい 黄褐色・ 黒褐色	灰白色・ 黒色	4mm以下の 砂粒混入	良好	ハケ	ナデ	
+	64	03002451	SX246 №91	弥生土器	壺	底部	—	60	淡黄褐色・ 黒褐色	黒褐色	6mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ハケ後 ナデ	
+	65	03002454	SX246 №113	弥生土器	壺	底部	—	122	灰黄色	灰黄色	5mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	台付壺
27-66	03002433	SX246	弥生土器	直口 壺	口縁部	—	—	浅黄 褐色	灰黄色	3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	縦ハケ		
+	67	03002444	SX246 №268	弥生土器	直口 壺	口縁部	—	—	浅黄 褐色	灰白色	0.5mm~3.5mm の砂粒混入	良好	縦ハケ	横ハケ	
+	68	03002443	SX246 №224	弥生土器	直口 壺	口縁部 ~胴部	—	(13.9)	灰黄色	灰黄色	3.5mm以下 の砂粒混入	良好	縦ハケ	縦・斜 めハケ	
+	69	03002441	SX246 №138	弥生土器	広口 壺	口縁部	—	(19.4)	灰黄色	灰黄色	4mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
+	70	03002437	SX246 №63	弥生土器	広口 壺	口縁部	—	—	純・ にぶい 黄褐色	灰黄色・ 赤褐色	0.5mm~6mm の砂粒混入	やや 良好	ナデ	ナデ	
+	71	03002445	SX246	弥生土器	広口 壺	口縁部	—	—	褐色・灰 黄褐色	浅黄 褐色	1mm前後4mm の砂粒を混入	良好	ナデ	ハケ	
+	72	03002430	SX246	弥生土器	直口 壺	口縁部	—	(28.4)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	3mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
+	73	03002431	SX246	弥生土器	直口 壺	口縁部	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	4mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
28-74	01000078	SX246 5層	弥生土器	高杯	杯部	—	(24.8)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約2mm以下 の砂粒混入	良好	磨き状	磨き状 後ナデ		
+	75	01000076	SX246 №180	弥生土器	高杯	杯部	—	(29.2)	灰黄色	灰黄色	約2mm以下 の砂粒混入	良好	ハケ	ハケ	
+	76	01000079	SX246	弥生土器	高杯	脚部	—	—	褐色	褐色・ 赤褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	脚部内部赤 色顔料付着
+	77	01000083	SX246 №97	弥生土器	高杯	脚部	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	やや 良好	不明瞭	不明瞭	
+	78	01000081	SX246 №42	弥生土器	高杯	脚部	—	—	にぶい 黄褐色・ 褐色	純・ にぶい 黄褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	縦ハケ	ナデ	
+	79	01000088	SX246 №181	弥生土器	高杯	脚部	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約4mm以下 の砂粒混入	やや 良好	不明瞭	不明瞭	
+	80	01000087	SX246 №163	弥生土器	高杯	脚部	—	—	灰黄褐色・ 黒褐色	灰黄褐色・ 黒褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	縦ハケ	ハケ	
+	81	01000089	SX246 №190	弥生土器	高杯	脚部	—	—	褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ハケ	
+	82	01000082	SX246 №86	弥生土器	高杯	脚部	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	やや 良好	不明瞭	ナデ	
+	83	01000085	SX246 №117	弥生土器	高杯	脚部	—	—	明赤褐色・ 灰黄色	暗褐色・ 褐色	約1mm以下 の砂粒混入	良好	磨き状	ハケ	
+	84	01000080	SX246 7層	弥生土器	高杯	脚部	—	(15.6)	褐色・にぶ い黄褐色	褐色・ 褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	磨き状	ハケ	
+	85	01000086	SX246 №145	弥生土器	高杯	脚部	—	(16.0)	明赤褐色・ にぶい 黄褐色	浅黄褐色・ 褐色	約3mm以下 の砂粒混入	やや 良好	不明瞭	ハケ	
+	86	01000084	SX246 №112	弥生土器	高杯	脚部	—	(12.0)	褐色	にぶい 黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ハケ	
29-87	01000092	SX246 №156	弥生土器	高杯	脚部	—	—	黄褐色	黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ハケ	ナデ		
+	88	01000091	SX246 №129	弥生土器	高杯	脚部	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約1mm以下 の砂粒混入	やや 良好	ナデ	ナデ	
+	89	01000090	SX246 №25	弥生土器	高杯	脚部	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	やや 良好	ハケ後 ナデ	不明瞭	
+	90	03002464	SX246 2層/3層	弥生土器	鉢	口縁部	15.4	(28.0)	灰黄色	浅黄色	0.3mm~3mm の砂粒混入	良好	縦ハケ	横ハケ	

表9 2区SX246出土土器観察表(4)

\* 復元値は ( )

神国 番号	登録番号	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
						器高	口外(底) 径	外器面	内器面			外器面	内器面	
29-91	01000077	SX246	弥生土器	鉢	口縁部	—	(24.4)	にぶい 橙色	にぶい黄褐色 ・黒褐色	約3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	横ハケ	
*-92	03002435	SX246 5層	弥生土器	鉢	口縁部	—	16.4	橙色	にぶい黄褐色 ・黒褐色	0.3mm~2mm の砂粒混入	良好	斜め ハケ	ナデ	
*-93	01000083	SX246	弥生土器	鉢	底部	—	(8.6)	にぶい黄褐色 ・褐色	にぶい黄褐色 ・褐色	約3mm以下の 砂粒混入	良好	縦ハケ	ハケ	
*-94	00003404	SX246 No.51	弥生土器	支脚	支支部	—	(6.9)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約4mm以下の 砂粒混入	良好	ハケ	ハケ	
*-95	01000075	SX246 No.266	弥生土器	支脚	完形	—	10.5	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	約3mm以下の 砂粒混入	良好	指頭 圧痕	ナデ	
*-96	01000073	SX246 No.59	弥生土器	支脚	完形	—	—	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	約3mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	—	
*-97	01000026	SX246 No.262	弥生土器	器台	裾部	—	(19.0)	橙色	にぶい 褐色	1mm~3mm前後 の砂粒混入	良好	縦ハケ	ハケ	
30-98	00002939	SX246 No.56	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	17.6	(11.2) (13.0)	浅黄 褐色	浅黄 褐色	1mm~2mm前後 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	外面線刻
*-99	00002934	SX246 No.149	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	16	12.8 (14.0)	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	にぶい 褐色	1mm~2mm前後 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	ナデ	被熱
*-100	00002938	SX246 No.134	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	14.9	(9.95) 12.95	淡黄 褐色	淡黄 褐色	1mm前後の 砂粒混入	良好	ハケの ちナデ	ナデ	
*-101	01000033	SX246 No.176	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	—	13.5	にぶい 黄褐色	褐色・ 灰黄褐色	1mm~2mm前後 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	底面に同一方向 の線状圧痕あり
*-102	00003414	SX246 No.253	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	16.4	(11.5) (12.2)	にぶい黄褐色 ・にぶい褐色	にぶい黄褐色 ・にぶい褐色	約5mm以下の 砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱
*-103	00003423	SX246 No.272	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	15.0	(9.2) (11.0)	にぶい黄褐色 ・褐色	にぶい黄 褐色・褐色	約4mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
*-104	00002941	SX246 No.274	弥生土器	器台 (注)	ほぼ 完形	15.1	(10.7) 12.75	灰黄 褐色	にぶい 褐色	縦砂粒~2mm 大の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱
*-105	01000057	SX246 No.257	弥生土器	器台 (注)	支支部 欠損	—	(12.4)	褐色・にぶ い黄褐色	褐色・にぶ い黄褐色	約3mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
*-106	00003421	SX246 No.75	弥生土器	器台 (注)	支支部 欠損	—	13.0	にぶい黄 褐色・にぶい褐色	にぶい黄褐色 ・褐色	約4mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
*-107	00003396	SX246 No.192	弥生土器	器台 (注)	支支部 欠損	11.7	8.9 8.1	褐色・ にぶい黄褐色	褐色・暗 灰黄色	約4mm以下の 砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
31-108	00002928	SX246 No.232	弥生土器	器台 (注)	支支部 欠損	—	14.2	赤褐色・ にぶい黄褐色	赤褐色・に ぶい黄褐色	1mm前後の 砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	指頭圧痕 のちナデ	被熱
*-109	01000025	SX246 No.101	弥生土器	器台 (注)	裾部	—	(13.0)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm~1.5mm 大の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
*-110	01000024	SX246 No.160	弥生土器	器台 (注)	裾部	—	(11.1)	灰白色	灰黄 褐色	1mm~2mm前後 の砂粒混入	良好	ハケ	ナデ	被熱によりや や青灰色気味
*-111	00002933	SX246 No.233	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	15.4	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	縦砂粒~2mm 大の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
*-112	01000022	SX246 No.228	弥生土器	器台 (注)	裾部	—	12.5	にぶい 褐色	にぶい 褐色	1mm前後~3mm 大の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
*-113	01000027	SX246 No.106	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	(11.9)	にぶい 褐色	にぶい 褐色	1mm前後~5mm 大の砂粒混入	良好	ハケ	ハケの ちナデ	
*-114	00003389	SX246 No.261	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	11.8	にぶい褐色 ・にぶい黄褐色	褐色・にぶ い黄褐色	約7mm以下の 砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱
*-115	01000029	SX246 No.179	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	10.4	灰黄 褐色	灰黄 褐色	縦砂粒~3mm 大の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
*-116	01000032	SX246 No.183	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	11.0	にぶい 褐色	にぶい 褐色	2mm大の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱?
*-117	01000031	SX246 No.219	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	10.9	にぶい黄褐色 ・褐色	にぶい 黄褐色	1mm前後~2mm 大の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	外面へら削り による面取り
*-118	00002930	SX246 No.38	弥生土器	器台 (注)	胴部~ 裾部	—	(14.7)	にぶい 灰黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm前後の 砂粒混入	良好	ハケ	ハケ	
*-119	01000028	SX246 No.170	弥生土器	器台 (注)	裾部	—	(14.4)	灰黄色	2mm前後の 砂粒混入	良好	器面 線刻	ハケ	被熱により外面 一部青灰色気味	
*-120	01000072	SX246 No.256	弥生土器	器台 (注)	裾部	—	(11.8)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約5mm以下の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱により外面 一部青灰色気味

表10 2区SX246出土土器観察表 (5)

\*復元値は ( )

神田 番号	登録番号	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
						器高	口外(底) 径	外器面	内器面			外器面	内器面	
31-121	00003403	SX246 No40	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	106	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	不明瞭	
+	122	00003402	弥生土器	器台 (残)	裾部	—	(115)	にぶい 黄褐色	褐色・ にぶい黄褐色	約2mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
32-123	01000056	SX246 No154	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(115)	にぶい・暗 い黄褐色	にぶい・暗 い黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	叩き	ナデ	被熱
+	124	01000059	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(116)	褐色	褐色・明 赤褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	指頭 圧痕	
+	125	01000064	弥生土器	器台 (残)	裾部	—	(134)	黄褐色・ 暗赤褐色	青赤褐色に ぶい黄褐色 にぶい黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
+	126	01000061	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(122)	褐色	褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
+	127	01000069	弥生土器	器台 (残)	裾部	—	(108)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱?
+	128	01000060	弥生土器	器台 (残)	裾部	—	(104)	暗褐色	暗褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	指頭 圧痕	
+	129	00003415	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	128	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ハケの ちナデ	ハケの ちナデ	
+	130	01000071	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(120)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	指頭圧痕 のちナデ	底面に棒状圧 痕あり
+	131	01000030	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	124	にぶい 黄褐色・ 褐色	にぶい 黄褐色	細砂粒～1mm 程度の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	指頭圧痕 のちナデ	
+	132	00002932	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(154)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm前後の細 かい砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
+	133	00002931	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	150	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm～3mm大 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱?
+	134	01000068	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(134)	褐色・ 暗褐色	暗褐色・ にぶい黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ハケ	被熱
+	135	01000063	弥生土器	器台 (残)	裾部	—	(126)	灰黄 褐色	黒褐色・ 褐色	約2mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ハケ	
+	136	00002926	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(144)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm前後の 砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱により外周 一部青灰色気味
+	137	00003417	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(119)	灰黄色・ 褐色	暗灰色・ 明褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ハケ	ハケ	
33-138	00002935	SX246 No273	弥生土器	器台 (残)	支え部 欠損	—	1225	黄褐色	黄褐色	1mm～2mm前 後の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	指頭圧痕 のちナデ	被熱により外周 一部青灰色気味
+	139	00003424	弥生土器	器台 (残)	支え部 欠損	—	110	暗褐色・ 褐色	褐色・ 褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
+	140	00003420	弥生土器	器台 (残)	支え部 欠損	—	126	にぶい・暗 い黄褐色・ 褐色・褐色	黄褐色・ 赤褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱?
+	141	01000070	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(144)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	裾端部外周が 一部平坦
+	142	01000062	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	134	褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ハケの ちナデ	被熱
+	143	01000023	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(138)	灰黄 褐色	灰白色	1mm前後の 砂粒混入	良好	ナデ	ハケの ちナデ	被熱により外周 一部青灰色気味
+	144	01000058	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(114)	明赤 褐色・褐色	にぶい・暗 い黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	ナデ	被熱
+	145	00002929	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(126)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm～1.5mm 大の砂粒混入	良好	ハケの ちナデ	ハケの ちナデ	
+	146	01000051	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	130	褐色	褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ハケの ちナデ	
+	147	00003407	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	(108)	にぶい・暗 い黄褐色・ 褐色	にぶい・暗 い黄褐色・ 黒褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	器面 磨耗	ナデ	被熱?
+	148	00003412	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	105	灰黄 褐色・褐色	にぶい・暗 い黄褐色・ 褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	指頭圧痕 のちナデ	
+	149	01000055	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	93	にぶい・暗 い黄褐色・ 褐色	にぶい・暗 い黄褐色・ 褐色	約6mm以下 の砂粒混入	良好	ハケの ちナデ	ハケの ちナデ	被熱?
+	150	00003410	弥生土器	器台 (残)	胴部→ 裾部	—	90	灰黄色・ 褐色	灰黄色・ 褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱により外周 一部青灰色気味

表11 2区SX246出土土器観察表 (6)

\*復元値は( )

神田 番号	登録番号	出土 地点	種別	器種	残存 部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	調整		備考
						器高	口外(底) 径	外器面	内器面			外器面	内器面	
34-151	0000325	SX246 №6	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	112	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	絞り痕	ナデ	外面に絞り痕 あり
●-152	0100066	SX246 №144	弥生土器	器台 (残)	裾部	—	(110)	にぶい 黄褐色	灰黄色・ 明赤褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱
●-153	00003411	SX246 №165	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	(116)	暗灰 黄色	暗灰 黄色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
●-154	00003397	SX246 №247	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	101	暗い 黄褐色	灰黄 褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
●-155	00003409	SX246 №133	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	104	にぶい 黄褐色・ 褐色	灰黄色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
●-156	00003406	SX246 №81	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	(98)	褐色	褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	ナデ	
●-157	00003413	SX246 №179	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	(125)	褐色・に ぶい褐色	褐色・に ぶい褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
●-158	00003408	SX246 №119	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	111	明赤褐色・ にぶい褐色	明褐色・ にぶい褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱により外面 一部青灰色気味
●-159	00003419	SX246 №68	弥生土器	器台 (残)	胴部～ 裾部	—	63	褐色	褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	—	被熱
35-160	00003416	SX246 №39	弥生土器	器台 (残)	支え部 ～胴部	—	(138)	暗褐色・ 黄褐色	暗褐色・ 褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ハケの ちナデ	ハケの ちナデ	
●-161	01000053	SX246 №94	弥生土器	器台 (残)	支え部 ～胴部	—	(122)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
●-162	00003401	SX246 №10	弥生土器	器台 (残)	支え部	—	(97)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	
●-163	00003405	SX246 №67	弥生土器	器台 (残)	支え部 ～胴部	—	(116)	褐色	褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
●-164	00003418	SX246 №57	弥生土器	器台 (残)	支え部 ～赤褐色	—	(122)	にぶい 褐色	赤褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	ハケ	ナデ	被熱
●-165	01000052	SX246 №47	弥生土器	器台 (残)	支え部	—	105	褐色・ 赤褐色	褐色・ 赤褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱
●-166	01000065	SX246 №111	弥生土器	器台 (残)	支え部 ～胴部	—	(126)	暗褐色	暗褐色・ 灰黄褐色・ 赤褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ハケ	
●-167	01000054	SX246 №83	弥生土器	器台 (残)	支え部 ～胴部	—	(118)	褐色	褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
●-168	00003422	SX246 №87	弥生土器	器台 (残)	胴部	—	—	褐色	灰黄 褐色	約6mm以下 の砂粒混入	良好	ハケ	ナデ	
36-169	00002927	SX246 №60	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	—	115	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	1mm前後の 砂粒混入	良好	絞りの ちナデ	ナデ	
●-170	00003395	SX246 №173	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	118	108 116	赤褐色・ 褐色	明褐色・ 褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
●-171	00003400	SX246 №267	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	—	(105)	にぶい 黄褐色・ 黒褐色	にぶい 黄褐色・ 黒褐色	約5mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
●-172	00003392	SX246 №103	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	94	97 104	明褐色・ 赤褐色・ 褐色	明褐色・ 赤褐色・ 褐色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
●-173	00003393	SX246 №135	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	110	(98) (106)	明褐色・ 褐色	褐色	約2mm以下 の砂粒混入	良好	指頭 圧痕	ナデ	
●-174	00003391	SX246 №72	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	—	(102)	赤褐色・ 褐色	赤褐色・ 褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
●-175	00003394	SX246 №166	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	115	99 104	にぶい 黄褐色・ 暗褐色	にぶい 黄褐色・ 暗褐色	約3mm以下 の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	
●-176	00003398	SX246 №251	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	112	107 92	褐色・に ぶい褐色・ 灰褐色	褐色・暗 灰黄色	約4mm以下 の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱により外面 一部青灰色気味
●-177	00002942	SX246 №176	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	—	(137)	にぶい 赤褐色	にぶい 赤褐色	1mm～2mm 大の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	被熱
●-178	00002937	SX246 №260	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	163	1315 127	赤褐色	赤褐色	細砂粒～1mm 前後の砂粒混入	良好	指頭圧痕 のちナデ	ナデ	被熱
●-179	00002936	SX246 №105	弥生土器	器台 (残)	ほぼ 完形	173	117	にぶい 黄褐色・ にぶい褐色	にぶい 黄褐色	細砂粒～2mm 前後の砂粒混入	良好	ナデ	ナデ	底面に棒状圧 痕あり
41-1	03002446	横濱 区磯子区 磯子土	土師器	灰口 甕	口縁 部破	—	(210)	茶褐色	茶褐色	1mm～2mm 大の砂粒混入	普通	不明瞭	不明瞭	

表12 2区出土木製品一覧表(1)

揮画番号	登録番号	出土地点	種別	器種	樹種	備考
38-1	0000890	SX246	杓子	容器部分の口径94×7.0cm、底の厚さ1.0cm、全体の高さ13.2cm		
41-2	0000889	下層水田畦畔土、NO2	田下駄	全長50.5cm、最大幅6.8cm、最大厚1.6cm	コナラ属クヌギ節	
*-3	0000900	下層水田畦畔土、NO1	田下駄	残存長25.0cm、最大幅6.3cm、最大厚1.6cm	コナラ属アカガシ亜属	
*-4	0000899	下層水田畦畔土、NO3	田下駄	残存長24.5cm、最大幅9.5cm、最大厚1.1cm	スギ	
46-3	0000898	SE244-1 NO8	不明	径6.0×5.3cm、最大厚2.5cm		
*-4	0000897	SE244-1 NO9	歯物	復元径12.6cm、残存長1.1cm、残存幅4.1cm、最大厚1.2cm	ヒノキ	
*-5	06002754	SE244 NO6	井戸杓	残存長97.2cm、残存幅31.2cm、最大厚7cm	クスノキ	
73-1	03000271	SD256、NO27	壓杵	全長90.9cm、握き部径9.5×8.8cm、99×9.5cm、握部径4.2×3.8cm	サカキ	
*-2	03000272	SD256、NO67	横槌	全長40.6cm、槌部径8.9×8.5cm、握部径3.7×3.5cm	コナラ属アカガシ亜属	
*-3	0000885	SD256	横槌	残存長24.9cm、最大長6.0cm、最大厚6.6cm	クリ	
*-4	0000856	SD256、NO53	横槌	全長26.8cm、槌部径4.9×4.3cm、握部径2.2×2.6cm	コナラ属アカガシ亜属	
74-5	0000880	SD256、NO61	横槌	全長33.8cm、槌部径8.8×7.5cm、握部径2.3×2.5cm	サカキ	
*-6	06000158	SD256、NO17	槌の子	残存長12.2cm、最大幅12.2cm、最大厚8.4cm	スギ	
*-7	0000876	SD256、NO10	机・天板	残存長27.9cm、最大幅9.1cm、最大厚2cm	カヤ	
*-8	0000866	SD256、NO12	部材	最大長19.4cm、最大幅4.9cm、最大厚1.6cm	スギ	
*-9	0000888	SD256	柄(横槌)	全長9.8cm、径6.2cm	ヤブツバキ	
*-10	0000884	SD256、NO15	柄	全長15cm、径4.2×3.7cm		
75-11	0000874	SD256、NO18	柄(横槌)	残存長40.7cm、最大幅2.4cm、最大厚1.5cm	タブノキ	
*-12	0000853	SD256、NO52	槌の子	全長14.2cm、径6.5×5.7cm	ヤブツバキ	
*-13	0000852	SD256、NO9	槌の子	全長16.8cm、径6.1×5.6cm	ヤブツバキ	
*-14	0000878	SD256、NO48	槌の子	全長16.7cm、径6.4×5.3cm	アブキ属	
*-15	06000109	西側柱強部 SD256	下駄	残存長13.2cm、最大幅7.5cm、最大厚4.6cm	ハンノキ属 ハンノキ節	
*-16	0000863	SD256、NO25	木履	残存長27.5cm、残存幅5.1cm、底の最大厚1.4cm	クスノキ	
*-17	0000892	SD256	鏝	残存長21.5cm、残存幅9.8cm、底の最大厚3.5cm	ヤマグワ	
*-18	06002800	SD256	鏝	残存長7.0cm、残存幅11.1cm、底の最大厚2.5cm		
76-19	0000875	SD256	槽	残存長42.9cm、残存幅10.4cm、器高6.0cm、底の最大厚2.0cm	スギ	
*-20	0000877	SD256、NO38	槽	全長39.8cm、残存幅11.5cm、内側長さ31.4cm、深さ5.0cm、器高6.5cm、底の最大厚2.0cm	クスノキ	
*-21	0000893	SD256、NO23	容器	全長41.0cm、器高12.0cm、底の最大厚1.4cm、内径長さ20.0cm、最大幅17cm、深さ8.4cm	イイギリ	
*-22	0000850	SD256、NO8	容器	全長15.3cm、最大幅11.3cm、底の最大厚1.6cm、器高5.8cm		
77-23	0000848	SD256、NO4	埴物皿	復元径19.5cm、残存長19.3cm、残存幅18.5cm、器高2.6cm、底の最大厚0.7cm		
*-24	0000849	SD256、NO2	埴物皿	復元径20.2cm、残存長17.5cm、残存幅10.0cm、器高2.7cm、底の最大厚0.9cm		
*-25	0000872	SD256、NO73	埴物皿	復元径18.0cm、残存長18.5cm、残存幅22.2cm、器高2.2cm、底の最大厚0.6cm	サクラ属	

表13 2区出土木製品一覧表 (2)

挿図番号	登録番号	出土地点	種別	器種	樹種	備考
77-26	0000857	SD256, NO7	挽物皿	径14.5cm, 器高3.8cm, 底の最大厚1.5cm	コナラ属 アカガシ亜属	
*-27	0000883	SD256, NO28	杓子形 木製品	最大長24.5cm, 最大幅9.0cm, 握部最大厚0.9cm		
*-28	0000887	SD256	曲物	径23.6cm, 最大厚0.7cm	モミ属	
78-29	0000858	SD256, NO69	曲物	径18.0cm, 最大厚0.5cm	モミ属	
*-30	0000871	SD256, NO6	曲物	復元径14.0cm, 残存長14.0cm, 残存幅10.5cm, 最大厚0.5cm		
*-31	0000851	SD256, NO21	曲物	復元径26.4cm, 残存長19.5cm, 残存幅4.8cm, 最大厚0.9cm		
*-32	0000896	SD256	曲物	復元径17.0cm, 残存長17.4cm, 残存幅6.2cm, 最大厚0.6cm	モミ属	
*-33	0000855	SD256	曲物	復元径16.8cm, 残存長14.9cm, 残存幅5.7cm, 最大厚0.7cm		
*-34	0000869	SD256, NO36	曲物	最大長22.0cm, 最大幅13.2cm, 最大厚0.6cm	ヒノキ	
*-35	0000854	SD256, NO72	曲物	残存長15.8cm, 残存幅3.7cm, 最大厚0.6cm	モミ属	
*-36	0000873	SD256, NO11	不明	全長35.5cm, 最大幅13.7cm, 器高4.3cm	スギ	
79-37	0000865	SD256, NO40	舟形	全長30.5cm, 最大幅5.6cm, 器高4.0cm, 内部長さ19.7cm, 深さ2.2cm	マツ属 接續管束亜属	
*-38	0000864	SD256	舟形	全長23.8cm, 最大幅5.6cm, 器高4.0cm, 内部長さ16.2cm, 最大幅3.5cm, 深さ1.8cm	スギ	
*-39	0000862	SD256, NO5	舟形	全長8.1cm, 最大幅2.3cm, 器高1.4cm		
*-40	0000894	SD256, NO24	舟形?	残存長14.8cm, 最大幅3.5cm, 底の最大厚1.3cm		
*-41	0000859	SD256, NO47	膝	残存長27.5cm, 最大幅6.0cm, 最大厚3.0cm		
80-42	0000881	SD256	機木部材	残存長21.5cm, 最大幅2.3cm, 最大厚1.8cm	モミ属	
*-43	0000860	SD256, NO9	紡錘車	最大長7.6cm, 最大幅6.0cm, 最大厚1.5cm		
*-44	0000882	SD256, NO13	火磨板	残存長18.8cm, 最大幅2.5cm, 最大厚1.8cm	スギ	
*-45	0000870	SD256, NO3	部材	残存長31.5cm, 径22×2.1cm		
*-46	0000867	SD256	部材	最大長32.1cm, 最大幅1.0cm, 最大厚1.0cm		
*-47	0000861	SD256, NO16	部材	最大長11.2cm, 最大幅1.5cm, 最大厚0.9cm		
*-48	0000886	SD256, NO20	叩板	残存長28.1cm, 残存幅8.7cm, 最大厚2.2cm		
*-49	0000879	SD256, NO46	柱	残存長17.1cm, 最大幅13.0cm, 最大厚0.9cm	タブノキ	
81-1	01000926	SD256, NO26	1号木筒	残存長19.1cm, 最大幅3.8cm, 最大厚3.0cm	マツ科モミ属	
82-1	01000929	SD256	9号木筒	残存長22.1cm, 最大幅3.0cm, 最大厚3.0cm	ヒノキ科 アスナロ属	

表14 2区SD256出土遺物一覧表(1) ※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
48-1	0000296	SD256地山直上	土師器 甕	(16.9)	(3.2)	にぶい貴褐色 黄褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
*2	0000294	SD256	土師器 甕	(24.5)	(4.6)	にぶい貴褐色 灰黄色	約2mm以下の 砂粒を含む	
*3	0000298	SD256上層	土師器 甕	(24.8)	(5.0)	褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
*4	0000300	SD256下層	土師器 甕	(24.4)	(5.2)	にぶい貴褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*5	00003380	SD256下層	土師器 甕	(23.8)	(7.4)	黒褐色	約4mm以下の 砂粒を含む	
*6	0000296	SD256コモ層	土師器 甕	(24.4)	(5.8)	にぶい貴褐色	約5mm以下の 砂粒を含む	
*7	00003381	SD256下層	土師器 甕	(24.2)	(7.1)	にぶい貴褐色 にぶい貴褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
49-8	00003308	西側拡張部	土師器 甕	(20.5)	(11.0)	暗灰色	約4mm以下の 砂粒を含む	
*9	00003379	SD256下層	土師器 甕	(24.6)	(5.1)	にぶい貴褐色 黒褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
*10	00003376	SD256上層	土師器 甕	(26.4)	(6.1)	にぶい貴褐色 黒褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
*11	0000297	SD256上層	土師器 甕	(25.6)	(6.7)	にぶい貴褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*12	0000299	SD256上層	土師器 甕	(29.8)	(10.0)	にぶい貴褐色 褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*13	00003378	SD256上層	土師器 甕	(31.6)	(4.8)	にぶい貴褐色 にぶい貴褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*14	00003377	SD256上層	土師器 甕	(22.8)	(4.8)	にぶい貴褐色	約5mm以下の 砂粒を含む	
50-15	00002917	SD256	土師器 甕	(25.7)	(12.45)	にぶい貴褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
*16	00003390	SD256下層	土師器 瓶	(29.4)	(12.7)	にぶい貴褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*17	00003389	SD256	土師器 瓶		(6.4)	灰黄色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*18	00003387	SD256上層	土師器 瓶		(7.9)	にぶい貴褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
*19	00003388	SD256下層	土師器 瓶		(8.0)	褐色	約5mm以下の 砂粒を含む	
51-20	00003383	SD256上層 SD256下層	土師器 壺	12.1	(7.8)	褐色	約4mm以下の 砂粒を含む	
*21	00003382	SD256下層	土師器 壺	(16.8)	(6.4)	にぶい貴褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
*22	00002982	SD256下層	土師器 蓋	(21.0)	(4.0)	褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
*23	00002562	SD256	土師器 蓋	(15.8)	(2.6)	黒褐色 褐色	精錬される	
*24	00002914	SD256上層	土師器 杯	13.15	4.6	にぶい貴褐色 明赤褐色	精錬される	
*25	00002913	SD256	土師器 杯	13.6	6.7	にぶい褐色 にぶい貴褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
*26	00002916	SD256下層No.94	土師器 杯	15.3	4.0	灰白色	精錬される	
*27	00002915	SD256下層	土師器 杯	14.8	3.4	にぶい貴褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
*28	00002963	SD256下層	土師器 杯	14.4	(3.4)	にぶい貴褐色 黒褐色	精錬される	
*29	00002904		土師器 杯	14.0	4.3	灰黄色	約2mm以下の 砂粒を含む	
*30	00002961	SD256上層	土師器 杯	13.6	3.25	褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	

表15 2区SD256出土遺物一覧表(2)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
51-31	00002965	SD256コモ層上	土師器 杯	13.4	3.5	にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002960	SD256上層	土師器 杯	13.6	3.5	褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+	00002901	SD256No.42	土師器 杯	13.68	3.8	灰黄色	精練される	
+	00002968	SD256上層	土師器 杯	13.5	3.6	にぶい黄褐色 黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002963	SD256	土師器 杯	13.0	4.1	にぶい黄褐色 褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002956	SD256 No.45	土師器 杯	13.1	6.9	浅黄褐色 黄褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+	06003304	西側拡張部	土師器 杯	12.9	3.9	にぶい黄褐色	微細粒を含む	
+	00002962	SD256下層	土師器 杯	13.1	3.6	灰白色	約3mm以下の砂粒を含む	
+	00002908	SD256上層	土師器 杯	13.0	3.6	にぶい黄褐色 黒褐色	細砂粒を含む	
+	00000600	SD256下層	土師器 杯	13.0	3.8	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	
+	00002969	SD256上層	土師器 杯	13.1	3.7	にぶい黄褐色	約4mm以下の砂粒を含む	
+	00002903	SD256下層	土師器 杯	13.0	3.6	灰黄色	細砂粒を含む	
+	0002902	SD256上層	土師器 杯	12.8	3.6	褐色	細砂粒を含む	
52-44	00002906	SD256上層	土師器 杯	12.9	3.6	にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+	00002964	SD256	土師器 杯	12.6	3.9	にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+	00002955	SD256	土師器 杯	12.4	3.9	にぶい黄褐色 褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002966		土師器 杯	12.8	3.1	にぶい黄褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+	00002907	SD256	土師器 杯	12.8	3.35	灰黄色	細砂粒を含む	
+	00002905	SD256コモ層上	土師器 杯	12.5	3.8	にぶい黄褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+	00002967	SD256上層	土師器 杯	12.0	3.6	浅黄褐色 黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002964	SD256コモ層上	土師器 杯	11.8	3.6	にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002911	SD256コモ層中	土師器 杯	10.7	2.9	にぶい黄褐色 灰黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	06003210	SD256No.65	土師器 杯	19.6	7.2	赤褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+	06003211	SD256土壇内	土師器 杯	12.2	4.7	赤褐色	細砂粒を含む	
+	00002993	SD256上層	土師器 高杯	12.3	8.8	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	
+	00002992	SD256	土師器 高杯		(4.9)	褐色 にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
53-57	00002968	SD256	土師器 碗	(13.1)	5.55	にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+	00002969	SD256	土師器 碗	(13.7)	6.3	にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+	00002972	SD256上層	土師器 碗	13.4	6.6	褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+	00002973	SD256コモ層上	土師器 碗	15.7	6.6	にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	

表16 2区SD256出土遺物一覧表(3)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
53-61	00002974	SD256	土師器 椀	15.2	6.5	橙色	約2mm以下の砂粒を含む	
62	00002971	SD256	土師器 椀	12.8	5.6	にぶい貴橙色	約2mm以下の砂粒を含む	
63	00002970	SD256	土師器 椀		(4.0)	にぶい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
64	00002980	SD256上層	土師器 椀		(3.1)	にぶい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
65	00002642	SD256上層	土師器 皿	(19.2)	(3.6)	にぶい貴橙色	精練される	
66	00002649		土師器 皿	(19.8)	(3.5)	にぶい貴橙色	精練される	
67	00002640	SD256上層	土師器 皿	(13.2)	(2.7)	にぶい貴橙色	精練される	
68	00002650		土師器 皿	(16.6)	(2.1)	にぶい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
69	00002648	SD256下層No.41	土師器 皿	(15.6)	(2.55)	にぶい貴橙色	細砂粒を含む	
70	00002644	SD256上層	土師器 皿	14.0	2.3	にぶい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
71	00002645	SD256上層No.57	土師器 皿	14.2	1.95	にぶい貴橙色	約2mm以下の砂粒を含む	
72	00002639	SD256 No.41	土師器 皿	14.7	1.9	にぶい貴橙色	約2mm以下の砂粒を含む	
73	00002647	SD256下層	土師器 皿	(15.6)	(1.6)	にぶい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
74	00002646	SD256下層	土師器 皿	(16.6)	(1.7)	橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
75	00002638	SD256	土師器 皿	(18.3)	(1.95)	にぶい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
76	00002641	SD256上層	土師器 皿	(20.2)	2.1	にぶい貴橙色	約2mm以下の砂粒を含む	
54-77	00000548	SD256地山直上	須恵器 杯蓋	14.2	4.3	明陶色 浅黄色	細砂粒を含む	
78	00000544	SD256 No.31	須恵器 杯蓋	13.1	3.5	灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
79	00000540	SD256下層	須恵器 杯蓋	13.0	(3.85)	灰色	細砂粒を含む	
80	00000543	SD256下層No.77	須恵器 杯蓋	12.6	3.8	灰色	細砂粒を含む	
81	00000545	SD256 No.64	須恵器 杯蓋	12.6	4.3	にぶい貴橙色	細砂粒を含む	
82	00000547	SD256 No.33	須恵器 杯蓋	12.55	4.15	淡黄色	細砂粒を含む	
83	00000546	SD256下層	須恵器 杯蓋	12.4	3.75	にぶい赤褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
84	06003307	西側拡張部	須恵器 杯蓋	(11.35)	3.625	黄灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
85	00000539		須恵器 杯蓋	11.0	3.05	黄灰色 灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
86	00000763	SD256下層	須恵器 杯	(12.8)	(3.9)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
87	00000764	SD256下層	須恵器 杯	(12.1)	(3.35)	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
88	00000752	SD256コモ層下	須恵器 杯	(12.0)	4.5	にぶい貴橙色	約3mm以下の砂粒を含む	
89	00000747	SD256 No.34	須恵器 杯	11.8	4.3	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
90	00000750	SD256 No.62	須恵器 杯	11.3	4.1	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	

表17 2区SD256出土遺物一覧表(4) ※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考	
				口径	高さ				
54-91	00000753	SD256コモ層下	須恵器 杯	11.3	41	にぶい黄橙色 灰黄褐色	約2mm以下の 砂粒を含む		
+	92	00000755	SD256下層	須恵器 杯	11.0	(39)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
+	93	00000760	SD256下層No.41	須恵器 杯	11.8	38	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	94	00000749	SD256 No.44	須恵器 杯	11.4	42	褐灰色 灰褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
+	95	00000762	SD256下層	須恵器 杯	11.2	(29)	灰白色 褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	96	00000748	SD256	須恵器 杯	11.1	41	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
+	97	00000745	SD256下層 No.30	須恵器 杯	11.3	38	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
+	98	00000757	SD256下層	須恵器 杯	10.9	33	灰赤色 褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	99	00000756	SD256 No.32	須恵器 杯	10.6	36	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	100	00000746	SD256	須恵器 杯	10.8	37	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
+	101	00000759	SD256下層	須恵器 杯	9.4	36	褐灰色 褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
+	102	00000761	SD256下層No.63	須恵器 杯	10.8	37	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
+	103	00000751	SD256	須恵器 杯	9.8	40	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
55-104	00000554	SD256	須恵器杯蓋	9.8	(22)	灰色	細砂粒を含む		
+	105	00000758	SD256下層	須恵器杯蓋	8.7	(24)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒 を含む	
+	106	00000555	SD256	須恵器杯蓋	13.4	29	灰色	細砂粒を含む	
+	107	00000556	SD256	須恵器杯蓋	15.5	25	灰色	細砂粒を含む	
+	108	00000550	SD256下層	須恵器杯蓋	14.8	315	灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
+	109	00000563	SD256上層	須恵器杯蓋	13.4	27	灰色	細砂粒を含む	
+	110	00000549	SD256	須恵器杯蓋	16.9	(33)	灰色	細砂粒を含む	
+	111	00000562	SD256下層	須恵器杯蓋	15.6	(21)	褐灰色 灰黄褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	112	00000557	SD256	須恵器杯蓋	14.6	26	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	113	00000571	SD256	須恵器杯蓋	16.9	(33)	赤褐色 灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	114	00000551	SD256下層	須恵器杯蓋	14.6	(25)	灰色 褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	115	00000561	SD256上層	須恵器杯蓋	14.8	(205)	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	
+	116	00000567	SD256上層	須恵器杯蓋	16.9	36	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	
+	117	00000553	SD256地山直上	須恵器杯蓋	8.25	375	にぶい赤褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	118	00000558	SD256	須恵器杯蓋	18.8	34	にぶい赤褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
+	119	00000570	SD256	須恵器杯蓋	14.2	235	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
+	120	00000569	SD256	須恵器杯蓋	14.65	35	灰黄色	約1mm以下の 砂粒を含む	

表18 2区SD256出土遺物一覧表 (5)

※復元値は ( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
55-121	0000559	SD256上層	須恵器杯蓋	17.2	(26)	にぶい赤褐色	細砂粒を含む	
・122	0000560	SD256	須恵器杯蓋	16.9	235	灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・123	0000568	SD256	須恵器杯蓋	16.8	(24)	にぶい黄褐色	約5mm以下の砂粒を含む	
・124	00002541	SD256下層	須恵器杯蓋	16.2	365	にぶい赤褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
・125	00002531	SD256上層	須恵器杯蓋	14.4	27	浅黄褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
・126	00002534	SD256	須恵器杯蓋	14.4	27	褐灰色 黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・127	00002542	SD256下層	須恵器杯蓋	13.6	17	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・128	00002552	SD256地山直上	須恵器杯蓋		(26)	灰黄色 褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・129	00002530	SD256コモ層下	須恵器杯蓋	13.0	205	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・130	00002542	SD256地山直上	須恵器杯蓋	18.8	26	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
56-131	00002570	SD256上層	須恵器杯蓋	19.8	22	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・132	00002563	SD256	須恵器杯蓋	15.8	21	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・133	00002575	SD256下層	須恵器杯蓋	12.6	(18)	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・134	00002564	SD256	須恵器杯蓋	14.2	(18)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・135	00002576	SD256	須恵器杯蓋	18.4	14	にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・136	00002566	SD256	須恵器杯蓋	15.4	09	褐灰色	細砂粒を含む	
・137	00002537	SD256下層	須恵器杯蓋	17.3	28	浅黄褐色 にぶい褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・138	00002540	SD256	須恵器杯蓋	15.2	265	にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・139	00002539	SD256	須恵器杯蓋	(15.6)	29	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・140	00002567	SD256上層	須恵器杯蓋	(16.6)	23	灰黄色	細砂粒を含む	
・141	00002568	SD256上層	須恵器杯蓋	(16.4)	(22)	浅黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・142	00002572	SD256下層	須恵器杯蓋	(17.3)	185	黒褐色	細砂粒を含む	
・143	00002569	SD256	須恵器杯蓋	(17.4)	(12)	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・144	00002538	SD256	須恵器杯蓋	15.3	32	褐灰色	約3mm以下の砂粒を含む	
・145	00002555	SD256上層	須恵器杯蓋		(29)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・146	00002557	SD256	須恵器杯蓋		(17)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・147	00002556	SD256上層	須恵器杯蓋		(16)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・148	00000541	SD256	須恵器 杯	9.0	35	灰色	細砂粒を含む	
・149	00002612	SD256地山直上 SD256下層	須恵器 杯	(9.2)	32	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・150	06003206	西側拡張 中央の落込み	須恵器 杯	(9.35)	(585)	灰色	微細粒を含む	

表19 2区SD256出土遺物一覧表 (6)

※復元値は ( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
56-151	00002600	SD256上層	須恵器 杯	12.7	(3.9)	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・152	00002611	SD256	須恵器 杯	(13.0)	3.9	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・153	00002909	SD256	須恵器 杯	14.6	4.1	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	
・154	00002912	SD256下層	須恵器 杯	(14.1)	3.65	灰白色	細砂粒を含む	
・155	00002621	SD256下層	須恵器 杯	(13.5)	(4.2)	黄灰色 黒褐色	細砂粒を含む	
・156	00002624	SD256下層	須恵器 杯	(13.4)	3.2	黄灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・157	00002625	SD256	須恵器 杯	(13.2)	4.45	にぶい黄褐色 灰黄色	約1mm以下の砂粒を含む	
・158	00002605	SD256	須恵器 杯	13.2	(3.45)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・159	00002623	SD256下層	須恵器 杯	(13.2)	4.0	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
57-160	00002602	SD256下層	須恵器 杯	13.1	4.0	灰黄色 にぶい黄褐色	細砂粒を含む	
・161	00002618	SD256	須恵器 杯	(12.9)	4.0	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・162	00002622	SD256下層	須恵器 杯	(12.8)	(3.9)	灰白色 灰黄色	約1mm以下の砂粒を含む	
・163	00002616	SD256 No.50	須恵器 杯	12.8	3.9	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・164	00002620	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	(12.7)	(3.7)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・165	00002626	SD256コモ層上	須恵器 杯	12.6	4.0	褐灰色	細砂粒を含む	
・166	00002619	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	12.6	4.0	褐灰色 にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・167	00002604	SD256コモ層上	須恵器 杯	12.6	3.3	にぶい赤褐色 褐灰色	細砂粒を含む	
・168	00002617	SD256コモ層上	須恵器 杯	(12.2)	(3.7)	にぶい赤褐色 黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・169	00002603	SD256下層	須恵器 杯	(12.4)	4.4	褐灰色	約5mm以下の砂粒を含む	
・170	00002601	SD256下層	須恵器 杯	(13.4)	(3.7)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・171	00002910	SD256下層	須恵器 杯	12.0	4.3	灰白色	約1mm以下の砂粒を含む	
・172	00002979	SD256	須恵器 杯	14.6	4.8	灰黄色 褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
・173	00000784	SD256下層	須恵器 杯	(13.7)	4.5	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・174	00000778	SD256コモ層上	須恵器 杯	(16.0)	6.7	灰黄色	約1mm以下の砂粒を含む	
・175	00000787	SD256	須恵器 杯	(14.4)	4.5	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・176	06003305	西側拡張部	須恵器 杯	(13.8)	4.7	灰黄色 灰白色	微細粒を含む	
・177	00000788	SD256	須恵器 杯	(8.0)	(5.2)	灰黄色	約2mm以下の砂粒を含む	
・178	00000580	SD256上層	須恵器 杯	19.2	5.85	灰色 褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・179	00000796	SD256	須恵器 杯	(14.0)	4.2	暗灰黄色 にぶい褐色	約4mm以下の砂粒を含む	
・180	00000782	SD256下層	須恵器 杯		(1.8)	赤灰色	約1mm以下の砂粒を含む	

表20 2区SD256出土遺物一覧表(7)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
57-181	0000769	表土一括	須恵器 杯		(19)	にぶい赤褐色 灰褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・182	0000776	SD256地山直上	須恵器 杯		(18)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・183	0000775	SD256地山直上	須恵器 杯		(20)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・184	0000767		須恵器 杯		(20)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
58-185	0000770	SD256コモ層上	須恵器 杯		(42)	褐灰色	約4mm以下の 砂粒を含む	
・186	0000781	SD256下層	須恵器 杯		(23)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・187	0000772	SD256	須恵器 杯		(33)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・188	0000774	SD256コモ層上	須恵器 杯		(23)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・189	0000780	SD256上層	須恵器 杯		(19)	灰黄色 にぶい赤褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・190	0000789	SD256	須恵器 杯		(20)	灰黄色 にぶい赤褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・191	0000783	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	14.2	5.9	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・192	0000794	SD256	須恵器 杯	12.15	4.3	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・193	0000797	SD256下層	須恵器 杯	12.8	3.7	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・194	0000792	SD256	須恵器 杯	(12.8)	4.0	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・195	0000795	SD256	須恵器 杯	13.3	3.8	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・196	0000779	SD256上層	須恵器 杯	(13.3)	(5.1)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・197	00002501	SD256下層	須恵器 杯	(13.8)	3.7	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・198	00002981	SD256下層	須恵器 杯	14.25	4.55	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・199	0000587	SD256	須恵器 杯	12.8	3.75	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・200	0000576	SD256下層	須恵器 杯	8.3	5.9	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・201	00002507	SD256下層	須恵器 杯	12.1	3.4	灰黄色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・202	0000584	SD256下層	須恵器 杯	12.1	3.6	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・203	00002978	SD256	須恵器 杯	12.6	4.05	灰黄色 黄灰色	細砂粒を含む	
・204	0000799	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	12.8	4.1	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・205	0000593	SD256	須恵器 杯	12.8	3.4	灰色	細砂粒を含む	
・206	0000800	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	13.2	4.1	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・207	0000582	SD256上層	須恵器 杯	13.7	3.5	灰色	約4mm以下の 砂粒を含む	
・208	0000581	SD256上層	須恵器 杯	13.7	4.7	灰白色	細砂粒を含む	
・209	0000791	SD256	須恵器 杯	13.8	3.2	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・210	0000596	SD256	須恵器 杯	14.2	4.4	灰色 黒灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	

表21 2区SD256出土遺物一覧表 (8)

※復元値は ( )

No	登録番号	出土地点	器種	法料		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
58-211	00002977	SD256	須恵器 杯	14.4	4.2	灰黄色	約3mm以下の砂粒を含む	
・212	00000594	SD256	須恵器 杯	15.6	4.2	灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・213	00000575	SD256上層	須恵器 杯	10.9	4.5	灰色	細砂粒を含む	
59-214	00000595	SD256 表土一括	須恵器 杯	11.4	4.1	灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・215	00000790	SD256	須恵器 杯	12.4	3.4	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・216	00002508	SD256下層 No41	須恵器 杯	13.0	4.5	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・217	00002576	SD256	須恵器 杯	13.2	4.45	灰黄色 にふい貴橙色	細砂粒を含む	
・218	00002506	SD256下層	須恵器 杯	13.7	4.4	褐灰色	細砂粒を含む	
・219	00000793	SD256	須恵器 杯	13.8	4.1	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・220	00000592	SD256	須恵器 杯	14.5	4.3	灰色	細砂粒を含む	
・221	00002503	SD256下層	須恵器 杯	(15.0)	3.8	黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・222	00002505	SD256下層	須恵器 杯	(16.6)	5.6	黄灰色 にふい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
・223	00005688	SD256	須恵器 杯	11.65	4.35	灰色	細砂粒を含む	
・224	00000577	SD256下層	須恵器 杯	6.7	5.5	灰黄色 黄灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・225	00000579	SD256	須恵器 杯	16.5	6.25	灰色	細砂粒を含む	
・226	00000586	SD256下層	須恵器 杯	13.05	4.45	灰黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・227	00000798	SD256上層	須恵器 杯	(13.6)	(3.9)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・228	00000771	SD256	須恵器 杯		(4.9)	灰黄色 にふい貴橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
・229	00000597	SD256	須恵器 杯		(2.15)	橙色	細砂粒を含む	
・230	00000573	SD256	須恵器 杯		(2.7)	灰色	細砂粒を含む	
・231	00000574	表土一括	須恵器 杯		(2.6)	灰色	細砂粒を含む	
・232	00002609	SD256下層	須恵器 杯	(12.8)	(3.2)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・233	00002608	SD256下層	須恵器 杯	(13.0)	(3.6)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・234	00002606	SD256地山直上	須恵器 杯	(13.2)	(3.3)	灰黄色 黄灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・235	00002607	SD256上層	須恵器 杯	(14.2)	(2.9)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・236	00002610	SD256下層	須恵器 杯	(14.2)	(3.4)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・237	00002599	SD256下層	須恵器 杯	(14.4)	(3.6)	灰黄色 黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・238	00002614	SD256下層	須恵器 杯	(15.8)	(5.2)	褐灰色	約3mm以下の砂粒を含む	
60-239	00002615	SD256下層 No41	須恵器 碗	(15.0)	(6.4)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・240	00002613	SD256下層 SD256地山直上	須恵器 碗	17.8	9.8	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	

表22 2区SD256出土遺物一覧表(9)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
60-241	00002510	SD256下層	須恵器 高杯	(10.2)	(7.7)	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・242	00002509	SD256下層	須恵器 高杯	17.8	9.8	にぶい赤褐色 にぶい橙色	約5mm以下の砂粒を含む	
・243	00002513	SD256地山直上 SD256下層	須恵器 高杯		(4.7)	黒褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
・244	04000089	SD256	須恵器 高杯		(7.7)	灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・245	00002511	SD256	須恵器 高杯		(3.4)	暗赤褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
・246	00002514	SD256下層	須恵器 高杯		(4.0)	にぶい黄橙色	細砂粒を含む	
・247	00002587	SD256コモ層上	須恵器 皿	13.6	2.2	灰黄色 黒褐色	細砂粒を含む	
・248	00002584	SD256上層	須恵器 皿	14.0	2.4	褐灰色	約3mm以下の砂粒を含む	
・249	00002585	SD256下層	須恵器 皿	(14.0)	2.3	灰黄色	約1mm以下の砂粒を含む	
・250	00002592	SD256上層 SD256下層	須恵器 皿	14.4	2.1	灰黄色	細砂粒を含む	
・251	00002591	SD256 No.43	須恵器 皿	14.6	2.4	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・252	00002598	SD256下層	須恵器 皿	15.0	1.7	暗褐色 暗灰黄色	約3mm以下の砂粒を含む	
・253	00002586	SD256下層	須恵器 皿	15.1	(2.1)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・254	00002589		須恵器 皿	15.0	(2.1)	灰黄色 黒褐色	細砂粒を含む	
・255	00002590	SD256	須恵器 皿	15.2	2.1	黄褐色 灰白色	約2mm以下の砂粒を含む	
・256	00002583	SD256	須恵器 皿	(17.6)	2.0	灰黄色	約1mm以下の砂粒を含む	
・257	00002582	SD256	須恵器 皿	(17.8)	1.9	浅黄橙色	約1mm以下の砂粒を含む	
・258	00002594	SD256	須恵器 皿	(18.6)	(2.7)	灰黄色 黄灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・259	00002595	SD256下層	須恵器 皿	(20.0)	(2.5)	灰黄色 黄灰色	細砂粒を含む	
・260	00002597	SD256下層 No.41	須恵器 皿	(20.0)	2.6	灰黄色	細砂粒を含む	
・261	00002596	SD256下層	須恵器 皿	(20.8)	(1.65)	灰黄色	約1mm以下の砂粒を含む	
・262	04000087	SD256	須恵器 蓋	(16.6)	3.9	灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・263	00002518	SD256上層	須恵器 壺	(13.0)	9.1	褐灰色	約3mm以下の砂粒を含む	
61-264	00002519	SD256上層	須恵器 壺	(15.4)	(17.1)	褐灰色	約3mm以下の砂粒を含む	
・265	00002520	SD256上層	須恵器 壺	(12.6)	(10.8)	黄灰色 褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・266	00002524	SD256下層	須恵器 壺		(12.4)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
・267	04000085	SD256	須恵器 壺		(23.0)	灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・268	04000086	SD256	須恵器 壺	10.6	(12.9)	灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
・269	00002516	SD256下層	須恵器 平瓶	(8.2)	(7.3)	黒褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
・270	06000145	SD256	須恵器 平瓶	(8.4)		灰色	微細粒を含む	

表23 2区SD256出土遺物一覧表(10)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
62-271	00002523	SD256下層	須恵器 壺	(10.0)	(7.7)	褐灰色 黒褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・272	00002522	SD256下層 SD256地山直上	須恵器 壺	(10.2)	(4.5)	褐灰色		
・273	00002521	SD256下層 SD256地山直上	須恵器 壺	6.8	(3.9)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・274	00000768	表土一括	須恵器 壺	(10.8)	3.1	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・275	04000088	SD256	須恵器 壺	(14.6)	(4.0)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・276	00000598	SD256地山直上	須恵器 甕	20.3	(42.2)	灰色	細砂粒を含む	
63-277	00002631	SD256	須恵器 甕	(22.4)	(4.6)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・278	00002634	SD256下層	須恵器 甕	(20.6)	(5.9)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・279	00002636	SD256下層	須恵器 甕	(22.9)	(7.4)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・280	00002629	SD256地山直上	須恵器 甕		(5.7)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・281	00002637	SD256コモ層上	須恵器 甕	(19.9)	(5.4)	にぶい赤褐色 褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・282	00002632	SD256	須恵器 甕	(14.9)	(3.7)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・283	00002635	SD256下層	須恵器 甕	(25.0)	(5.8)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・284	00002633	SD256	須恵器 甕	(23.6)	(5.3)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・285	06003309	西側拡張部	須恵器 甕	(18.55)	(6.85)	灰色	微細粒を含む	
64-286	00000599	SD256下層	須恵器 甕	22.6	(25.2)	灰色	細砂粒を含む	
・287	00002630	SD256	須恵器 甕	(43.6)	(7.6)	灰黄褐色 灰黄色	細砂粒を含む	
・288	06000148	SD256地山直上	瓦質土器?	(4.2)	(3.8)	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・289	00002975	SD256上層	黒色土器 椀	(15.4)	(5.8)	にぶい黄褐色 黒褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・290	00000578	SD256	灰輪陶器? 杯	13.2	5.25	灰色	約2mm以下の砂粒 を含む	
・291	06000146	SD256下層	土製品 人形土製品	(3.8)	(3.1)	にぶい黄褐色	細砂粒を含む	
・292	00003386	SD256	土製品 移動式甕		(5.0)	にぶい黄褐色 黒褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
65-293	06003212	西側拡張部	土製品 瓦	(9.1)	(13.9)	にぶい黄褐色		
・294	06002756		須恵器 中空円面甕	9.4	3.4	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・295	00002533	SD256上層	須恵器甕 転用甕	(13.22)	1.65	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・296	00002535	SD256下層	須恵器甕 転用甕	(14.0)	1.6	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・297	060002851	SD256下層	須恵器甕 転用甕	13.5	(3.4)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・298	06002852	SD256下層	須恵器甕 転用甕	(14.0)	2.55	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・299	06002848	SD256下層	須恵器甕 転用甕		(1.4)	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・300	00002573	SD256下層	須恵器甕 転用甕	(13.6)	(1.4)	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	

表24 2区SD256出土遺物一覧表(11)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
65-301	06002846	SD256	須恵器蓋 転用碗		(10)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
66-302	00002536	SD256下層	須恵器蓋 転用碗	14.7	3.0	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・-303	00002529	SD256	須恵器蓋 転用碗	(15.0)	2.5	黒褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-304	00002571	SD256上層	須恵器蓋 転用碗	(16.8)	(115)	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-305	00002532	SD256上層	須恵器蓋 転用碗	15.6	3.3	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-306	00002528	SD256	須恵器蓋 転用碗	20.4	1.4	褐灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・-307	00000756	SD256	須恵器杯 転用碗	12.5	3.5	褐灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
67-308	00002849	SD256	須恵器杯 転用碗	(15.0)	3.9	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-309	06002850	SD256	須恵器碗 転用碗	(13.6)	3.7	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-310	00000585	SD256下層	須恵器杯 転用碗	15.9	3.7	灰色	細砂粒を含む	
・-311	06002847	SD256下層	須恵器杯 転用碗	(14.0)	(3.5)	灰白色 黄灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-312	00002502	SD256下層	須恵器杯 転用碗	(12.6)	4.4	褐灰色	細砂粒を含む	
・-313	00002504	SD256下層	須恵器杯 転用碗	(14.2)	3.7	褐灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-314	00000583	SD256下層	須恵器杯 転用碗		(14)	灰色	細砂粒を含む	
・-315	00002588	SD256コモ層下	須恵器皿 転用碗	(16.4)	1.8	灰黄色	約1mm以下の 砂粒を含む	
68-316	03000355	SD256上層	須恵器 蓋		(32)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-317	03000347	SD256下層	須恵器 蓋	(13.6)	(3.7)	にぶい黄褐色 黄灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・-318	03000346	SD256下層	須恵器 蓋	(14.3)	(12)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-319	03000342	SD256上層	須恵器 蓋	14.6	2.0	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-320	03000344	SD256	須恵器 蓋	16.3	(10)	灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・-321	03000375	SD256下層	須恵器 蓋	(24)	(23)	黒色 灰白色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-322	03000341	SD256上層	須恵器 蓋			灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-323	03000343	SD256	須恵器 蓋			灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-324	03000354	SD256下層	須恵器 蓋	(16.4)	2.9	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-325	03000345	北壁トレンチ	須恵器 杯	(12.0)	3.4	灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・-326	03000367	SD256下層	須恵器 杯	(12.2)	4.0	にぶい黄褐色 灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
69-327	03000359	SD256下層	須恵器 杯	(13.0)	(38)	にぶい黄褐色 浅黄褐色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・-328	03000370	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	(7.7)	(365)	灰白色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・-329	03000366	SD256下層	須恵器 杯	(13.0)	(20)	灰白色 にぶい黄褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・-330	03000361	SD256	須恵器 杯	(7.7)	(18)	にぶい黄褐色 浅黄褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	

表25 2区SD256出土遺物一覧表(12)

※復元値は( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
69-331	03000348	SD256コモ層上	須恵器 杯	(9.3)	(26)	黄灰色 灰白色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・332	03000351	SD256上層	須恵器 杯	(8.4)	(24)	浅黄色 灰白色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・333	03000357	SD256下層	須恵器 杯	(12.2)	(34)	黄灰色 灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・334	03000350	SD256	須恵器 杯	14.0	4.35	灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・335	00000572	SD256	須恵器 杯	15.5	5.7	にぶい黄褐色 灰色	細砂粒を含む	
・336	03000360	SD256	須恵器 杯	(12.3)	(41)	灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・337	03000364	SD256下層	須恵器 杯	(16.4)	(56)	灰白色	約4mm以下の 砂粒を含む	
70-338	03000353	SD256上層 SD256下層	須恵器 杯	(16.6)	(59)	黄灰色 灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・339	03000356	SD256下層	須恵器 杯	(16.4)	(605)	灰色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・340	03000340	西側拡張部	須恵器 杯		(18)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・341	06002845	SD256	須恵器 杯		(25)	黄灰色 灰色	約4mm以下の 砂粒を含む	
・342	03000352	SD256	須恵器 杯		(33)	灰色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・343	03000362	SD256	須恵器 杯		21	灰色	約4mm以下の 砂粒を含む	
・344	03000373	SD256	須恵器 皿		28	灰白色	約4mm以下の 砂粒を含む	
・345	00002581	SD256地山直上	須恵器 皿	(15.2)	(21)	褐灰色	約5mm以下の 砂粒を含む	
・346	03000368	SD256下層	須恵器 皿			灰白色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・347	03000358	SD256上層	須恵器 杯			灰色	約3mm以下の 砂粒を含む	
・348	03000365	SD256下層	須恵器 甕			灰色	約4mm以下の 砂粒を含む	
71-349	03000377	SD256上層	土師器 杯蓋	17.9	39	灰黄色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・350	03000365	SD256下層	土師器 杯蓋	(15.8)	(24)	暗灰黄色 灰黄色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・351	03000349	SD256	土師器 杯	(13.2)	4.2	灰黄褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・352	03000374	SD256上層	土師器 杯	(12.4)	3.2	褐色	約2mm以下の 砂粒を含む	
・353	03000372	SD256下層	土師器 杯		(24)		約2mm以下の 砂粒を含む	
・354	03000371	SD256	土師器 杯		(25)	浅黄色	約1mm以下の 砂粒を含む	
・355	03000376	SD256下層	土師器 杯		(15)	灰白色 灰黄色	細砂粒を含む	
・356	03000369	SD256下層	土師器 皿	(14.6)	(135)	にぶい黄褐色 褐色	約1mm以下の 砂粒を含む	

表26 2区その他の遺構出土土器一覧表 ※復元値は ( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
44-1	00002579	SB202 P10	須恵器 杯蓋	(14.4)	(1.7)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
+2	00002989	SA240 P05	土師器 杯	(12.2)	3.5	灰黄色 浅黄褐色	細砂粒を含む	
45-1	00002991	SK221	黒色土器 椀	(14.2)	6.1	黒褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+2	00003385	SK204	土師器 甕	(18.8)	(7.9)	にぶい褐色	約4mm以下の砂粒を含む	
46-1	00002580	SE244	須恵器 杯蓋	(14.4)	(1.7)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
+2	00002593	SE244 No.1	須恵器 皿	(19.4)	2.3	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
83-1	00002554	SD205	須恵器 杯蓋		(1.7)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
+2	00002990	SD243	須恵器 杯	13.2	3.6	灰黄色	約4mm以下の砂粒を含む	
85-1	04000091	J・K-12 水田下層	須恵器			灰白色 灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
+2	00002554	K-12・13 水田下層	須恵器 杯			灰白色	約1mm以下の砂粒を含む	
+3	06002837	水田面No.1	土師器 杯			にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+4	00002951	D-10Gr No.2	土師器 小皿			にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	

表27 2区包含層出土土器一覧表 (1) ※復元値は ( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
86-1	04000093	D-12Gr No.2	弥生土器 甕		3.8	灰色 黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+2	00002987	D-10Gr No.4	土師器 杯	14.4	6.8	にぶい黄褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+3	00002985	D-10Gr No.1	土師器 杯	14.4	4.1	にぶい黄褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+4	00002986	D-10Gr No.3	土師器 杯	13.5	3.6	褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
+5	00002984	D-9Gr	土師器 杯	(12.8)	4.0	にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+6	00002967	検出面	土師器 杯	12.7	(3.5)	にぶい褐色	細砂粒を含む	
+7	00002983	D-9Gr	土師器 杯	12.4	(4.3)	黄褐色 にぶい褐色	約5mm以下の砂粒を含む	
+8	00002988	D-10Gr	土師器 杯	(16.8)	5.0	にぶい黄褐色	約4mm以下の砂粒を含む	
+9	00002951	D-10Gr No.2	土師器 皿	14.5	1.8	にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
+10	00002952	D-9Gr	土師器 皿	(17.2)	1.7	褐色	約2mm以下の砂粒を含む	
+11	00000564	検出面	須恵器 杯蓋	14.5	2.15	灰色	細砂粒を含む	
+12	00000565	検出面	須恵器 杯蓋	12.4	2.0	灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
+13	00002577	C-11Gr	須恵器 杯蓋	14.4	(1.5)	灰黄色	細砂粒を含む	
+14	00002578	D-9Gr	須恵器 杯蓋	(18.6)	1.8	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
+15	00002561	E-8Gr	須恵器 杯蓋		(2.1)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	

表28 2区包含層出土土器一覧表 (2) ※復元値は ( )

No	登録番号	出土地点	器種	法量		色調	胎土	備考
				口径	高さ			
86-16	00002559	D-12Gr	須恵器 杯蓋		(25)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
*17	00002560	F-12Gr	須恵器 杯蓋		(24)	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
*18	00000766	F-12Gr	須恵器 杯	9.6	(30)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
*19	00002627	C-11Gr	須恵器 杯	(13.2)	(35)	褐灰色	細砂粒を含む	
*20	00000389	D-10Gr	須恵器 杯	12.75	(49)		約1mm以下の砂粒を含む	
*21	00000786	D-12Gr	須恵器 杯	(14.0)	6.6	褐灰色	約2mm以下の砂粒を含む	
*22	00002526	D-9Gr	須恵器 壺		(11.3)	暗灰黄色 にぶい黄褐色	約1mm以下の砂粒を含む	
*23	06000147	F-12Gr No.1	灰輪陶器? 壺		(9.0)	灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
*24	00002512	D-11Gr	須恵器 高杯		(26)	褐灰色	約1mm以下の砂粒を含む	
*25	06000104	F-12Gr	土師器 皿	(9.0)	1.7	褐色	約3mm以下の砂粒を含む	
*26	06000096	F-12Gr	白磁 碗		(22)	灰白色		
*27	06000098		陶器 碗		1.8	灰色		
*28	06000099	F-12Gr	陶器 碗	(5.2)	(16)	灰色	約1mm以下の砂粒を含む	

表29 2区出土石器一覧表

No	登録番号	出土地点	器種	法量		石材	備考
				口径	高さ		
87-1	06002879	SD256西側拡張部	石鎌	13.7	4.0	頁岩製砂岩	
*2	06000126	SD256下層	砥石	11.5	3.6	砂岩	
*3	06000127	J4Gr 水田面	打製石鎌	2.5	1.6	黒曜石	

## VI 3区の調査

### 1. 概要

5区の北側、2区の西側に位置する。現道を挟んだ調査区であるため約115㎡と狭く遺構の大部分は調査区外にのびる。2区の南側から5区は低地部になり、自然流路であるSD256やSD550、直線溝であるSD551を挟んで北側に位置する3区から2区北側は微高地になり、立地上は3区、2区の建物群は一連のものと考えてよからう。標高は約4m前後である。

遺構には掘立柱建物5棟、土坑や溝、小穴がある。掘立柱建物の配置は規格性がなく、規模も4棟が梁行1間と小さい。遺物は大半が小破片で当該時期で図化した土器はない。

### 2. 遺構

#### (1)掘立柱建物跡

##### SB315

調査区南側の中央に位置し、建物は調査区外にのびる。北東部にある柱穴を入れて桁行3間以上と考えてもいいが、それに対する柱穴が調査区外であることや、桁行の軸がずれることから桁行2間以上で南側が調査区外にのびると考える。東方約1mにはSB320が、北方約1mにはSB319がある。長軸方位はN33° Eで桁行2間以上、梁行1間の掘立柱建物である。桁行の柱間1.9m～2.1mで梁行の柱間1.9mである。柱穴はP2、P3、P5が径約45cmの円形で、P4、P6は長径50cm～70cmの不整円形である。

##### SB316

調査区の東側に位置し、建物は調査区外にのびると思われる。調査区内で完結したら1間×1間の掘立柱建物になる。調査区外にのびたら桁行2間以上、梁間1間になる。西方約6mにSB317がある。長軸方位はN68° Wである。桁行の柱間1.4m～1.5mで梁行の柱間1.05mである。柱穴はP1、P3が径40～45cmの円形で、P4は径50cmの隅丸方形である。

##### SB317

調査区南側の中央に位置し、建物は調査区外にのびる。SB320と切り合い、東方約6mにSB316がある。長軸方位はN21° Eで桁行2間以上、梁間1間の掘立柱建物である。桁行の柱間は0.9m～1.0mで梁行の柱間1.4mである。柱穴はP1、P4、P5が径約35cm～50cmの不整円形で、P2は長径62cmの楕円形である。

##### SB319

調査区北側の中央に位置し、建物は調査区外にのびる。南方約2mにSB315やSB320がある。建物が調査区で完結したら桁行2間、梁間1間の東西棟になるが、建物が貧弱すぎるため梁間2間の南北棟とした。長軸方位はN6° Wで桁行2間以上、梁間2間か？桁行の柱間1.6m、梁行の柱間1.5mである。柱穴は径45cm～60cmの不整円形である。3区のなかでは柱穴も大きく、柱穴間も規格性をもつ。

##### SB320

調査区南側の中央に位置し、建物は調査区外にのびる。SB317と切り合い、西方約1mにSB315がある。北西隅の柱穴がSD310と切り合い、検出できなかった。長軸方位はN52° Wで桁行3間以上、梁間1間の掘立柱建物である。桁行の柱間1.3m、梁行の柱間1.7mである。柱穴は径約50cm前後の不整円形である。



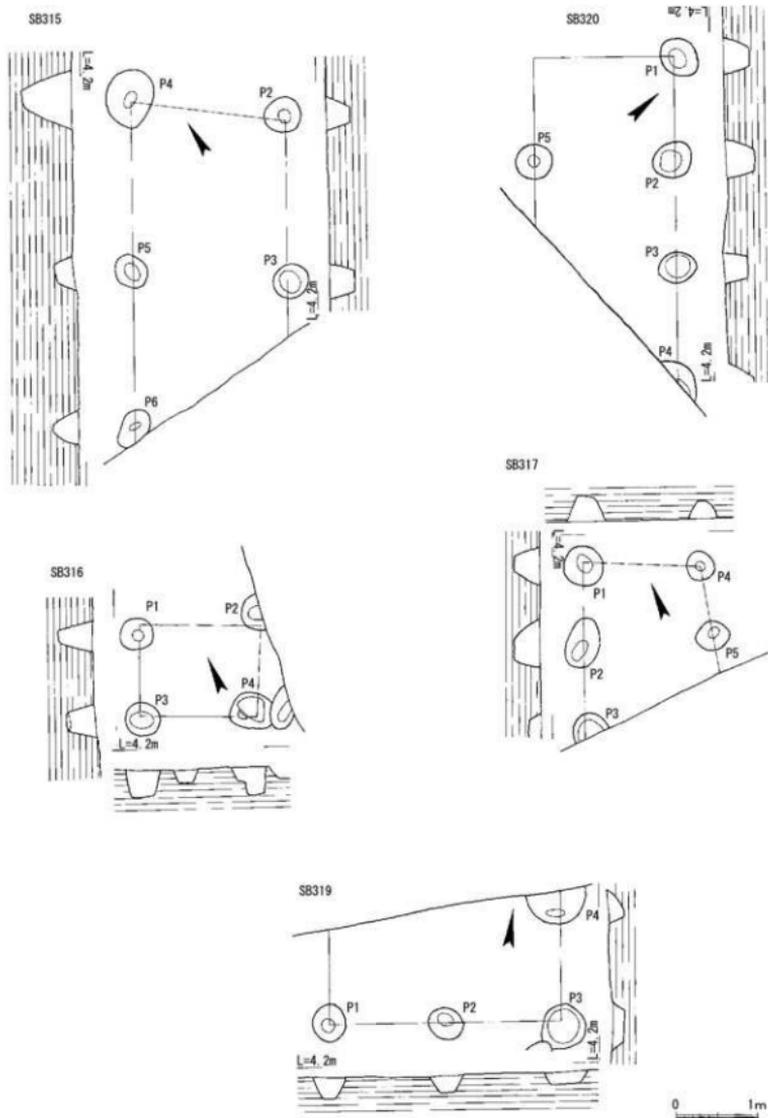


図89 掘立柱建物跡 (1/60)

## (2) 土坑

### SK313

調査区北壁沿い中央に位置する。南東約0.5mにはSB315が東方約1.5mにはSB319がある。土坑の北半部が調査区外にのび、全掘できなかつた。現状でみるかぎり平面形態は南北に長い不整楕円形である。短軸の長さは約1m、深さは約45cmである。埋土は1層褐色砂質土、2層黄褐色砂質土、3層、にぶい黄褐色砂質土で図化できるほどの遺物は出土していない。

### SK314

調査区の南西隅に位置する。北東約9mにはSK313がある。土坑の南半部が調査区外にのび、全掘できなかつた。現状でみるかぎり平面形態は不整な方形か？遺存する最大幅は1.77mで深さ約1mである。埋土は自然堆積の状態を示し黒褐色土、黄褐色土で図化できるほどの遺物は出土していない。

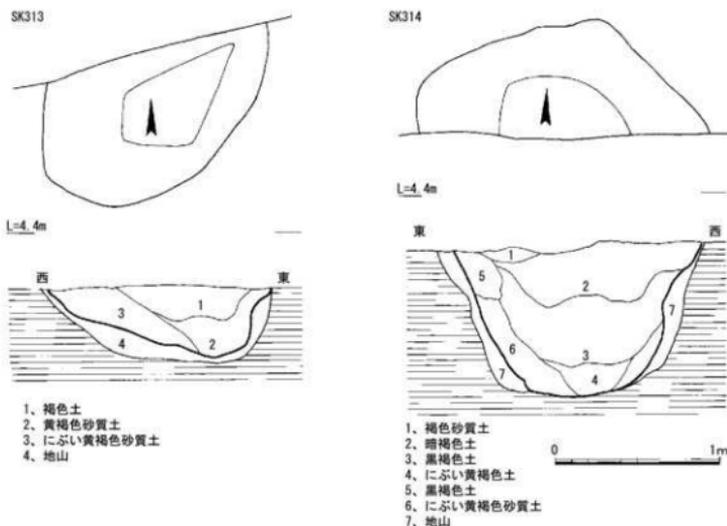


図90 SK313, 314土坑 (1/30)

## (3) 溝跡

調査区内全体に南北方向および東西方向に併走する溝跡がある。調査区が狭いため溝跡は調査区外にのびる。溝幅は約30cm～70cmで深さは約10cm～20cmである。掘立柱建物と切り合うが、新旧は明確にはわからない。出土遺物もなく時期も決定できない。

## 3. 遺物

実測可能遺物は包含層から1点出土している。

1は包含層出土の磨製石鏃。先端部と茎部下端を欠損する。身部は厚みがあり、茎部は六角形を呈する。側縁部下端は茎部にむかい抉りが入る。

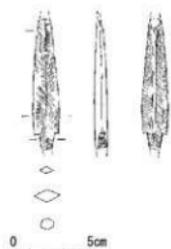


図91 3区出土遺物